

2017年度

教師海外研修プログラム(マラウイ)

報 告 書



2018年(平成30年)



独立行政法人 国際協力機構
九州国際センター (JICA九州)

はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）は日本でグローバル化と持続可能な社会に対応した教育のニーズが高まる中、JICA が有する途上国の現状や国際協力活動に関する知見を教育の場に還元すると共に、JICA の関与に関わらず、広く開発教育 / 国際理解教育の「機会を提供」し、教員、自治体、教育委員会、NGO 等の市民団体とのネットワークを構築し、「開発教育の担い手の拡充」を図る支援を行う等地域での開発教育推進のための「橋渡し役」を担うことで貢献していく方針です。

教師海外研修は、そうした開発教育 / 国際理解教育での貢献につながる事業のひとつとして小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教師、及び教育委員会の指導主事等を対象に、開発途上国がおかれている現状、日本との関係や国際協力への理解を深めるとともに、次世代を担う、児童、生徒の国際理解に役立てることを目的として行われています。

2017 年度は「生き抜く力」をテーマに、九州各地から 8 名の教員の方々が、7 月 29 日から 8 月 9 日までの 12 日間、日本が長年教育分野における技術支援に取り組んでいるアフリカのマラウイにて現地研修を行い、この研修を基に国際理解教育の授業を実施いただきました。

事前研修では、マラウイの概要を始め、マラウイでの研修を体験された前年度参加の先生の体験談を伺ったり、国際理解教育とは何かを話し合いながら、各参加者が個別の課題を決めてマラウイでの視察に臨みました。

現地での研修では、教育における技術プロジェクトの現場での日本人専門家 / マラウイ人教師との意見交換や子どもたちとの交流、青年海外協力隊が活動する複数の現場での住民と共にかまど作りするなどの様々な経験を通して、マラウイからたくさんの学びを得ていただきました。

事後研修では、現地訪問で得たことを授業実践するための国際理解教育、開発教育の手法について学び、実際の授業へ臨まれました。

この研修への参加経験を活かし、其々の学校で授業実践に取り組まれましたので、この度、その成果を冊子として取りまとめることになりました。

ご参加いただいた教員の方々の熱意に敬意を表すとともに、今回のご経験をさらに学校内外で活用され、グローバル化が進む世の中で、将来を担う子供たちの将来の糧としていただき、この冊子が、開発途上国を題材とした国際理解教育に関心のある方々の参考となり、教育現場での実践の一助となれば幸いです。

独立行政法人国際協力機構

九州国際センター所長 植 村 吏 香

目 次

は じ め に	1
---------------	---

I. 研修概要

教 師 海 外 研 修 と は	7
2017 年度 教師海外研修の流れ	7
参 加 者 リ ス ト	8
派遣前研修スケジュール	9
現地研修スケジュール	11
帰国後研修スケジュール	12
授業実践報告会スケジュール	14

II. 現地研修報告書

現地研修報告書 7月29日 - 30日	17
現地研修報告書 7月31日	19
現地研修報告書 8月1日	21
現地研修報告書 8月2日	24
現地研修報告書 8月3日	26
現地研修報告書 8月4日	28
現地研修報告書 8月5日	29
現地研修報告書 8月6日	30
現地研修報告書 8月7日	32
同 行 者 あ と が き	34

III. 授業実践例報告書

田 村 栄 子	39
森 久 幸 子	52
竹 杉 由紀子	67

迎 香 純	81
石 川 透	95
橋 口 勝 嗣	106
祝 迫 創	117
松 山 真 子	129

IV. 参 考 資 料

現地研修に同行した南日本新聞社加藤記者による新聞報道	149
お わ り に	161

※ 教員、および児童／生徒の原文を活かして掲載しています。一部表現や体裁のばらつきがありますがご了承ください。

※ 過去の実践事例を、JICA 九州のホームページに掲載しています。
<http://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html>

I. 研 修 概 要

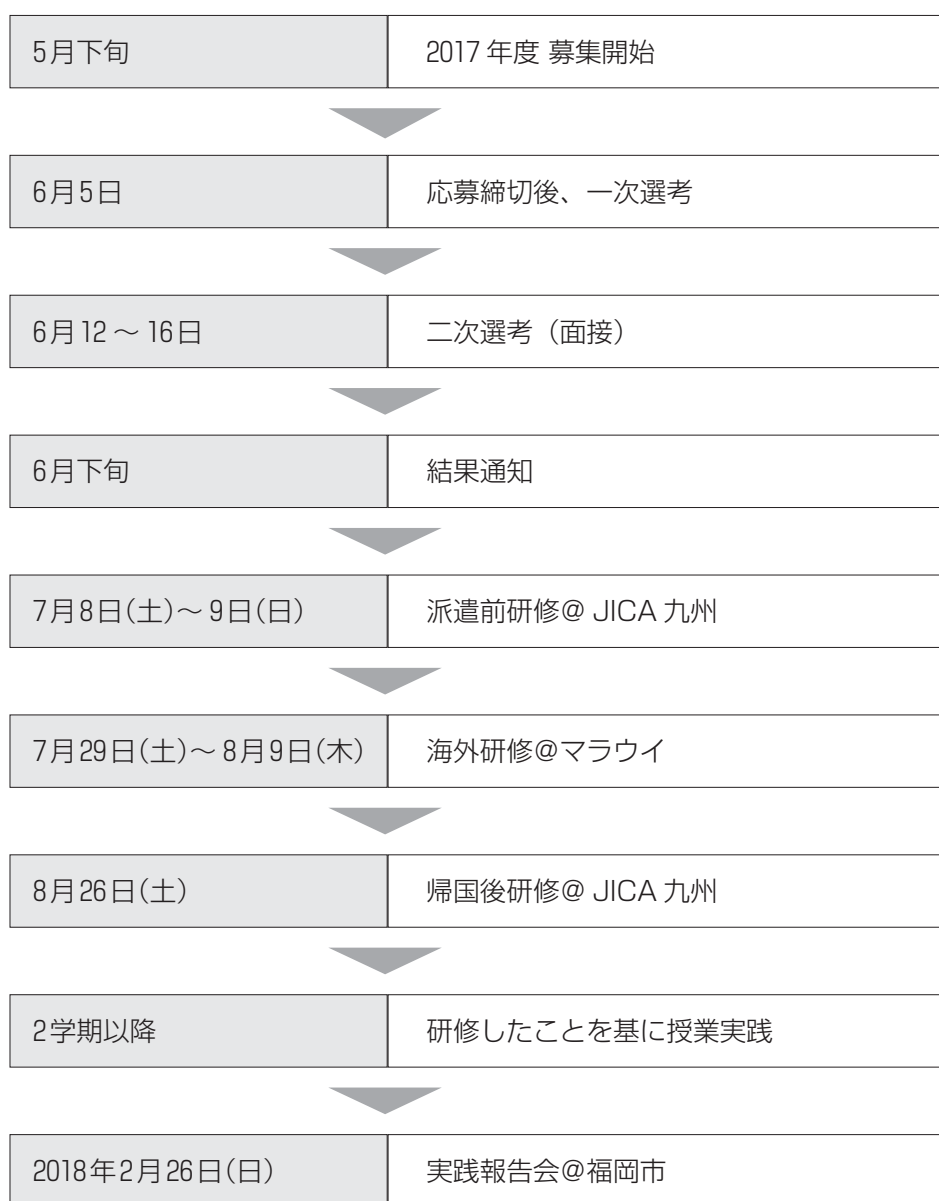
教師海外研修とは

国際理解教育・開発教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問することで、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その成果を、学校現場での授業実践等を通じて、次代を担う児童・生徒の教育に役立ててもらうことを、本事業の目的として実施します。

また研修参加後は、JICA と協力し、教育現場で国際理解教育／開発教育の推進に活躍していただくことも狙いとしています。

(JICA 地球ひろば ウェブサイトより)

2017 年度 教師海外研修の流れ



2017 年度 教師海外研修 参加者リスト

■ 参加教員

	県	所 属	氏 名	担当科目
1	福 岡	福岡県立小倉南高校	田 村 栄 子	英 語
2	福 岡	福岡市立西花畑小学校	森 久 幸 子	全 科
3	福 岡	福岡市立弥永小学校	竹 杉 由紀子	全 科
4	長 崎	佐世保市立江上小学校	迎 香 純	全 科
5	宮 崎	宮崎県立宮崎南高校	石 川 透	英 語
6	鹿児島	鹿児島県立出水高校	橋 口 勝 嗣	地歴・日本史
7	鹿児島	志学館中・高等部	祝 迫 創	外国語（英語）
8	鹿児島	鹿児島市立武岡小学校	松 山 真 子	社 会

■ 同 行 者

	所 属	氏 名
1	JICA デスク大分国際協力推進員	佐 保 好 信
2	JICA 九州市民参加協力課	立 野 敬 子

■ 地方メディア派遣

	所 属	氏 名
1	南日本新聞編集局報道部記者	加 藤 武 司

派遣前研修スケジュール

■ 7月8日（土）

時 間		内 容	担 当
10:20		受 付	
10:30	5	司会及び担当スタッフ紹介	JICA 九州 中野 職員
10:35	5	JICA 九州課長 挨拶	JICA 九州 江頭 課長
10:40	20	JICA 事業概要、教師海外研修趣旨説明	JICA 九州 中野 職員
11:00	30	事務手続き（渡航、保険、留意点他）	JICA 九州 中野 職員
11:30	45	◆参加者自己紹介&関係性を作るワーク 	JICA 九州 中野 職員 Edu 松本亜樹 氏
12:15	60	休 憩（ランチ）	
13:15	100	現地研修スケジュール詳細説明	JICA 九州 立野 専門嘱託
14:55		休 憩	
15:00	60	教師海外研修 過年度参加者からの経験談 	長崎県対馬市立豊玉中学校 市丸恵理 教諭 (2016年度参加：音楽)
16:00	10	休 憩	
16:10	45 40	◆開発教育とは？（レクチャー） ◆簡単なワーク 	ファシリテーター： 松本亜樹 氏
17:35	5	事務連絡（明日のスケジュール等）	JICA 九州 立野 専門嘱託
17:40		終了	

■ 7月9日（日）

時 間		内 容	担 当
9 : 30	60	◆ワークショップ体験	ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏
10 : 30	90	◆参加者ミーティング *役割分担決定 ・現地滞在中のグループ内での役割 ・現地研修報告書（グループで担当日決め） *研修までの準備など	松本亜樹 氏 大分県 佐保 推進員 立野（相談対応）
12 : 00	60	休 憩（昼食）	
13 : 00	30	参加者ミーティング（続き）	
13 : 30	30	ふりかえり & 今後（渡航当日と帰国後）の流れ 確認 アンケート記入	JICA 九州 立野 専門嘱託
14 : 00		閉会の挨拶	JICA 九州 江頭 課長
14 : 35		解 散	

現地研修スケジュール

月 日	曜日	行 程
7月29日	土	福岡発 → 香港 → ヨハネスブルグ 南アフリカ共和国（翌朝）
7月30日	日	午前：ヨハネスブルグ → 午後：マラウイ着
7月31日	月	午前：① JICA マラウイ事務所オリエンテーション・在マラウイ日本国大使館表敬（リロングウェ） 午後：②（技プロ）中等理数科教育強化プロジェクト（サリマ）・中等教員との意見交換会 夕方：③事務所員・隊員との歓迎夕食会（ローズ）
8月1日	火	午前：カムズ中央病院視察（2時間） 午後：移 動
8月2日	水	午前：①食育イベント：生徒との協働作業でマラウイ料理準備&食育授業見学 @ソングニ 午後：②交流授業 → ゾンバ
8月3日	木	午前：ブランチタイヤにて ①バオバブオイル工場視察 ②昼食 午後：隊員活動視察 ルンズ 佐藤隊員（コミュニティ開発・かまど作り体験） → ブランチタイヤ泊 8：30 ゾンバ発 → 9：30 ブランチタイヤ（バオバブオイル工場見学） 昼食 /12：30 → 13：00 ルンズ（活動サイトへ移動） 13：40 - 15：00（ルンズへ）15：40 佐藤隊員のお宅訪問 → 18：00 ブランチタイヤ → 振り返り&佐藤隊員と夕食会
8月4日	金	午前：ブランチタイヤ発 → バラカ 小林隊員（理数科）配属の学校訪問&お宅訪問 午後：バラカ → リロングウェ着
8月5日	土	午前：ムクイチ中等学校視察・授業見学と生徒との交流 午後：・OVOP SHOP
8月6日	日	午前：カムクワンバ氏の風車見学 午後：（カスング） → リロングウェ
8月7日	月	午前：JICA マラウイ事務所報告（リロングウェ） 午後：マラウイ発 ヨハネスブルグ泊
8月8日	火	午後：ヨハネスブルグ発 → 香港
8月9日	水	香港 → 福岡着

帰国後研修スケジュール

■ 8月26日（土）

時 間		内 容	担 当
10:00		受付開始	
10:20	5	あいさつ	JICA 九州 江頭 課長
10:25	5	帰国後研修の流れについて	JICA 九州 中野 職員
10:30	90	マラウイ研修のふりかえり ・各教師 ① マラウイ研修で最も印象に残ったこと ② マラウイで意外に思ったこと ③ マラウイで見つけた「日本とのつながり」 の中からテーマを選び、10分でプレゼンする。 (①～③はどれか選んでもいいし、3つを織り交ぜてもよい) ※写真（データ）5枚程度を持参、報告に使用	Edu 松本亜樹 氏
			
12:00	60	休 憩（昼食）	
13:00	30	マラウイ研修後の実践事例と実践のためのポイント 	佐賀市立新栄小学校 吉田宗平 教諭 (2016年度参加)

時 間		内 容	担 当
13 : 30	30	国際協力推進員とは～ JICA 開発教育支援事業の窓口機能 (各県別にグループ分け) 推進員からの各県実践事例紹介	国際協力推進員
14 : 00	10	休 憩	
14 : 10	170	開発教育ワークショップ (途中休憩)	ファシリテーター Edu 松本亜樹 氏
17 : 00	30	ふりかえり ① アンケート記入 (5 分) ② 一人一言 (3 分× 8 人)	JICA 九州 立野 専門嘱託
17 : 30	5	今後に向けて	JICA 九州 江頭 課長

遠方来訪者は後泊

授業実践報告会スケジュール

時 間	プログラム	担 当
10:30～10:35	開会の挨拶	JICA 九州 市民参加協力課 江頭 課長
10:35～10:40	全体説明	JICA 九州 市民参加協力課 中野 職員
10:40～12:40	2017 年度教師海外研修参加者からの授業実践報告（1 人当たり 10 分で報告、5 分の質疑応答） 	2017 年度教師海外研修参加者 8 名
12:40～13:40	昼 食	
13:40～14:40	開発教育ワークショップ手法の紹介 	2017 年度教師海外研修参加者、 その他出席者 ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏
14:40～14:50	休 憩	
14:50～15:50	開発教育ワークショップ・手法の紹介	2017 年度教師海外研修参加者、 その他出席者 ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏
15:50～16:00	SDGs ワークショップ事例の紹介	JICA デスク長崎 茂田 国際協力推進員
16:00～16:10	閉会の挨拶	JICA 九州 市民参加協力課 江頭 課長

Ⅱ. 現 地 研 修 報 告 書

現地研修報告書 7月29日-30日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
7/29	午 後	福岡空港→香港国際空港 香港国際空港→	・ 2017 年度 教師海外研修で「生き抜く力」とは何かを考える為、アフリカのマラウイに向かう。 ・ 短期滞在者にとって衛生状態が懸念されるため、飲用水の購入をする。
7/30	移 動	ヨハネスブルグ国際空港→カムズ国際空港 PEOPLES にて買い物	



リロングウェに向かう機内から。
乾季の為か、川に水が無いように見える。



同じ商品が並ぶ PEOPLES 店内。

■ 今日の学び

7/29 13:30 福岡空港集合。訪問先へのお土産についての助言を昨年度参加の先生方からいただき「軽いもの」を探していたが、やはり参加者それぞれの思いがあり、金額を決めて自分の地元の菓子を選ぶ姿が見られた。機材の遅れか 18:00 頃ようやく香港へ向かい、香港の空港内でマラウイ国歌のリコーダー練習を行う。24:00 頃、香港を発ちヨハネスブルグへ向かう。

7/30 ヨハネスブルグの空港はとても綺麗で物が溢れている。チョコクロワッサンが 1つ 5 \$ と言われ、日本以上の物価の高さに驚いた。10:00 リロングウェに向かう機内では噂に聞いていた虫よけスプレーをまく客室乗務員の姿が見られた。

カムズ国際空港には、JICA の事業の証として日本の国旗が至る所で見られた。丸一日以上かけて着いた遠くマラウイで目にする日の丸は、とても誇らしく感じる。国際空港とは思えぬ規模の小さな入国ゲートをくぐると、機関銃らしき物を肩にかけた人が立っており、早速日本との違いを一つ見つけることになった。

ホテルまでの車内から見る風景は、思い描いていた『アフリカ』と違い、近代的に見えた。し

かし信号機の少なさ、整備されていない歩道、座り込む人の多さは明らかに日本とは違う。30年以上前に訪れた種子島が、当時島内に2つしか信号機が無いと言われていたのを思い出す。

ホテル近くのスーパー「PEOPLES」で歯磨き用、飲用の水を購入する。5Lで90円ちょっとの価格はかなり安い。店内には商品が何も並んでいない棚や冷蔵庫がある。また、種類の選択肢が少なく、バターは1種類が200個以上陳列されていた。砂糖や肉の包装が破れているものも少ない。19時閉店。日本の個人商店のようだと感じた。

■ 訪問先所感

上空から見るマラウイの国土は木々が点在していて、森や林を形成していない様子が見られ、日本とは違う気候帯であると感じることができた。また、田畑の不揃いな形からも機械化がすすんでいない事が分かり、昔ながらの農業が行われているのだろう。昔ながらの農業は時間と手間がかかり、それが収穫に結びつくと言えず効率が悪い。事前に調べたところでは灌漑農業も行われておらず、完全に自然まかせだという。農業国なのであれば、安定した食糧を自給できるようにするところに支援が必要なのではと考えてみたが、そういう日本も食料自給率は4割を切り、農家は後継ぎ不足に悩んでいる。どんなに機械化が進んでいても、それを動かす人間がいなくなっているのが現状だ。マラウイの若者は将来どんな仕事をしたいと考えているのか、農業をしたいと思っているのか、やはり両国の若者たちの夢を知りたいと思った。

ホテルまでの道中に煙草の工場があり、ここで生産される煙草の17%が日本向けだと教えてもらった。禁煙ブームが巻き起こる日本。このまま嫌煙が続くと遠くマラウイの経済にも影響があると初めて知り、自分たちだけ健康になろうとすることが先進国のエゴのような気がして気分が悪くなった。先進国は、必要な物を必要な時に絞り取り、不必要になればあっさり切り離す。切り離された方はどうなるのか、など、「禁煙、禁煙」とヒステリックに騒ぐ国民の頭には全く無いに違いない。また、この工場では子どもも働いているとの事。そんな事も日本国民は知らない。正しく知ること。そのために私たちは今回来たのだと強く感じる事ができた。

PEOPLESでは、日本の「物の豊かさ」を実感した。また、お土産になりそうなメイド・イン・マラウイを探しながら、日本の「自国で物を生み出す力」にも気づくことができた。それぐらいマラウイ産のお菓子が無かった。日本人は果物が一つあれば、生で食べたり、ジャムやお菓子の加工品をつくったりと複数の商品をつくろうとする。工夫を凝らして種類を増やそうとする。それが元々の先人の知恵なのか、海の向こうから伝わってきたものなのかは分からないが、そうやってたくさんの物を持つことで「幸せ」を感じてきた。マラウイの人々は、こんなに物が少なく、選択肢がなくて、それでも足りていると感じるのか、「幸せ」と思っているのか。日本の「生産力」を誇りに思いながらも、過剰供給かもしれないとも思えてきた。24時間営業の店、次から次に発売される新商品、なかなか商品にたどりつかない過剰包装などを考えれば考えるほど、日本を誇るのか、何か間違っていると思うのか分からなくなってきた。ちょっと湿気ているマラウイ産のスナック菓子を食べながら、日本のスナック菓子の質の尺度で測らなければ美味しいと感じるのかも、とも思ったりした。

文責：竹 杉 由紀子

現地研修報告書 7月31日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
7/31	午前	JICA マラウイ事務所 表敬・オリエンテーション	・ マラウイについての概況を知る ・ マラウイにおける支援の現状を知る
		日本大使館表敬	・ マラウイについての概況、日本とマラウイの関係を理解する
	午後	サリマ・ムサルラクラスター SMASSE プロジェクト専門家との交流 現地中等教育学校教員との意見交流	・ マラウイの初等中等教育について理解する ・ SMASSE プロジェクトについて知り、教育分野での協力について理解する ・ 現地教員と意見交流を行い、現状を知る



■ 今日の学び

JICA 事務所・日本大使館表敬、バス内での SMASSE プロジェクトのレクチャー、サリマ中等教育学校での意見交換と非常に盛りだくさんの一日であった。

あらかじめマラウイについて学んで臨んだ今回の研修であったが、JICA マラウイ事務所、日本大使館で話をうかがうと、また違った発見があり、その中で考えさせられることが多かった。マラウイの実情、国として抱える課題、日本及び各国の援助のあり方など、話しをうかがっていく中で「幸せ」とは何か？という疑問を抱くに至った。

サリマ中等教育学校での意見交換も大変意義深いものだった。制度面、待遇面、環境面、大きく違いのある日本とマラウイの中等教育であったが、国や制度は違っても、一教師としてお互いに率直に話をする事で、多くのことを共有し理解することができた。自由に話し合う場を作り、相手の意見を尊重し、ないものは自らの工夫で生み出していく、調和を大切にするマラウイの先生がたの姿勢から学ぶことも多かった。

マラウイの現状を知り、そして実際に自分達を目で見ていく中で、マラウイの人々とその生活ぶりの中に、我々日本人の内側にある、数十年前の日本の原風景と重なる部分を見いだすことも多かった。経済的にも資源的にもあまり豊かとは言えないマラウイに対してどのような支援が必要なのか、「もの」だけではなく「ひと」、「枠組み」での支援の大切さを知った。またそこに至るには、お互いが当事者として同じ目線で対話しながら、課題を共有し、問題意識を持つことが大切であり、「対話」の必要性・重要性をあらためて感じた。

■ 訪問先所感

・ JICA マラウイ事務所

木藤所長、和田次長をはじめ JICA マラウイ事務所の方々から今回の視察研修を受けるにあたって説明を受けた。

まず木藤所長、和田次長からはマラウイの現況、マラウイにおける JICA の支援について話をうかがった。限られた国家予算の中、人口増加の問題、インフラ整備にあたっていないといけないマラウイの現状を知ると、厳しいと率直に感じた。そのなかで第4位の援助国として日本の役割は非常に大きく、現地の人々の生活の質の向上に密接に関わっていることがわかった。我々教員側から支援・援助に関して多くの質疑が出された。

その他滞在中の健康面で留意事項、大分の一村一品活動に発想を得た OVOP の取り組みについて説明を受けた。

・ 日本大使館

まずガラス張りの現代的な建物を見て大変驚いた。カムズ国際空港など比較しても、その建築の素晴らしさにただ驚くばかりだった。セキュリティの厳重さもここが大使館なのだとすることを物語っていた。

初めての大使館で、また大使に会うということでとても緊張していたが、柳沢香枝大使のお人柄からか、和やかな雰囲気での表敬となった。

大使からは、マラウイの現状、教育制度について、大使のマラウイやマラウイの人々に抱いている印象についてなど多岐にわたる話を伺うことができた。また我々からも活発に質問が出た。大使の子供頃の夢にまで話はおよんだ。

・ サリマ中等教育学校

サリマへの移動中に車中で、JICA 専門家である徳丸先生、高橋先生から、マラウイの初等中等教育の現状と課題、SMASSE プロジェクトについての話を聞いた。全入になったが故の初等教育の厳しい現状と、十分な体制がとられておらず、中途退学者も多い中等教育の現状を聞きながら、日本の教育の課題、日本の子どもたちが抱える課題とを頭の中で比較していた。SMASSE の教育・教員養成の枠組みでの支援のあり方をみて、このような形で国際協力があるのだと知った。

サリマ中等教育学校においては、現地の先生方が非常に多く参加して下さって、本当にありがたいと思った。まず、校長からサリマ・ムサルラクラスターの取り組みについての説明を聞いた。このクラスターは SMASSE プロジェクトがうまくいっている地区だと聞き、校長のリーダーシップの違いが成果として現れているのだと思った。その後、教科別のグループに分かれ意見交換となった。待遇面、設備面での先生方のご苦勞をうかがうにつけ、自らの境遇を振り返るとともに、国は違えども、同じ中等教育に携わるものとして、多くのことに共感を覚えた。時間が足りないくらいの、大变得るものの多い意見交換となった。

文責：石 川 透

現地研修報告書 8月1日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
8/ 1	午前	カムズ中央病院	・ マラウイの医療事情 ・ 支援の現状 を理解する
	午後	テッサ（窯業） 地方へ移動	・ マラウイにおける陶器製品を知る。



薬剤師達へインタビュー中



デッサポッターの玄関

■ 今日の学び

午後：

テッサの陶器を取り扱うお土産屋へ。実際の陶器製造段階は見られず。

午前：

A.M. 9:00 宿泊施設→車にてカムズセントラル病院へ。

青年海外協力隊員3名（砂田：薬剤師 手塚：看護師 市川：理学療法士）の案内にて上記病院内の視察を行う。※敬称略

視察先 ー・ 処方箋準備室・院内厨房・患者病棟・リハビリテーション施設／器具・ストレージ・
院外施設（患者の家族用炊事場）

訪問前の仮説：

1. HIV 感染率上位 10 か国全てがサブサハラ・アフリカ^{*1}であることから、マラウイ医療現場の衛生状況や医療的啓発の達成率は D^{*2}ではないか。
2. 日本は TICAD^{*3}の中で保健医療の支援を明言しているが、現在もアフリカは最貧国から脱していないので支援は不適切ではないのか。

報 告

仮説以上に医療事情は前に進んでいる。院外には日本で用いられていた緊急車両。某世界的組織のマーク。院内は予想以上に清潔であり、院内に従事する方々の努力の跡が伺えた。但し整理整頓はできていない。手洗い励行、5Sなどの衛生教育はユニセフや USAID、日本が導入している。隊員三人にお話を伺うと、外科では帝王切開、下肢切断レベルの手術も可能。火傷科という

珍しい科もある。マラウイは医療が無償。税率が低く資源のない国では驚くべきこと。
以下マラウイの医療現場から推定される課題を箇条書きにする。

- 院内感染** — 予算・スタッフ教育等に問題があり院内感染は防止できていない。院内感染の現状が隊員より報告された
- 処方箋** — 薬が処方されても、チェックはインターン生。ダブルチェック機能なし
- 勤務体制** — 夜間・休日の緊急対応ができる勤務シフトの概念がない。
薬だけ出して患者のケアをしない。面倒は同伴の家族がしている。
- カルテ** — システムは導入されたが、書類回覧の習慣がなく意味をなさない。
- 通院** — 医療無償化はされたが、日本の様に交通費までカバーする保険システムはできあがっていない。公共機関が整備されていないマラウイでは「そもそもカムズまで来られない」患者が多いと推定される。
- 支援** — 参加者の関心をひいたのは、院内の「支援」「寄付」されたモノだった。
 - ・ 日本製の日本語表記のみの薬（利用できない+期限切れの薬もあり）
 - ・ 製薬会社より寄付された薬の在庫（在庫処理？ 送付元の減税や広告狙い？ 試薬？）
 - ・ 支援されたりハビリ機器含め医療機器の廃棄問題（関連：マラウイごみ処理問題）

■ 訪問先所感

仮説 1 に対して マラウイ医療機関の衛生環境と医療啓発は不十分ではあるが、隊員含めた現場のマンパワーと抱える課題が伝わってくる。隊員はきちんと資格と現場経験を併せ持つ医療の「プロ」である。適切な報酬があるのかが気になった。尊敬される医療従事者がいるとしたら、彼らである。

仮説 2 に対して 現場を観ない者達が適切な支援をすることは不可能と感じた。支援が不適切であると断言はできないが「もらえるものはもらっておけ」「もったいない」精神のマラウイと他国には、支援のミスマッチが起こり続けると予想される。

マクロレベルでの取り組み案

- ・ 先進国支援の条件を設定する（例：NHK 朝倉豪雨報道^{*4}）
- ・ 循環支援^{*5}（ニーズを現場から拾いそれを満たす国を含めた三国間以上の支援取引を行う）
- ・ 先進国現役医師の派遣システムを強化

■ 終わりに

- ・ マラウイは発展すべきなのか？という議論は参加者内で起きていたが、報告書に関しては、「発展すべき」という肯定側で書かせて頂いた。
- ・ 入院したマラウイアンに家族が付き添っている姿を今でも覚えている。医療先進国（恐らく）に住む自分は、この家族が羨ましい。

文責：祝 迫 創

* 1 MOFA（外務省）HP より

* 2 4段階評価より 達成率を A ～ D で 4段階評価する。D は「達成されていない」

* 3 アフリカ開発会議の略称。日本が主導するアフリカ開発がテーマの国際会議。

- * 4 2国間ではお互いのニーズが一致しないので、第三国を関与させて支援を行うこと。3チーム以上で選手を移籍させる「三角トレード」、三角貿易と同義。
- * 5 2017年7月に福岡県朝倉で起きた豪雨災害に対し、NHKは視聴者に「勝手に救援物資を送らないでください。何月何日までに〇〇へ、アルミパウチのゼリー（いわゆるウィダーインゼリー）のみ送付してください」と放送した。
東日本大震災等で顕在化した、支援のミスマッチ問題を受けての対応と言われる。

現地研修報告書 8月2日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
8/ 2	午前	Chimpeni Primary School (ソンガニ) 食育イベント	・ 協力隊員による食育イベント、マラウイの栄養事情、食糧事情等の理解。
	午後	交流授業	・ 現地の初等学校児童（初等 6、7、8 年生）及び教員との交流。



■ 今日の学び

- 学校教育において、指導者が情熱を持ち、子ども達の良さを認め、それを伝えていく事で、自尊感情が醸成し、明るく秩序のある集団ができていた。
- 言葉は通じなくても、相手にどうにかして伝えようという気持ちや姿勢、また、相手が伝えようとしている事を汲み取ろうとする気持ちや姿勢などの前向きな関わりが、相互理解の第一歩であった。特に、笑い笑顔は親しくなる一番の近道。

■ 訪問先所感

本研修で、個人的に一番楽しみにしていた Primary School の児童と交流する事ができた。Chimpeni Primary School は、ソンガニという町にある学校で、大通りから横道にそれ、畑の横を車で 3 分程通り過ぎた場所にあった。「こんな所にあるのか。」という多少の驚きと共に、雨季の登下校は大変だろうと感じた。ワゴン車から降りると、赤レンガの校舎の前に、青い制服を身につけた初等 6～8 年生の児童及び現地教員が、休暇中にもかかわらず 30 人前後、私達のために集まってくれていた。彼らの方に近づいていくと、歓迎の歌が始まった。緑色の葉の茂る大きな木の木陰で、褐色の肌に青色のジャンパースカートを身につけた女の子達と、青色の襟付きのシャツを着た男の子達がリズムに合わせて右足を前後に揺らしながら歌う姿とその歌声に、なぜだか涙が出そうになった。赤い土、それから作った赤褐色のレンガ造りの校舎、その頭上に広がる青い空、褐色の肌に青色の制服、赤土に映る風に揺れる葉影、その風によって耳に届く子どもたちの歌声、それら全てが体全体を通じて伝わり、彼らの歓迎の気持ちと共にアフリカに来たのだなあという

感慨とで、心が揺さぶられたのかもしれない。

その後は、代表の男子児童による英語での歓迎の言葉と日本の教師側からの挨拶、そして自己紹介があった。そうして、よい時間を共有できる事を期待して活動に入った。

午前中は、子ども達とマラウイの主食であるシマとおかずのデュオ2種作りを8グループに分かれて行った。思っていたより英語を話せる子が少なかったが、逆にそれが相手の事を分かろうとしたり、伝えようとしたりする態度へつながったのではないかと思う。言葉が通じなくても、表情や声のトーン、軽妙な動きで笑いを取り、児童と仲よくなっていた教員もあり、笑いの要素は大事なコミュニケーションツールだと思った。この活動は、児童が教師に教えるという通常の授業形態とは逆転したものであった。それにより、子ども達は普段からしている事なので自信を持って活動できただけでなく、教師側も相手の事を知りたいという前向きで積極的な態度に繋がったと思う。シマ作りは、男の子が主に火をおこしたり火の始末をしたりして、女の子が料理を作っていた。出来上がった食事は、子ども達と一緒に頂いた。マラウイ流の食べ方で、手でちぎったシマを、お寿司を握るようして食べやすく成形し、おかずも一緒に取って、口に運んだ。蒸しパンとお餅の中間のような食感で、おかずと食べると美味しかった。現地の食べ物を作って、現地の食べ方で食べた事は、食生活だけではなく、生活習慣や伝統を理解する助けとなった。また、片づけも一緒にした事で、ポンプ式の井戸水で水を出す役目と皿を洗う役目に分かれて協力しながら取り組んでいる事や、鍋についた灰や墨を取るために泥や木の皮などを使っている事を知る事もできた。日本と比べると、時間がかかり一見不便ではあるが、孤食もなく、片付けの際は洗剤を使わないので水環境への負荷は少ないと感じた。また、家族が寄り添い、助け合って生活している事も感じられた。

午後は、ドラムの音に合わせて輪になって踊る恋のダンスを見せてくれ、途中から一緒に日本人教師も招き入れられて踊った。言葉が分からずとも、一緒に踊る事は楽しい。日本の小学生は、恥ずかしがって踊れない子も少なくないが、マラウイは子どもから大人までみんな踊りが大好きなのが分かった。日本人も、もっと自分を解放できるようになれるといいなと思う。その後は、日本の教師側が、日本についてのクイズ、日本文化の紹介とその体験の補助等を行った。前半は全体で、後半はグループに分かれて行った。子ども達は、どれも目を輝かせて積極的に取り組んでくれ、私達自身も楽しみ、自国の文化を誇りに思う事ができた。

最後に、記念撮影をして、マラウイの国家と一緒に歌い、リコーダーを吹く事ができ、感慨深いものとなった。そして、男子児童の英語のスピーチと日本の教師側のリーダーによるお礼の挨拶で幕を閉じた。

今回の活動は、お互いの国のほんの一部分を知るにすぎないが、お互いの良さを知ることができた幸せな時間の共有であった。マラウイでの当たり前の日常の中に、私達現代の日本人に必要な「生き抜く力」のヒントがいくつもあったように思う。

今回の活動を企画してくださった、JOCVとして青少年活動をされている櫻井さんと栄養士の木原さん、Chimpeni Primary Schoolの先生方と子ども達、またJICAマラウイ事務所の和田次長や丸山さん、そして現地との調整に尽力してくださった立野さんやサポートしてくださった佐保さん達関係者の方々に、心からお礼申し上げます。

文責：森 久 幸 子

現地研修報告書 8月3日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
8/ 3	午前	バオバブオイル工場視察	・ ブランタイヤ市内にある OVOP 支援対象のオイル精製を見学し、JICA 事業の理解と、マラウイの労働環境について学ぶ。
	午後	コミュニティ開発支援活動視察	・ 南部ルンズ郊外の村で、現地協力隊員の指導のもと、農民とかまど作り体験。マラウイのエネルギー問題、森林資源の破壊の現状を理解する。



■ 今日の学び

(午前：バオバブオイル工場視察)

一村一品（OVOP）運動とは、地元の特産品で地域の活性化を図るプロジェクトである。今回訪れた工場は、2017年に終了したJICAによる一村一品運動をさらに強化・継続させるため、ミレニウム・プロミス・ジャパンが自立支援を行っている。スタッフである青木道裕さんと天野桃子さんは、以前青年海外協力隊員としてマラウイに派遣されており、現地の人たちが組織運営をし、安定した収入を確保できるよう、現在も支援活動を続けている。

現地の代表者 Standy House さんに工場の中を見学させてもらった。6畳ほどの事務所の奥に、2台の搾油機が置かれた工場と、種を貯蔵する2つの倉庫が併設されていた。バオバブオイルの種は1袋あたり3000クワチャ（約500円）と高価なものであること、2袋で5Lのオイルが留出され、1日の生産量は80Lしかとれない大変貴重なものであることがわかった。生産工場の拡大や製品の品質改善、市場の拡張など、現地のスタッフと話し合いを重ね、共に協力しながら自立支援を行う様子を垣間見ることができた。



(午後：コミュニティ開発支援活動視察)

マラウイが抱える問題のひとつに森林伐採がある。人口増加とともに薪の需要が増えたことが原因だ。従来の三つ石によるカマドでは大量の薪を消費してしまう。森林保全に向け、薪の消費量を減らすために、カマドの普及に努めている青年海外協力隊の佐藤博亮隊員の活動の様子を見学させてもらった。多くの村に足を運び、カマドのよさを伝え、現地の人と共にカマド作りをされている。

カマドの材料は、土台となるれんがと、アリ塚の土と砂、細かく刻んだ藁とヤギの糞を混ぜた粘土である。空気穴を調節しながら、れんがの段を増やし、粘土で丁寧に固めていく。1時間ほどで形ができ、1週間ほど乾燥させると出来上がる。実際カマドを使うことで、二つのコンロで同時調理が可能となり、他の家事に時間を費やすことができ、薪の消費量も半分に抑えることができていることが調査で分かっている。隊員の熱意が現地の人の心を動かし、互いに知恵を出し合い、よりよい生活を生み出している場面を目の当たりすることができた。



■ 訪問先所感

バオバブオイル工場とかまど作りの共通点は、地域に根差した支援活動であるということだ。知識や技術を押し付けるのではなく、相手の立場を理解し、相手の考えに耳を傾け、よりよい生活ができるように現地の人に選択肢を示すこと。そして現地の人の力で維持・継続できるようサポートをするという、支援のあるべき姿を教えてもらった。

コミュニティ開発をされている佐藤隊員は、現地の人々とチェワ語で会話をされていた。相手をしっかりと見つめ、柔らかい表情と優しい口調で話される姿が、心の中にあたたく残っている。対話を繰り返して築かれた信頼関係が土台となり、森林伐採を食い止める、確実な一步を踏み出していると感じた。自然とともに生きるマラウイの文化を尊重しながら行われる支援活動。人と人、国と国、規模の大きさに関わらず、相手意識が大切であることを再確認することができた。

文責：迎 香 純

現地研修報告書 8月4日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
8/4	午前	バラカ中等学校・理数科教員とともに施設見学	・理数科教員として中等学校で活動している協力隊隊員の活動内容を知る。 ・中等学校の施設を見学。
	午後	移 動	・リロングウェの景色を見ながら移動。



■ 今日の学び

バラカ中等学校で理科を教える小林勇貴隊員は、学力の基礎基本の定着、日本との交流、キャリア教育の実施、などに取り組んでいる。基礎基本を定着させるためにノートに板書をうつすことを日々指導し、補充学習として百ます計算やドリル学習を行っている。教科書に載っていても準備できない道具は、身近にあるものを使って実験したり、動画を見せたりしていた。また、想像できる職業の幅が少ないので様々な職種の方を招いて講演を行うなどのキャリア教育を行っていた。

■ 訪問先所感

全寮制で、敷地内に男子寮と女子寮がある比較的綺麗な学校で、校舎内をヤギが歩くなど自然豊かな環境である。教員の住宅も敷地内にあるので、教師と生徒の距離が近い。信頼関係ができていると感じた。

日本の教科書などを使いながら教材研究を行い、身近にあるものをうまく工夫しながら実験を行う姿や、学力向上のためにノートを集めたり、ドリル学習を行ったりする姿は、日本の学校とかわらないと思った。学びたいという生徒の姿勢に、真摯に取り組む姿がプレゼンの中から伝わってきた。一方で、他のマラウイの理科教員がどのくらい実験を行っているのか、授業の流れを考えたり教材研究をしたりしているのか疑問に思うところがあった。日本で学んだ技術や指導法を生かしながら、他のマラウイの教員との連携し、全教員で連携して授業改善に努めることも必要だと感じた。

文責：松 山 真 子

現地研修報告書 8月5日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
8/ 5	午前	ムクイチ中等学校見学生徒との交流	・ マラウイにおける青年海外協力隊の活動状況を視察する。理数科教師や生徒への質疑応答を通して、マラウイの教育の現場はどのようなものかを知る。
	午後	OVOP ショップ	・ マラウイにおける OVOP 運動がどのように推進されているかを知る。



■ 今日の学び

OVOP（一村一品）運動とは、地元で手に入る資源に価値を付加することによって、地域の農家の生活を改善しようと努めているプログラムであると理解した。一般的な農産物は天候等に左右されやすく市場価格も一定しない。他国の製品にないような付加価値を与えて販売することが重要であると感じた。

ムクイチ中等学校では実際に授業の様子を見学することができた。教科書すら手に入りにくい状況で一生懸命にノートを取っている生徒の姿は印象的であった。協力隊員の方も日本と異なる教育現場で苦労されながらも丁寧な授業を実践されていた。マラウイでは教員が不足していたり、授業に遅れてくる教師がいたり、日本と比べると教育事情は必ずしも良いとはいえない。

■ 訪問先所感

現地の人には普通であると思われる物が、他者からみれば優れた商品となりうる可能性がある。マラウイの人たちが気づかないような商品の優位性を発見し、パッケージングすることで市場価値が高まるであろう。ここに日本も支援に関わっている事の意義があるのではないだろうか。そして、OVOP 運動を通して農家の生活の向上が図れるのではないだろうかと感じた。

中等学校では夏休みであるにも関わらず生徒が授業に参加してくれた。学ぶことに意欲的な生徒の姿は感動的であり、日本の生徒にも伝えたい。物質的にも人的にも苦労が絶えない場所で協力隊員の方が授業実践されているその取り組みはマラウイ教育の現場に波及してもらいたいものである。今回の研修に参加した教師が率先して、今後マラウイの学校との交流を深めていくことも必要ではないかと感じた。

文責：橋 口 勝 嗣

現地研修報告書 8月6日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
8/ 6	午前	カムクワンバ氏の風車見学	・教科書や本で知られているカムクワンバ氏の自宅で学ぶ目的を考える
	午後	マラウイ湖散策	・世界遺産のマラウイ湖を体感する



■ 今日の学び

午前中は、カムクワンバ氏の自宅を訪れ、彼が作った風車を見学した。残念ながら、1号機は壊れてしまっていたが、2号機やソーラーパネル、彼が使っていた廃材置き場、井戸堀体験、そして彼が寄付を募って建て増しした学校も見ることができた。彼の家族にも話を聞くことができた。彼の学びは、彼自身の家族や地域の人々に良い影響を与えることを目標にしていることを理解できた。

午後からは、世界遺産のマラウイ湖を訪れ、遅い昼食をいただいた。湖と思えないほどの大きさ（世界第9位）で、水は透き通り、波は静かだった。マラウイのレストランで、食事の注文をして実際に提供されるのを待つ時間は、日本の何倍も長い。しかしそこに「対話」が生まれ、心地よい「想いを共有する」時間が流れる。

■ 訪問先所感

TED TALK で有名になり、絵本や教科書の題材になったカムクワンバ氏の自宅を訪ねるのは、大変興味深いものであった。どんなに先進国で取り上げられても、彼の実家は観光地化されていなかった。実際一人当たり1,000クワチャ（166円）の入場料を徴収されていたが、そのお金が彼の実家を豊かにするためではないことは明らかだった。

彼の成功で、妹は夜も本を読むことができ、大学に進学している。マラウイの子供たちは、自分たちでおもちゃやボールを手作りするように、カムクワンバ氏も、小学校の図書館にあったアメリカから寄付をされた本との出会いで、風車を作り上げた。そして、現在彼自身も結婚し、マラウイの首都リロングウェに在住し、マラウイの小中高等学校・風車・灌漑井戸ポンプ・農業開発研究・コンピュータ導入等の活動が続けている。

<http://www.williamkamkwamba.com/>

この成功例のように、支援の在り方には、彼ら自身が気づき、行動できる環境を整える必要性を感じた。先進国の常識だけで、援助しては一方通行になってしまう。

マラウイ人の気質や、本当に必要としている支援を考える必要を感じた。そのためには現地に赴き、現地声を聴き、その声を受け止めて共有し、先進国に伝えるマンパワーが欠かせない。

他方で、先進国では見失ってしまっている日常が、マラウイに存在する。

それは「ゆったりとした時間」を「他者と共有」する大切さである。マラウイ社会で、常に家族や地域と寄り添い、支えあう温かさや笑顔を感じた。衛生面や食料不足に起因する病気や、教育の問題も、先進国では深刻に捉える内容であるが、彼らには不安な表情はなく、質素に村人や家族・友人達とのんびりと逞しく日々を過ごしている。そのような人々の支えあいが、彼らの心に安定感と希望を与えている。

途上国のマラウイにあり、先進国の日本が学ぶべき「生き抜く力」とは、身近な「他者との共有」がキーワードとなると感じた研修であった。

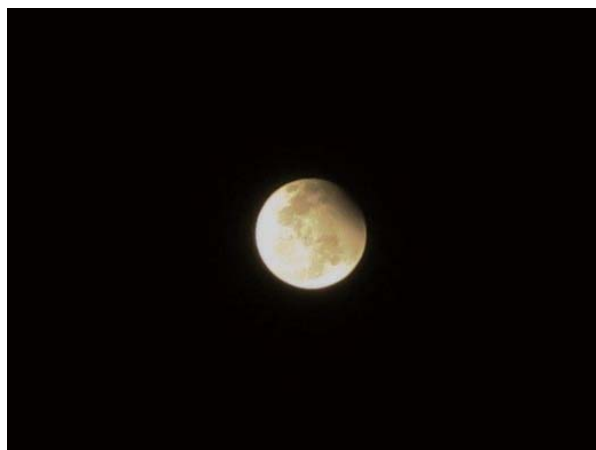
文責：田 村 栄 子

現地研修報告書 8月7日

日付	時間	訪問先・活動	ね ら い
8/ 7	午前	JICA マラウイ事務所	・ 帰国前報告。本渡航の研修成果の共有 ・ トランスファーのための宿泊
	午後	カムズ国際空港 → ヨハネスブルグ国際空港	



ヨハネスブルグのホテルからの夜景。驚くほどの都会。



ホテルにて。右上から欠ける部分月食。

■ 今日の学び

JICA マラウイ事務所にて、帰国前報告会を行う。

【竹杉】

開発教育とは包みを開けること、知ることと教えてもらい、今回、まず知ることができた。「幸せ」「支援」についての答えは出ていないが、今回知ったことを日本の子どもたちに還元していきたい。

【松山】

支援とは何か、分からないところがたくさんあったが、現場の方の話が聞けたのがよかった。頑張っている姿を見て、自分自身も頑張ろうという気持ちになれた。

【迎】

3つの視点で考えることができた。①支援とは何か、「あげる」のではなく、選択肢を与えること②生き抜く力とは③学ぶ機会は平等に与えられるべき。

「してあげる」のではなく、「対等」であること。よい経験ができた。

【橋口】

始めは支援が必要だと思っていたが、病院や学校での隊員の姿を見て、継続してほしいと思った。子どもたちの夢を聞いて、情報がなくどのような仕事があるのか分からない現状を知ることができた。

【森久】

現地の人、協力隊員と触れ合う事を心がけて過ごすことができた。都市と地方とのギャップが日本との違いと思ったが、貧しい＝不幸ではない。物質的な支援はどうか。佐藤隊員のカメラドづくりなど、行っている活動について政府にしっかり働きかけて知らせしてほしい。

【祝迫】

これまで見てきた支援の中で、最もロスが少ない「カマドづくり」。あの努力は無駄にはならないと感じた。これから、「知る」こと、「理解する」ことを大切にしていきたい。

【田村】

支援に必要なのはハードよりソフト。技術も一方的に与えるのではなく、必要とされているものを「対話の共有」と「信頼関係」の上で。日本人が絶対に幸せだとは言えないように思える。OVOP ショップは、もっとマラウイの人の声を聞いてほしいと感じた。

【石川】

自分の力で幸せになるために、隊員を通した枠組みでの支援を継続していくことの大事さを感じた。数年たてば、「自分たちの力でここまでできた」と現地の人を感じることはできるのではないか。

【木藤所長】

アフリカとの付き合いは長く、対話の共有が必要と感じる。発展とは、幸福とはと考えるときに、必要なものは「アダルトリテラシー」かと感じている。JICA としては今後やっていきたいところだと感じている。

■ 訪問先所感

渡航した翌日に伺った JICA の事務所が、厚かましくも「懐かしい」と感じられた。限られた時間の中で、8人それぞれが感じ、考えたことを言葉にまとめることが難しく、帰国してからも「支援とは」「本当の幸せとは」と、多くの課題を考え続けるのだろうと思われた。

ヨハネスブルグに到着しホテルから見る景色は、我々が抱く「アフリカ」のイメージとはかけ離れた『都会』であった。連なる車、整備された道路、モノレール、そして停電になりそうにも無い多くの灯り。南アフリカの歴史がこの大都会をつくったのだろうかと考えつつも、ホテルの部屋の快適さが「日常」に戻ったようでホッとしたのも確かだ。

日常生活のあらゆるものが「快適」で「便利」なことを知っていて、それが当たり前になっている日本。水を飲むために全身で井戸のポンプを動かす必要がなく、料理をするためのカマドをつくる必要もなく、食器を土でこすることなく食洗機に入れるだけの、がんばる必要のない日常。それでも日本人の幸福度は低いとも言われる。そんな日本の「生きる力」とマラウイの「生きる力」は全く異なるものなのだろう。マラウイの「生きる力」とは、非常に人間くさく、「生」を感じさせるものであった。その「生」を失わせるようなエゴの押しつけになるような支援ではなく、対話ありきの幸福の共有と考えると、まさに協力隊の方々の活動そのものが『支援』の本質なのではないかと思えた。

文責：竹 杉 由紀子

同行者あとがき

2017 年度 教師海外研修（マラウイ共和国）へ同行して

大分県国際協力推進員 佐 保 好 信

2017 年度 JICA 九州教師海外研修に同行した。派遣国はマラウイで、移動を含む 12 日間の研修である。派遣前研修で参加する先生方と顔合わせをしていたので、福岡空港で円滑に集合することが出来た。香港経由で南アフリカのヨハネスブルグに到着し、そこからマラウイへ向かった。到着後空港で両替を行い、マラウイの通貨であるクワチャは少額でも札束になってしまうので、さっそくカルチャーショックを受けていた。首都リロングウェ中心部に向かい、まずホテルでチェックイン。その後、近くにあるスーパーマーケットで買い物。目に映る全てのものが驚きであり、興味の対象となっていた。

本研修は教師対象の為、中等理数科教育強化プロジェクトの参加している専門家、現地の先生方との意見交換、青年海外協力隊が派遣されている学校視察など、教育関係の視察が主ではあったが、病院や一村一品ショップ、バオバブオイル工房などの視察も出来、先生方は熱心に話を聞いていた。中等学校での交流授業は、事前の準備に時間をかけてきたので、一番楽しみにしていた先生も多かった。8 名の先生が考えたプログラムは、クイズ、長縄跳び、書道、相撲、浴衣の着付け、ひょっとこ踊りなど様々であった。現地の学校の先生と生徒から、歓迎の歌と踊りが披露され、マラウイの国民食である「シマ」を一緒に作り、輪になって食べた。この時の先生方の笑顔が強く印象に残っている。

途中体調を崩す先生もいたが、大きな問題はなく無事に帰国することが出来た。アフリカのマラウイという国で様々なことを体験し、それぞれに変化があったようだ。この研修で得たことを、授業で活かして欲しい。先生方から何か要望等あれば、国際協力推進員として積極的に協力したい。

JICA 九州国際センター 市民参加協力課 立 野 敬 子
(専門嘱託：教師海外研修担当)

JICA 九州が、マラウイでの教師海外研修を実施して今回で 3 年目。毎年派遣前研修での先生方のドキドキ感と緊張感を伺いながら、そのうち初回と今回の先生方と現地への旅へ同行する機会を持った。いずれの回も、現地到着時の張りつめた空気から、まず現地の子どもの様子を見た時の参加者の表情の変化は、さすが先生だなあと思わずにはいられない。今回は、それぞれの訪問先でのあいさつ代わりにマラウイ国歌を演奏し合唱するというプレゼントのために、乗継空港の片隅でも全員で練習するという熱心さで、先生方の愛情の深さを感じた。在マラウイ日本大使館、訪問した学校、それに道中立ち寄ったガソリンスタンドにいた子供たちにまで国歌を披露され、現地の人たちの心をグッとつかんでいた。

研修全体を通して、主に協力隊員の活躍する場を訪問し、共同作業したり配属先を視察したりすることが多かった。そこで、直に隊員が活躍する場所や生活空間を視察し、参加者それぞれが思っ

たこと、感じたことを伺えた。毎夜夕食前に行った全体の振り返りでは、とにかく料理を注文してから出てくるまで遅い傾向にあるお店でも、料理が出そろった後までも確認し合うという真剣さであった。その結果が、毎日の学びと振り返りの中へしっかりと反映されている。

JICA の同行者は、各訪問先での温かい雰囲気を見守りながら活動時間のタイムマネージングをしつつ、JICA マラウイ事務所との諸々の調整を行い、可能な限り先生方の要望を実現させることに終始した。また滞在中の健康管理についても、体調不良者が出ると手持ちの薬を供出し合ったり事務所の医療調整員へ相談したりして、問題を最小限度に抑えることに配慮した。特に食事に関しては、衛生面に配慮した場所選びや体調不良者の回復に効果的な食事を選びと、柔軟に対応していった。時折「うるさいおばちゃん」と化した日本からの同行者ではあったが、何より皆さん大人で、それぞれに掲げた目的の達成に注力され、またどこへ行っても好奇心いっぱいに関わりを持とうとする姿を目にすると、本研修で手に入れた情報を、各学校の授業の中で最大限に生かし、国際社会を担う人材づくりに貢献していただきたいと願っている。

Ⅲ. 授業実践報告書

豊かな授業「学びの意義」

田村 栄子

TAMURA EIKO

県立小倉南高等学校（福岡県）

担当教科：英語科

●実践教科：英語・総合的な学習

●時間数：7時間

●対象学年：1学年

●対象人数：239名

実施概要

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）

The Boy Who Harnessed the Wind 風をつかまえた少年 ～開発支援教育から考える学びの意義

【2】単元の評価規準例

（ア）関心・意欲・態度

- マラウイやウィリアム少年について、知っていることや思っていることを発言しようとしたり、聞こうとしたりする。
- ペアワークなどのコミュニケーション活動に積極的に参加しようとする。

（イ）思考・判断・表現

- 仮定法過去、仮定法過去完了を用いて、正しい文を書くことができる。
- 本文を読んで、自分の意見を話す／書くことができる。

（ウ）技能

- ウィリアム少年がなぜ風車を作るようになったのかが理解できている。
- 各Partの脚注CQの問いに対し、本文の流れを的確に把握して答えることができる。
- わからない単語があっても、文脈から推測して文意をとることができる。

（エ）知識・理解

- 仮定法過去、仮定法過去完了の用法を知っている。
- マラウイ共和国や、ウィリアム少年の功績に関する知識がある。

【3】単元設定の理由（児童／生徒観、教材観、指導観）

はじめに

JICA九州教師海外研修プログラム（2017年7月29日－8月9日）で、日本ではあまりなじみの少ないアフリカ南東部の国、マラウイ共和国を訪問し、現地で日本が行っている国際協力の現場を視察する機会をいただいた。マラウイ共和国は2011年の1人当たりGNI（国民総所得、世界銀行調べ）は日本円にすると1人当たり約30,000円で、世界の最貧国のひとつである。

今回、開発途上国での研修に関連させて、学びの意味を考える機会として、1年生の生徒たちを対象に、自分が何のために学んでいるのかを、途上国の現状とマラウイで生まれ育ったウィリ

アム少年の事例を学ぶことを通じて考えさせた。

1 マラウイとウィリアム少年について

面積は日本の1/3（北海道と九州を合わせた広さ）、人口は約1500万人（日本の1/9）、主要産業は農業であり、自給作物としてトウモロコシなどが、農産輸出品としてタバコや砂糖などが生産されている。干ばつなどのため収穫量が激減しており、国際連合世界食糧計画などが援助を行っている。

世界銀行によると、2014年の一人当たり国民所得は250米ドルで、世界最下位である。

初等教育を8年、中等教育を4年、大学などの高等教育を4年とする制度である。初等学校への入学年齢は6歳であり無料だが、中等教育から学費が必要であり、学費を払えずに退学する生徒が多い。ウィリアム・カムクワンバ少年はマラウイで大変有名な若者である。彼は干ばつのために中等学校を退学したが、初等学校の図書室に通い、廃材を集めて自宅に風車を作り、自宅を電化した。その体験をもとに、アメリカ合衆国のTEDカンファレンスで講演を行い、世界中の注目を集めた。その後、アメリカ合衆国のアイビーリーグ、ダートマス大学に奨学生として進学し、卒業後はマラウイに戻り母国の発展のための研究や支援事業を行っている。

○ ビデオレターの作成

マラウイでは現地の中等学校の生徒たちを対象に交流授業を行う研修日程が含まれていたもので、本校の1年生に英語（マラウイの生徒たちの第2外国語）で手紙を書かせて、現地の生徒たちに読んでもらうことにした。手紙は、自己紹介とともに「何のために学ぶのか」についての自分の考えを述べたもので、マラウイの生徒たちにも「あなたは何のために学ぶのか」を問いかける内容となっている。その後、マラウイの中等学校の生徒たちから返事をもらい、交流を深めている。また、希望する生徒を対象に、事前にビデオレターを録画して持参したところ、マラウイの生徒たちからも動画での返信をいただくことができた。



マラウイの子ども達からの手紙を受け取った生徒達

2 マラウイでの研修について

本研修は政府開発援助（ODA）を行う独立行政法人国際協力機構（JICA）が、教師向け市民参加協力課事業の一環として、毎年九州内から8名の参加希望教師を公募し、書類審査及び面接試験を経て選出し、実施しているものである。マラウイでの活動は、在マラウイ日本大使館表敬訪問・中等学校訪問・初等学校生徒と交流授業・病院訪問・青年海外協力隊員とともにマラウイ人とのかまど作り体験等である。今回の研修日程で、英語教材『風をつかまえた少年』の題材に

なっているウィリアム少年が建てた風車も訪れた。

マラウイで青年海外協力隊員や中等理数科教育の JICA 専門家が活動している場所を視察し、支援の現場から見聞できる問題点を、毎日他県他教科の教師とともに振り返り、それぞれの意見を共有した。

3 授業のなかで考えさせたこと

後期夏期課外講習期間中（8月18日ー22日）の課題として、1学年生徒全員に、アフリカ南東部にある内陸国マラウイ共和国で生まれ育ったウィリアム少年を題材とした英語教材『風をつかまえた少年』を読ませた。

農業で生計を立てていたウィリアム少年の村は2000年12月の雨季に雨が降らず、主食のトウモロコシがほとんど育たなかったため、食糧不足が深刻になり、多くの餓死者がでた。当時14歳で、中等学校に通い始めたウィリアム少年は、教科書や制服、学費（4ヶ月分で約600円相当）を支払うことができなくなり、退学する。その後、初等学校の小さな図書館に通うようになる。そこにはアメリカ政府から寄贈された教科書などが置かれていた。そこで彼は中学2年生向けの『エネルギーの利用 (USING ENERGY)』という教科書に出会い、近所の廃材を使って風車を作り、自宅に明かりを灯すことや農業水用のポンプのエネルギーを作り出すことに成功したという実話である。ウィリアム少年の学びが、彼の家族や村人たちの生活に大きく貢献している。

マラウイから帰国した後、後期夏期課外講習中に、1年生全クラスで1年生英語科担当者協力のもと、事前に課題として与えていた教材を用いて授業を展開した。ウィリアム少年の話を通して、学びが生活の質の向上に貢献する喜びに注目させるとともに、自分がウィリアム少年だったらどう考え、どう行動するかを問いかけた。さらに、7月の朝倉市や東峰村での豪雨災害等の事例も踏まえ、自然災害が日常生活に影響を与えるような場合に、どのように逞しく、協調し、生き抜くかについても考えさせた。

4 ワークショップごとの体験学習について

サマースクール（8月24日 九州工業大学）にて、進路学習・キャリア教育の一環として、文系希望・理系希望別に分かれた1年生239名の生徒を対象に、開発教育をワークショップの形態で行った。実際にマラウイで撮影した写真やウィリアム少年のTED動画等を紹介しながら、厳しい環境にあっても、あきらめずに人々の支えのもと、主体的な学びや行動で家族や地域に貢献することができたウィリアム少年の喜びを共有した。同時に生徒達には、学びから得られる成長・貢献・自立等、目の前の課題を乗り越える意義を再認識するように促した。また、異文化理解のための体験学習も取り入れた。

【4】展開計画（全 7 時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	テーマ：英文で読むことで、マラウイについて知る ねらい：ウィリアム少年を通してマラウイの現状を知る	・ パワーポイントの写真を使い、クイズ形式でマラウイを地理やエネルギーについて説明をする。 ・ マラウイ人の生活を想像しながら、ウィリアム少年がおかれた現状について考えさせる。	教科書（啓林館） ELEMENT English Course I Lesson 8 “The Boy Who Harnessed the Wind” ・ William 少年の家や風車の写真のパワーポイント
2 ～ 5	テーマ：ウィリアム少年が風車を作る経緯を知る ねらい：ウィリアム少年の学びの原点を知る	・ ウィリアム少年の気持ちを考えながら、英文を読み進める。 ・ 自然災害のためにウィリアム少年が学校を退学しなければならなかった現状を理解する。 ・ 学校に行けなくても、独学で学び、廃材と友人の協力で風車を創りあげた事例を知る。 ・ 風車を作るのは、家族や村人のためである。完成した風車の上で、ウィリアム少年自身が地元の人々に貢献できることを誇りに思う様子を読み取る。	教科書（啓林館） ELEMENT English Course I Lesson 8 “The Boy Who Harnessed the Wind” ・ 関連するワークシート及びパワーポイント
6 本時	テーマ：Malawi 100 人村 Project ねらい：キャリア教育の一環として学びの原点について知る ワークショップ型 ・ マラウイ人になって考えてみる ・ 何のために学ぶのかを考える	・ 世界人口の中に占める日本やマラウイの子供の数の違いを、役割カードを使って体験的に学ぶ。また違いの原因を考えさせる。 ・ マラウイの衣食住について、教師が現地で撮影した写真を示しながら紹介する。 ・ 日本とマラウイの識字率の違いについて学ぶ。生徒たちが読めない言語で書かれたペットボトルの水を飲むことで、体験的に問題の深刻さに気付く。 ・ マラウイの挨拶を現地の言葉で紹介する。 ・ マラウイの子供たちの夢をビデオレターで撮影した動画を紹介する。	・ 世界地図 ・ 「世界がもし 100 人の村だったら（開発教育協会）」の役割カード ・ ペットボトルに入った水・塩水・砂糖水 ・ William の家や風車の写真や動画 ・ TED 動画 (William) ・ マラウイの子供たちの動画 ・ 青年海外協力隊員の写真

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
		・ 英文で読んだウィリアム少年の家や風車の写真を紹介しながら、マラウイの現状を伝える。 ・ ウィリアム少年がスピーチした TED 動画を紹介しながら、リスニングを行う。 ・ マラウイの現状を踏まえながら、生徒たちに学びの意義について考えさせる。	
7	テーマ：異文化理解 ねらい：マラウイの青年海外協力隊員及び青年海外協力隊員経験者を通して異文化理解をする。また国際協力の現状を知る。  元ガーナ青年海外協力隊員（現北九州国際協力推進員）によるプレゼンテーション	・ 本校の公開授業でコミュニケーション英語Ⅰの授業一環としてティームティーチングで行った。  在マラウイ青年海外協力隊員のスカイプによるプレゼンテーション ・ 石川直樹（探検家・写真家）が高校時代に異文化に興味を持ち、多くの冒険に挑戦する話である。 ・ 実際に海外を訪れ、仕事をする上で達成感や留意点等、体験者から直接英語で学び、その内容をクラスメイトと共有する。 ・ 新しい文化に触れることの新鮮さや喜びを知るとともに、異国の人々に自分たちの提案を受け入れてもらうことの難しさを学ぶ。	教科書（数研出版） Polestar Communication English I Lesson 3 The Adventures of Ishikawa Naoki ・ マラウイの青年海外協力隊員とのスカイプによるプレゼンテーション ・ 元ガーナ青年海外協力隊員（現北九州国際協力推進員）によるプレゼンテーション ・ 本校のカナダ出身 ALT によるプレゼンテーション

【5】本時の展開

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	Malawi 100 人村 Project 2つの目標を示す ・ 自分たちがマラウイ人であると仮定する。 ・ 「学ぶ意義」について考える。	・ ワークショップ型（体験しながら学ぶ）であることを理解する	・ パワーポイント ・ 世界地図 ・ マラウイで撮影した写真等

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
展開 (40分)	①「世界の人口」 「世界は今、高齢化？ 若年化？」 世界人口は増加し、マラウイのような途上国では子供の比率が高い。 ② 世界の言葉で「こんにちは」 「文字が読めないということ」 世界では7000語以上の言語が話されている。 途上国では識字率が低い、これによってどんな不便さがあるのかを体験する。 ③ マラウイの教育や産業紹介 ④ ウィリアム少年の実践 彼が作成した風車や家族の写真を紹介する。 アメリカでの彼のプレゼンを英語で聞く。	- 生徒のカードが、「子ども」、「大人」、「お年寄り」の種類によって、立ち座りすることで、「子ども」が世界に多いことを実感する。 - なぜ「子ども」の比率が高いのかという原因を考え意見を述べてもらう。 - 役割カードに書かれている言葉で挨拶を交して、同じカードの人を見つけて座る。 - 文字が読めないことで、社会との関係の中で不便が生じる体験をする。 - マラウイの子供たちが第二外国語の英語を使って自分たちの夢を語っている動画を見る。 - マラウイの子どもたちの動画を通して学ぶ喜びや希望を持っていることに気付く。 - 主に天候に左右される農業であり、子供たちの教育に影響を及ぼしている現状を写真やデータで知る。 - ウィリアム少年がどのような考えで風車を作ろうとしたのかを考える。 - ウィリアム少年の周りの人々はどうに見守っていたのか。 - 風車を建てた後、彼はどのような進路を歩み、今、何に取り組んでいるのかを知る。	「世界がもし100人の村だったら（開発教育協会）」の役割カード 「世界がもし100人の村だったら（開発教育協会）」の役割カード - ペットボトルに入った水・塩水・砂糖水（ネパール語で表示されている） - マラウイの子供たちの動画 - William 少年の家や風車の写真や動画 - TED 動画(William)
まとめ (5分)	「何のために学ぶのか」 高校生たちが今学んでいる原点は何かについて考える。 学ぶことの喜びや社会貢献について気付く。	国際協力として青年海外協力隊員の写真を紹介しながら、高校生として学びを主体的に考えて、進路決定をしていくかを考えさせる。	在マラウイ青年海外協力隊員の写真

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
		・ 成長・自立・幸せ・貢献・自信・夢・将来などのキーワードを提案し、英文と日本語でまとめる課題を与える。	・ ワークシート

【授業実践の様子】



世界の言葉で「こんにちは」



ネパール語で「薬・毒・水」と書かれた
ペットボトルの飲み物



ペットボトルの中身を当てて飲む様子



【6】本時の振り返り

- ・ 教師が実際のチデンジを着て授業を行ったが、生徒たちは大変興味を持ったようだ。
- ・ 本校採択教科書に掲載されていないが、掲載されている教科書を集め、生徒の習熟度に合う英文を選択し、ワークシートを作成した。（使用教科書 啓林館）
- ・ 本校採択教科書（数研出版）の掲載されている世界冒険写真家石川直樹氏の話を学習している途中だったので、マラウイだけでなく他のアフリカ・ガーナや異文化について積極的に学ぼうとする姿勢を育む授業を展開できた。
- ・ ワークショップ型の授業は、生徒にとって大変分かりやすかったようである。生徒たちが今後このような授業を受講する際に積極的に取り組む礎ができた。

【7】単元を通した児童生徒の反応／変化

ワークショップの後に、生徒にアンケートを書かせた。その中での質問に対する生徒の回答の概要とその分析は以下の通りである。

① マラウイと日本の教育の違いでどんなことが印象に残りましたか？ そしてそれについてどう感じましたか？

日本とマラウイの義務教育の修学年数や費用の違い、つまり日本は小中学校の9年間が義務教育で無償が保障されているが、マラウイは8年間の小学校が義務教育で無償だが、中学校が4年間で授業料がかかること。それによってお金が払えない家庭の子どもは学校に行けず、進学率はわずか30%程度であるという現実。また識字率の違いについて、日本はほぼ100%だが、マラウイは61%に過ぎず、教育の普及がかなり遅れていることなどに驚いている回答が多かった。

また文字を読んだり、書いたりできないことはどんなことなのかをワークショップで経験し、その不安な気持ちが理解でき、よかったという回答が多かった。そのことは同時に日本では当たり前のように学校に行って勉強している環境は、実はとても恵まれていることであり、勉強したくてもできない人たちのことを考えると、今ある教育環境に感謝して頑張らなければいけないし、自分は甘えていると考える生徒の感想が多かったことにも通じている。

② ウィリアム少年がしたことについて、どう思いましたか？

全体を通じて多かったのが、飢饉の被害で家計が苦しく、中学校に行けなかった14歳の彼が図書館で勉強し、村人のため風車を作り、村の生活に活気と灯りをとめたことへの驚きと敬意の気持ちであった。自分にはそんなことはできないが、彼の考え方や生き方に影響を受け、今の自分はこれでいいのかという感想も多くあった。不屈の精神で最後まで諦めずに成し遂げることの大切さや、学びは夢を与えてくれるということを彼の経験から学んだという感想も多く、ウィリアム少年の生き方と自分を比較して学びの意味を考えさせることができたと思う。マラウイの人々が置かれている厳しい生活についてもウィリアム少年の話を通じて、実感できたと思われる。

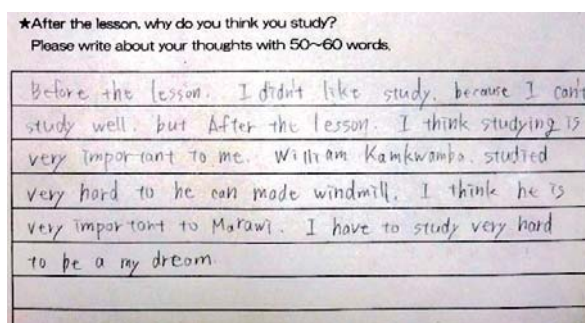
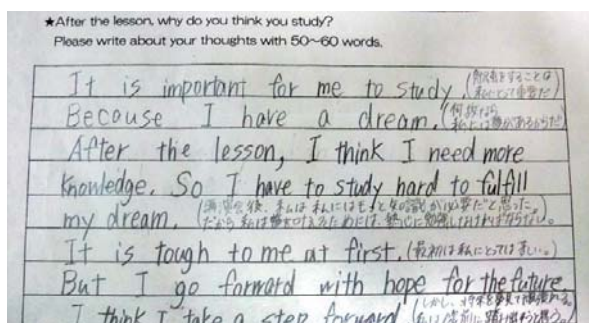
③ あなたにとって学びとは何ですか？ そして夢とは何ですか？

学びとは何かに対して、生徒の感想で多かったのが、学びは自分を成長させるものであり、自分の夢を叶えるもの、また社会で生きていくうえで自分の力になるものという回答であった。学ぶこと、知ることが自分のプラスとなり、新しい世界に出会い、新たな好奇心へとつながるものと考えているようである。また、ウィリアム少年の姿から、世の中の人に少しでも役に立てるようなこと、つまり学びがみんなの役にたつことにつながればよいと考える生徒も多かった。

また、次のような感想も見られた。「・学ぶことで自分に自信がつく・目標や夢があるから頑張れて、生きがいを持つことになる・夢をかなえるためにすることが学び・学ぶことで夢や目標を見つけていきたい・学びは人生そのもの、人生をよりよくするために学んでいる・今までは単純に勉強することと思っていたが、日々の生活の中でいろんな経験をすることで学び、人生の選択肢が増えることになる・学んで知ったことやわかったこと、気づいたことをきちんと自分の身に付けることが学びと思う・学びとは自分の目標や将来の夢に向かって頑張れることだと思う」などである。

④ 学習後の感想

- ・ マラウイの暮らし、環境、学校のことがよくわかった講義だった。今日の講義がなければずっと知らないままでいたし、世界観が広がった気がした。
- ・ 日本の生活が当たり前とっていた。 ・ マラウイでは40%が文字を読めない、中学校に行けない子供が70%に驚いた。 ・ 自分たちは恵まれていることに気付かされた。
- ・ ウィリアム少年の言葉に励まされた。彼の言葉をこれからも大事にし、実践したい。
- ・ どんなことでも最後まであきらめない。 ・ 厳しい生活の中でも夢は忘れていない彼らに励まされた。
- ・ マラウイの人たちの笑顔は素敵だ。 ・ 支援事業に興味を持った。 ・ 日本は高齢化が進んでいるが、アフリカでは子どもが半分ということに驚いた。 ・ マラウイの子どもは住んでいる村のために〇〇になりたいと思うところがすごいと思った。 ・ マラウイの子どもは人を助ける仕事につくのが夢であることにすごいと思った。
- ・ 貧しいけれど、夢や希望を持って生活する姿に感動した。 ・ 言葉が通じないってこんな気持ちなんだ、文字が読めないのは不安になるなあと感じることができた。
- ・ 「当たり前」の意味を考えさせられた。 ・ 世界にはいろいろな国があることを知った。



生徒たちの英語による感想文（原文）

単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲について

- ・ 多様な家族背景を持つ生徒たちが、この授業後、積極的に話しかけてくれるようになった。また自分の家族に関心と誇りを感じると話してくれた。
- ・ 教師自身がマラウイに渡航する前に、マラウイの子どもたち宛に生徒に書いてもらっていた手紙やビデオレターの返事を受け取った時、感激しアフリカを身近に感じたようだ。
- ・ 本校の採択教科書にアフリカのシエラレオネの Blood Diamond の話が掲載されているが、遠く自分たちとは関連の薄い話と受け止めていない。どうすれば問題解決するかを真剣に考察している感想が多い。

途上国・異文化への意識の変容について

■授業前

- ・ アフリカに行く教師に向けて、不安そうな表情の生徒が多く見受けられた。

(予防注射などの話を受けて)

- ・ 1年生が入学当初、英語の教科書に日本食文化を扱う教材の際に、海外で日本食を食べてみたいかという問いかけに、大半の生徒が日本食は日本で食べるものが一番美味しいから、わざわざ海外で食べる必要を感じないと答えていた。つまり日本に関わりがある異文化でさえもあまり関心がなかったようである。

■授業後

- ・ アフリカから手紙を受け取った生徒たちは、生徒自身の問いかけに返事をもらえたことに大変満足したようであった。数名手紙を書けなかった生徒たちは、返事をもらえなかったことに悔しがっていた。
- ・ 授業や休み時間を利用して、教師がマラウイで撮影した動画を見せることで、非常に臨場感をもったようである。将来アフリカに行きたいと言い始める生徒がいる。廊下ですれ違いざまに、チェワ語で挨拶してくれる生徒もいる。

自己評価

■苦労した点

普通高校の現場では進路学習と言え、大学入試を突破できる高い学力の養成を目標としている。学びの原点を問いかける中で、「自分の成長のため」という生徒の答えは当然のことだと考えられる。

しかしながら、学ぶことで新たな発見があり、それが好奇心となり、喜びになる、つまり「学ぶ喜び」に生徒たちが気付いてもらえたことは良かった。

■改善点

今回本校の英語科教員や学年教員の協力をいただけたので、スムーズに展開できた。また本校や地域の教員を対象とした人権・同和教育研究会で発表の機会をいただけた。

これらの支援がなければ、この教師海外研修の学びを教育活動に還元させることは難しいと考える。このような連携した組織的な取り組みのシステムを何か1つでも構築していただけると理想的である。

■成果が出た点

今回の開発教育を通じて学びの意義を考えさせる一連の取り組みについて、生徒たちは興味深く受け止め、前向きに取り組めたと思う。その感想からも概ねねらいは達成できたと考えている。ビデオレターや手紙の交流で生の声のやり取りができ、マラウイの子どもたちとの距離を近くに感じ、共通のテーマとして夢や目標について交流して、他者理解、自己表現することができたと思われる。また授業ではウィリアム少年の生き方に触れ、自分の生き方と重ねてみて、学ぶことの意味についての問い直しができたと思う。

■備考

またワークショップではマラウイ 100 人の村プロジェクトを体験しながら、マラウイ人になってマラウイを感じながら、そして世界の現状を理解しながら自分の学びについての考えを英文で書かせてみた。貧しくても、マラウイの子どもたちが笑顔でいることを生徒はどう思ったか。それはさまざまな解釈があると思う。

今まで知らなかった世界の途上国の現実に向き合い幸せに生きている彼らの姿を通じて、生徒たちが今まで抱いていた途上国へのイメージがプラスに変わったと感じた。

今回の視察で現地の先進国からの国際支援方法については、課題が多くある事を学んだ。青年海外協力隊員は途上国の現地の人々と協力しながら、現地の人々自身が自立して問題解決できる方法を模索していた。しかしながらそのような困難な状況の中でも、マラウイは Warm Heart of Africa と呼ばれるように、他者を温かく迎え、大家族で幸せに暮らしている。今後はその感性に気付かせるように促したい。

先ずは知ることの大切さに気づき、そのことによって、多くのことを学び、自分自身の感性を磨くことにつながればいいと思う。

添付資料・参考資料

- ・ 高校教科書（啓林館） ELEMENT English Course I Lesson 8 “The Boy Who Harnessed the Wind”
- ・ 高校教科書（数研出版） Polestar Communication English I Lesson 3 “The Adventures of Ishikawa Naoki”
- ・ TED William Kamkwamba: ‘How I built a windmill’ (2007)
- ・ 「世界がもし 100 人の村だったら 第 5 版（開発教育協会出版）」
- ・ 「豊かさと開発 開発教育協会」
- ・ 風をつかまえた少年 ウィリアム・カムクワンバ ブライアン・ミーラー 田口俊樹 訳
- ・ Moving Windmills Project（カムクワンバ氏のブログ）
<http://www.movingwindmills.org/documentary>
- ・ 開発教育とは？ PowerPoint 松本亜樹 作
- ・ 2016 年度教師海外研修プログラム（マラウイ）授業実践例報告書
福岡市立福岡女子高等学校 教諭 嶋田亜日香

※ 単元を構想、実施する上での教師のための参考資料、学習者のための参考資料、ウェブサイト、データリソースなど

何のために学ぶのか。
What do you study for?
～開発支援教育から考える学びの意義

JICA九州教師海外研修プログラムで、
アフリカ南東部マラウイ共和国に参加して行った
実践報告

貧困とは？
(豊かさへの8つの要素)

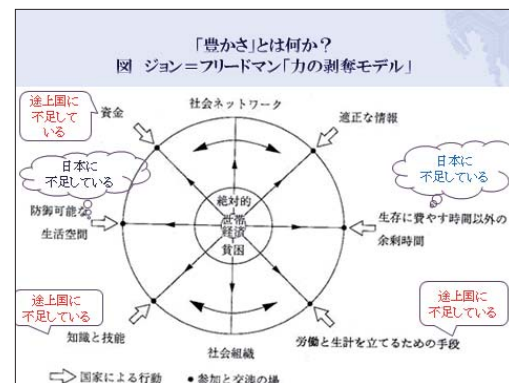
- 1「資金」→**お金**
- 2「労働と生計をたてるための手段」→**仕事**
- 3「ネットワーク」(相互扶助組織)→**安全**
- 4「家族、地域」→**孤独でない**
- 5「適切な**情報**」→チャンスをつかみ**就職**する
- 6「知識と技能」→**教育**
- 7「防御可能な**生活空間**」
- 8「生存に費やす時間以外の**余剰時間**」

開発支援教育視点で考える貧困の定義

発表内容

1. はじめに(豊かさを考える開発支援教育)
2. マラウイ(風車を廃材で作った青年)
3. 手法 その1
(夏期講座で学び、生徒たちは手紙を書く)
4. 手法 その2
(サマースクールで参加型学習を行う)
5. ふりかえりの生徒たちの感想
6. 成果と課題

発表内容



ジョン＝フリードマン「力の剥奪モデル」

2. マラウイ共和国

～風車を廃材で作った
ウィリアム・カムクワンバ青年～

風をつかまえた青年

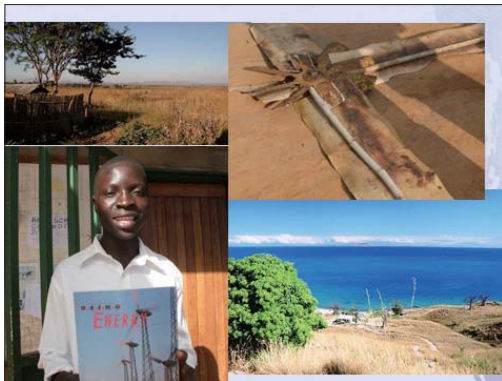
カムクワンバ少年の風車と妹のローズさん

2. 教材ウィリアム・カムクワンバ青年

カムクワンバ少年の紹介 (教科書啓林館写真より)

日本からのビデオレター

日本からのビデオレター
「未来へ(キロロ)」を合唱



カムクワンバ少年（教科書啓林館写真より）

日本とマラウイの教育制度の違い

	日本	マラウイ
義務教育	小学校 6年間 無料 中学校 3年間 無料	小学校8年間まで無料 中学校4年間は 年間1800円の費用が必要
就学率	小学校 100% 中学校 100%	小学校 96.9% 中学校 29.5%
識字率	100%	61.3%
女子進学率	100%	24%
1クラスあたりの 人数(小学校)	約30～35人	約100人

日本とマラウイの教育制度の違い

識字率

日本→100%

マラウイ→ 61%



日本とマラウイの識字率の違い

マラウイからのビデオレター



マラウイの子どもたちが手紙を書く様子

参加型学習(ワークショップ)



ワークショップの様子

世界へのとびらを開けてみよう

森 久 幸 子

MORIHISA SACHIKO

福岡市立西花畑小学校（福岡県）

担当教科：全 科

●実践教科：学級活動、総合的な学習の時間、
道徳

●時 間 数：6 時間

●対象学年：4 年生

●対象人数：29 名

実施概要

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）

遠く離れたマラウイやモザンビークの人々について知ることで、世界の人々に興味や関心をもつ。

【2】単元の評価規準例

（ア）関心・意欲・態度

外国の人々や文化に関心をもつ。

（イ）思考・判断・表現

思ったことや感じたことを発表したり書いたりしている。

（ウ）技 能

積極的に自分の考えを伝えたり、相手の話を聞こうとしたりしている。

（エ）知識・理解

自国の文化や異文化に対し理解している。

【3】単元設定の理由（児童 / 生徒観、教材観、指導観）

（1）児 童 観

本学級は、男子 15 名、女子 14 名の計 29 名で、素直で明るく何事にも意欲的に取り組む児童が多い。本校は姉妹校提携をしているニュージーランドの中等教育学校と国際交流を行っている。毎年秋に、そこから 30 人程の生徒・教職員及び保護者を受け入れ、全校での歓迎集会を 1 時間と各学年での日本文化の体験を通しての交流を 1、2 時間行っている。更に、隔年で、本校からも 10 人程の高学年の児童がニュージーランドを 10 日間程訪問しており、外国の方や文化に触れる機会はある。しかし、地域的には、外国の方が多く住む地域ではないため、普段は外国の方との交流はほとんどない。

（2）教 材 観

学級活動や総合的な学習の時間、道徳の授業を通して、以下の流れで授業を進める。第 1 時では、遠く離れた同世代の子ども達に自分の国の文化を紹介することで、自国の文化に対して興味や誇りを持たせたい。第 2 時では、マラウイの南東部に位置するモザンビークの子ども達と Skype を使って交流することで、アフリカで暮らす同世代の子ども達に興味を持たせたい。第 3・

4時では、フォトランゲージという手法を使って、注意深く絵や写真を見ることで、マラウイの子ども達の暮らしに興味を持たせたい。第5時では、第2時及び第3・4時でマラウイやモザンビークには働いている子どもがいることや学校に行けない子どもがいることを知った上で、「もし文字が読めなかったら。」という疑似体験を通して、日本で暮らす自分の生活を振り返らせたい。第6時では、マラウイのウィリアム・カムクワンバ少年の実話を通して、困難な状況に置かれても希望を持ち、あきらめずにやり遂げることの良さについて深く考えさせたい。

(3) 指導観

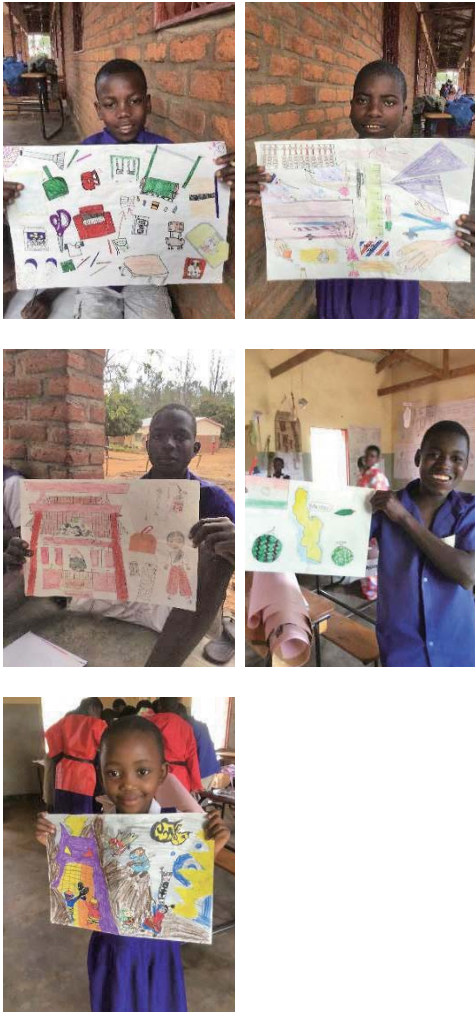
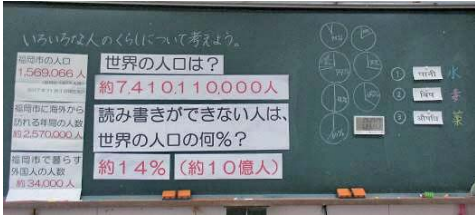
グローバル化が進んだ現代、日本にもたくさんの外国人が観光だけではなく、就学や就職のために訪れており、福岡市で暮らす外国人の数も約 34,000 人と増えてきている。これから子ども達が成長していく中で、自分とは異なる文化的背景を持った人々と関わる機会は益々増えていくであろう。その際に、勝手なイメージや偏見を持たず、前向きで良好な関係を築こうとする態度を育てていきたい。また、世界が不安定な状況にある時代だからこそ、相手の話を聞き、違いを認め合い、互いの意見をすり合わせながら、協力して問題を乗り越えようとする人になって欲しいと考えている。そして、物事を多面的・多角的に捉える力、困難な状況でもあきらめずに立ち上がる力、前向きに「生き抜く力」を育てていきたい。

【4】展開計画（全6時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	学級活動 「マラウイの子どもたちへ日本をしょうかいしよう。」 外国の人に、自分の国や町、学校、文化について紹介しようとする中で、自分の国の良さに気づき、興味や誇りを持つ。	1 マラウイの小学生に向けて、日本や福岡、小学校を紹介する絵を作る。 ※テーマごとにグループに分かれ、協力して作る  	地図帳

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
2	総合的な学習の時間 「モザンビークの子ども達と話そう。」 同世代のアフリカの子ども達やその暮らしについて知る。	1 国際協力推進員より青年海外協力隊について話を聞く。 2 Skypeを通してモザンビークのアネクサ小学校と交流する。 ① 挨拶 ② 学校紹介 ③ 歌や踊り、劇の披露 ④ それぞれの言葉で挨拶 ⑤ 質疑応答 ⑥ お礼の言葉（代表児）  スクリーンを通して交流  ソーラン節を披露	「モザンビークからきた天使 医師をめざすアフリカからの少女の日本留学記」という校内図書館にあった書籍を紹介。
3 4	学級活動 「マラウイについて知ろう。」 同世代のマラウイの子ども達やその暮らしについて興味や関心を持つ。	1 マラウイの子どもたちの描いた絵や写真を見て、その周りに思ったことや疑問、感じたことなどを友達と話しながら、できるだけたくさん書き込む。 (フォトランゲージ) (1) 班になり、7枚の絵や写真をまわす。 	

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
		2 最終的にどんなことが書かれているか、それぞれの班にある紙を見てまわる。 3 全体で交流する。 4 第1時で児童が描いた絵をマラウイの児童が受け取っている写真を見せる。	

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
		 5 マラウイの生活が分かるその他の写真をスクリーンで見せながら、教師が解説する。	
5	学級活動 「文字が読めないってどういうことだろう。」 「もし文字が読めなかったら。」という疑似体験を通して、自分の生活を振り返る。	1 福岡市の人口、福岡市に海外から訪れる年間の人数、福岡市で暮らす外国人の数などを予想する。 2 世界の人口、読み書きができない人は世界の人口の何%かを予想する。 (後者は、保護者にも挙手してもらう。) 	

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
		3 文字が読めないことの疑似体験をする。 (1) 状況説明を聞く。 (2) ヒンズー語でそれぞれ薬、水、毒と書かれた紙コップを見て、どれが何の液体か予想する。 (3) 代表児童3人がそれぞれの液体を飲む。 (4) 結果を発表する。  4 今日の学習で考えたことや思ったことをプリントに書き、発表する。	
6 本時	道 徳 (校内公開授業) 「あきらめない気持ちについて考えよう。」 困難を乗り越え、夢や希望を持ち努力しようとする心情を高める。	【5】 本時の展開に記録。	

【5】 本時の展開

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	1 めあてをつかむ。 めあて あきらめない気持ちについて考えよう。	○ 以前マラウイについて学習した際に使ったフォトランゲージの紙を提示し、マラウイの経済的な困難さを想起させ、教材に関心をもたせる。	『風をつかまえたウィリアム』 (さ・え・ら書房)

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
展開 前段 (20分)	2 教材『風をつかまえたウィリアム』を読んで話し合う。 (1) お父さんに「学校のお金がはらえなくなった。残念だが、学校をやめておくれ。」と言われた時のウィリアムの気持ちを考える。 ・ もう勉強できないなんて悲しい。 ・ お金が払えないほど、わが家は大変なんだ。 (2) 村の人に笑われたりからかわれたりしても、風車づくりをあきらめなかったウィリアムの気持ちを話し合う。 ・ 風車を作って家族を助けよう。（目標） ・ 笑われても風車を作るぞ。（強い意志） ・ ある物で作りあげよう。（粘り強くやり抜く態度） (3) 電球が、明るく輝いた時のウィリアムの気持ちを考える。 ・ 家族を助けることができる。 ・ 笑われても続けてよかった。 ・ これで、畑に水がやれる。	○ 教師が絵本を使って資料を読むことで、話に集中できるようにする。 ○ 場面を把握しやすくするために、挿絵を黒板に貼る。 ○ 自己をみつめるために、自分だったらどうするかを考えさせる。 ○ 人によって違いがあることに気づかせるために、「あきらめる。」か「あきらめない。」のどちらに自分の考えが近いかを黒板に名札を貼らせることで示す。【写真1】 ○ 「あきらめない」側に名札を貼った児童に対して、考えを揺さぶる発問をする。 ○ 色カードで意思表示し、異質の考えの人と話し合わせることで、同じ状況でも多様な考えがあることに気づかせる。 【写真2】 青カード「あきらめない。」 赤カード「あきらめる。」 ○ ウィリアムの気持ちをできるだけたくさん発表させ、あきらめなかったことで目標を達成した喜びを強く感じさせる。 ○ 気持ちの変化があれば、赤鉛筆で書き加えさせる。	
展開 後段 (15分)	3 過去や未来の自分について考える。 (1) これまでに、目標に向かってあきらめずに取り組んだ経験、またはあきらめてしまった経験について振り返る。	○ がんばっている児童の経験を例に取り上げることで、実践意欲をかきたてる。	

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
終末 (5分)	・ 野球で毎日自主練習をやりとげ、レギュラーになった。 ・ ハードル走で、あきらめずに練習したら記録が伸びた。 (2) これから困難な状況に陥った時に、どのような気持ちで向き合うかを考える。 ・ 2学期は、家庭学習を毎日出すことができなかったけれど、3学期はあきらめずに続けたい。 4 大人になったウィリアムさんについて知る。	○ 二分の一成人式を向かえることに触れ、これまでの自分を見つめたり、これからの自己の生き方について考えたりさせる。 ○ 困難をあきらめずに乗り越えた現在のウィリアムさんやその家族の様子を写真で紹介することで、目標に向かって、強い意志を持ち、粘り強くやり抜くことの素晴らしさを感じ取らせ、実践意欲につなげる。	

【授業実践の様子】



板 書



写真 1



写真 2

【6】本時の振り返り

授業のねらいとする価値に対する目標達成度は、95%である。理由は、ねらいとする価値について、20人※中最最終的に19人が「あきらめない。」と答えていたからである。また、どちらの判断をするか最後まで悩んでいた1人の児童も、回収したプリントを見ると、赤鉛筆で「あきらめない。」と書き加えていた。また、学習の振り返りにも、「死にそうな時にはがんばれないけど、あきらめないでそれに打ちむかっていきたい。」と答えていた。

協議会では、立場を思考して考えを二極対立型で話し合わせるという授業の組み立ては良かったと評された。児童がねらいとする価値に真剣に向き合い、他者と話し合い最終的に結論を出すという実際の集団の中での意思決定に必要な手順で行うことができたので、良かったと思う。

改善点は、展開後段に十分に時間を取るために、教師の発言を精選することである。

【7】単元を通した児童生徒の反応／変化

単元後のアンケートで、「授業を通して、外国の人や文化、生活などにきょうみはわきましたか。」という設問に対し、29人全員が「はい」と答えていた。

また、授業を含む活動の中で一番心に残ったことを尋ねると、以下の順番となった。

1. モザンビークの子ども達とテレビ電話で交流したこと。※1
2. マラウイの小学生に、日本をしょうかいする絵をかくて、それがマラウイの子ども達に届いたこと。※2
3. 文字が読めないのはどういうことか、体験したこと。
4. 『風をつかまえたウィリアム』という絵本を通して、ウィリアムさんのことを知り、あきらめない気持ちについて考えたこと。

(授業実施日はインフルエンザで10人早退・欠席のため、参加者は20人)

5. マラウイの子ども達に、色えんぴつやパスをプレゼントしたこと。

マラウイの子ども達のかいた絵や写真を見て気づいたことを書きこんだこと。(同数)

以上の結果から、上位に上がっているのは※1と※2にあるように、直接または間接的にでも相互の交流があった活動であった。以下に、心に残っている理由をいくつか紹介する。

(児童の言葉をそのまま記載する。)

〔モザンビークの子ども達とテレビ電話で交流したこと。〕

- ・ 会話できて楽しかった。
- ・ 質問したりできたから。
- ・ 写真では伝わらないことがいっぱい知れたから。
- ・ 何千kmもはなれた遠い国の人と顔と顔を合わせて話すことができたから。
- ・ モザンビークの人の顔を見れたので、うれしかった。
- ・ モザンビークは早朝なのに、歌を聞かせていただいたりして、本当に会っているような気持ちになれたから。
- ・ 子どもも畑をたがやしていると知ってすごいと思った。
- ・ モザンビークは、マラウイと一緒に、日本のくらしとちがうところがいっぱいあったから。
- ・ モザンビークの子ども達のダンスがうまかったから。
- ・ げきをしてくれたりしたから。
- ・ モザンビークの人たちのことが少し分かって楽しかったから。

〔マラウイの小学生に、日本をしょうかいする絵をかいて、それがマラウイの子ども達に届いたこと。〕

- ・ いっしょうけんめいにかいた絵を見てくれてうれしかった。
- ・ マラウイの小学生に日本という国を分かってもらえたと思うから。
- ・ 日本には遊びがいっぱいあることをマラウイの人に知ってもらえてうれしかった。
- ・ 自分たちの国のことをたくさん知ってもらえたような気がして、喜んでもらえて、うれしく、かいてよかったと思った。
- ・ 絵がとどいてうれしかった。
- ・ 自分たちが友達と協力してがんばってかいた絵があんな遠くにいるマラウイの人にとどいたから。
- ・ 学校で絵をかいてアフリカのマラウイにとどけることはないから。
- ・ マラウイの人にとどいて、写真を見るとうれしそうでよかった。
- ・ 自分たちで用意するのも楽しかったし、マラウイの子ども達も笑顔でみてくれてよろこんでいそうで、うれしかった。

〔文字が読めないのはどういうことか、体験したこと。〕

- ・ 文字が読めないとどれほど困るかよく分かったから。
- ・ 文字が読めない人がどんなにくろうしているか分かったから。
- ・ 世界では、いろんなことに困る人たちがいるということを、改めて知り考え直したから。
- ・ 字が読めなかったら勉強もできないと分かって、字が読めない人をサポートしていきたいから。
- ・ いざという時に字が読めないといろんなはんだんができずこまっている人がいたということを知ったから。

〔『風をつかまえたウィリアム』という絵本を通して、ウィリアムさんのことを知り、あきらめない気持ちについて考えたこと。〕

- ・ あきらめないということは、大事なんだな、と思った。
- ・ みんなが苦しい生活をしないですむように、あきらめないで努力を続けたウィリアムさんを尊敬した。
- ・ どんなにまわりからバカにされても、ずっと完成するまであきらめなくて、とても心が強かったから。
- ・ ウィリアムは学校も行けないのに図書館で自分で本を読んで、風車をつくったから。
- ・ お金がなくても、村の人が生活しやすくてできることがわかったから。
- ・ が死しそうでも、苦しくてもみんなを助けたいという気持ちがすごい。
- ・ 私だったらと中であきらめていたかもしれないけど、ウィリアムさんは、最後まであきらめずにやりとげて、みんなを救うことができたから。

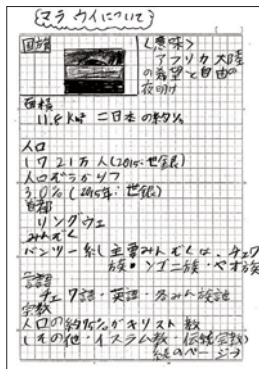
〔マラウイの子ども達に、色えんぴつやパスをプレゼントしたこと。〕

- ・ 自分の物をプレゼントできたから。
- ・ 自分がプレゼントした物がマラウイの小学生に届いたから。
- ・ これで絵をかいたりしてほしいと思ったから。
- ・ プレゼントしたものを使って、絵をかいてくれていたから、うれしかった。

〔マラウイの子ども達のかいた絵や写真を見て気づいたことを書きこんだこと。〕

- ・ 牛をつかって物をはこんでいることがわかったから。
- ・ こんなに生活に差があるんだと思ったから。
- ・ 色々なことに気づけてうれしかった。
- ・ 絵がうまかったから。
- ・ 知らないものなどが写真にのっていてびっくりしたから。
- ・ 絵を見て、「これ何だろう。」と不思議に思ったことが沢山あったから。
- ・ 絵に日本で見たことのないものがあったから。
- ・ 「こんなことしてるんだな・・・」、「こんな町なんだな・・・。」ということを知れたから。
- ・ マラウイの子ども達が、どんな暮らしをしていたのか分かって楽しかったから。

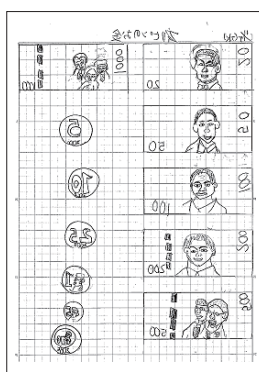
単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲について



マラウイについて
調べたノート



青年海外協力隊やマラウイについて
調べたノート



フィリピンのお金について
調べたノート



カナダについて
調べたノート

マラウイやモザンビークだけではなく、他の国に関しても自学（自主的な学習）ノートに調べてくる児童が出てきた。

途上国・異文化への意識の変容について

■授業前

4年生という発達段階では、途上国という言葉を知らない児童がほとんどで、アフリカに対するイメージ自体ない児童もいた。イメージを書いていた児童でも、予想外のものも多かった。

- ・ 動物がたくさんいる。
- ・ 一年中暑そう。
- ・ 植物があまり生えていない。
- ・ 土と草が多い。
- ・ 建物が無い。
- ・ 建物が高そう。
- ・ ごうかなたて物がいっぱいいたっている。
- ・ 生活が大変そう。
- ・ 大変なことは少ないイメージ。
- ・ 人が少ない。
- ・ にぎやかな場所。
- ・ 食べ物がたりなくて苦しい生活をおくっている。
- ・ ゆたかでみんなが楽しくくらしている。
- ・ まずしい。
- ・ 電波がとどいていない。
- ・ 字が書けない。
- ・ お金をたくさん持っている人が多い。

■授業後

マラウイについて日本との違いに驚くことは多かったようだが、ポジティブなイメージを持った児童が多かった。

- ・ けっこう人が多い。
- ・ 建物がそんなに高くない。
- ・ 字が書ける。
- ・ とてもくるしい。
- ・ 大変なことも沢山あるということ。
- ・ みんなお金をたくさん持っている感じじゃなかった。
- ・ 決してまずしくはない。(パソコンもあったから。)
- ・ 食べ物はあったけど、少ししかない。
- ・ 食べ物にこまったりしているかもしれないけど、子どもも手つだいをして協力している国。
- ・ みんなとても明るくて、あきらめない心があると思った。
- ・ まっすぐでやさしい人などがいっぱいいたから、身近に感じた。
- ・ いろんな人がやさしそうだった。
- ・ おさない子どもがいた。
- ・ 子どもがぼうしを売るなど、日本とは生活がちがう。

- ・ 子ども達が料理を作っていてすごいと思った。日本は親が作ってくれているから。
- ・ 子どもたちが働いていたり、みんなのためにしている人がいたりしてすごいところ。

自己評価

■苦勞した点

年間のカリキュラムが決まった上で、2学期以降に授業を組み入れていくことが難しかった。

■改善点

学年に合わせて、国際理解教育の視点を含んだ授業を各教科で展開ができると思うので、今後は年間を見通した授業展開を考えていきたい。

■成果が出た点

4年生という発達段階を考慮して、まずは児童がマラウイという国や人々について興味を持ち、少しでも世界を身近に感じて欲しいと思い授業計画を立てた。その結果、単元の最後に行ったアンケートでは、「授業を通して、外国の人や文化、生活などにきょうみはわきましたか。」という設問に対し、29人全員が「はい」と答えていた。また、【途上国・異文化への意識の変容について】に記載したように、授業後のマラウイやモザンビークを通じたアフリカの人々に対するイメージは、「協力している。」「とても明るい。」「やさしい。」「すごい。」というような肯定的なものが多く、初めて知る国の人々に対して良いイメージで捉えることができたことも成果であった。

■備 考

研修前は、児童同士をつなげ、帰国後に日本の子ども達がマラウイの子ども達に対して何か支援することで繋がっていったらと考えていた。しかし、実際にマラウイを訪問し、学校や病院、青年海外協力隊の方々働く現場等を見て、研修生同士で支援の在り方や幸せとは何かについて毎晩考え話していく中で、当初の考えは少しずつ変化していった。また、マラウイの在日日本国大使館を表敬した際に、柳沢大使が「マラウイの良いところを、たくさん見てきてください。」とおっしゃるように、子ども達にマラウイの良いところをたくさん伝えたいと思うようになった。今回の単元を通して、上に記した通り、多くの児童がマラウイやアフリカに対してプラスのイメージを持てたことは大きな成果であった。私自身も、今回の研修に応募するまではマラウイについて全く知識がなく、情報の少ない中で、期待と多少の不安を持ち合わせてマラウイを訪問した。そして、マラウイの小学校を訪問し、子ども達と主食のシマを一緒に作って食べたり、お互いの文化を、体験を交えて紹介し合ったり、歌ったり踊ったりした。さらに、マラウイの小学校や中学校の先生方と話をしたり、地方の村に行き地元のお母さん達からかまど作りを教えてもらったりもした。そして、長距離の移動を支えてくれたドライバーの方々など、多くのマラウイの方々と関わることで、私自身がマラウイの人を大好きになった。子ども達には、一般的なイメージや偏見を持って、国や個人を捉えるのではなく、相手の良さを見つけていこうとする見方ができるよう、今後も授業を継続して行っていこうと思う。

今回、国際理解教育に関心のある九州各地の先生方や青年海外協力隊員の方々、国際協力機構

の職員の方々と出会えたことも、私の大きな財産となった。

最後に、今回このような貴重な機会を提供して下さった国際協力機構及び関係職員の方々に感謝申し上げます。

添付資料・参考資料

■添付資料：「文字が読めないこと」プリント

いろいろな人の暮らしについて考えよう

4年2組 番 名前()

あなたは、下の①～③までの文字を読むことができますか？

① पानी → ()

② विष → ()

③ औषधि → ()



上の①～③までの文字は、薬、水、毒を表しています。
どれが、なんだか分かりますか？

今日の学習で

「風をつかまえたウィリアム」プリント

4年 組 番 名前()

めあて () について考えよう。

風をつかまえたウィリアム

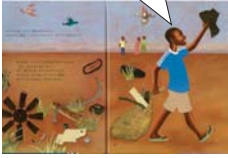
○風車を作るのに必要なお金がありません。こみすて場から物を集めていると、村の人に笑われたりからかわれたりしました。

もし自分だったら、と風車。

○それでも風車づくりをあきらめなかったウィリアムは、どんな気持ちだったのでしょうか。

今日の学習で
これまで目標に向かってあきらめずに取り組んだ経験、またはあきらめなかった経験はありますか。

これからつらいことがあった時に、どのような気持ちで乗り越えたいか、どう思うか。



■参考資料：

- ・ 国際理解教育実践資料集／国際協力機構（JICA）地球ひろば
- ・ 『風をつかまえた少年』／（文藝春秋）
ウィリアム・カムクワンバ、ブライアン・ミーラー 著
田口俊樹 訳
- ・ 『風をつかまえたウィリアム』／（さ・え・ら書房）
ウィリアム・カムクワンバ、ブライアン・ミーラー 文
エリザベス・ズーノン 絵
さくまゆみこ 訳

明日をつくるわたしたち

竹 杉 由紀子

TAKESUGI YUKIKO

福岡市立弥永小学校（福岡県）

担当教科：全教科

●実践教科： 道徳、総合的な学習の時間

●時 間 数： 4 時間

●対象学年： 5 年生

●対象人数： 4 5 名

実施概要

【1】単元のテーマ・目標

- ・ 各国の状況をより多面的に、より深く考えて意志決定できる道徳的判断力を養う。
- ・ 各国の子どもの生活の様子や抱いている夢を知り、国際理解と親善の心情を育てる。
- ・ 世界中で活躍している協力隊の存在を知り、愛国心と国際支援の気持ちを高める。
- ・ 発展途上国の抱える問題について関心をもち、行動を起こそうとする態度を養う。

【2】単元の評価規準例

（ア）関心・意欲・態度

- ・ 各国の状況について関心をもち、自分なりに課題をもって調べ、周りの人々と将来を共に考えていこうとすることができる。

（イ）思考・判断・表現

- ・ 自分たちが調べたことを新聞やポスターなどに表し、情報発信を継続して行おうとすることができる。

（ウ）知識・理解

- ・ マラウイを始めとした国の状況について、気づきや課題などを学習プリントに書き表すことができる。

【3】単元設定の理由（児童／生徒観、教材観、指導観）

（1）児童 観

本学年の児童は5年生になって、社会科の学習を通して主な世界の国のことを学んでいる。また、1学期の総合的な学習の時間の『弥永の明日を考えよう』の学習では、地域の抱えるゴミ問題について考え、ゴミ拾いとリサイクルに取り組んできた。

しかし、地理の面や文化の面でも世界に興味を抱く児童が少なく、社会科の教科書のための学習では知識も身につかず、興味関心の高まりも見られなかった。また、地域のゴミ問題は、ここ数年全ての学年で取り組むものの改善が見られず、児童の意識も地域の1つの公園のゴミ問題という程度の捉え方に過ぎなかった。

日常生活の中で日本の文化に触れることは多くある（例えば行事食など）が、その経験が乏

しい児童も多く、外国との交流授業もほとんど行われなため外国の文化を知る機会にも恵まれていない。更に、物質的に恵まれている現代における児童生徒をとりまく問題として、頑張っ手に入れる必要感が持ちにくく、そのためか将来への希望も持てず夢がないという状況が、本学年の児童にも見られた。

(2) 教材 観

道徳の授業においては、児童がよく知る数カ国を挙げ、その国の小学生の生活と文化、そしてその子どもたちが抱く将来の夢について知ることで、自分の生活をふり返り見つめなおすことができる。多様な国があることを知る中で、幸せとは何か、豊かさとは何かという事に触れ、日本の抱える矛盾に気づくことで、今の自分と将来の自分にできることがあるのではないかと、自分の将来を考えることができる。また、青年海外協力隊の仕事を紹介することは、世界の人のために働く日本の若者がいることを知り、夢の広がりにも大きな意義をもつものと思われる。

総合的な学習の時間においては、マラウイというよく知らない国の状況や文化、人々の生活を知ることを通して、国際理解と親善の心情を育てることができるであろう。併せて、100人村の学習を行うことで、自国の立場と自分たちにできることを考えるきっかけとなるものと思われる。社会の教科書を使った学習ではない、正解のないこれらの教材を通して、児童の思考に広がりを持たせられると考える。

(3) 指導 観

本指導にあたっては、児童自らが自分自身の可能性について希望をもち、更に自身の課題を広い視野で捉えて行動を起こそうとする態度を育てたい。

そのために、第一時の道徳の学習では、アメリカや韓国など、児童の知っている国の子どもの生活の様子を知らせ、どのような夢を抱いているのか考えさせる。生活背景が夢に直結していることに気づかせ、子どもの知らないマラウイという国はどうか予想させたい。また、児童が知っている国と知らない国とは何が違うのか、国語の「想像力のスイッチを入れる」の学習とも関連させて考えさせていく。

第二時の総合的な学習の時間「知らない国を知ろう マラウイ」の学習では、古今東西ゲームを通して、いかに知っている国が少ないかを認識することから始める。マラウイという国についての予想を立てた後、写真を複数提示し、フォトランゲージの活動を行う。フォトランゲージを通して、写真から与えられた情報を読み取り、マラウイという国について知るができるであろう。また、マラウイの子どもたちが抱く将来の夢を知らせることで、写真からは読み取れない日本との生活背景の違いを知ることができる。日本で生活する自分たちがいかに恵まれているのか、気づくきっかけとしたい。

第三時の道徳の学習では、青年海外協力隊について、テレビCMやドキュメンタリー映像を用いて知らせ、自分自身にできることは何かを考えさせる。導入では3ワードクイズを行い、世界が直面している状況を知らせる。そのような状況を、世界を変えようとしている人がいることを知らせ、目にしている児童が多いテレビCMを流して、青年海外協力隊という名前を伝える。実際にどのような活動を行っているのか、マラウイで出会った隊員の写真やドキュメンタリー映像を紹介し、日本にいる自分たちにできることを考えさせる。

第四時の総合的な学習の時間「弥永の明日をつくるために世界の色々を知ろう」では、「もしも世界が100人の村だったら」を教材として学習をすすめる。識字率や富の集中・分配について

知り、自分たちにできることを具体的に考え、行動スケジュールを立てさせる。そして、今後の総合的な学習の時間「弥永の明日をつくるために」につなげていく。

【4】展開計画（全 4 時間）

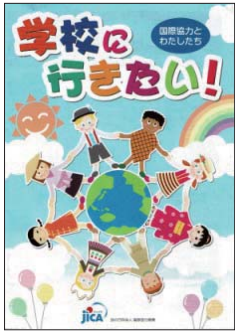
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	【テーマ】 夢をかたろう 【ねらい】 身近な国の子どもたちの生活について知り、自国との違いに気づくとともに、親善の気持ちを育てる。また、生活背景が夢に影響することに気づかせる。	1. どのような職業を知っているか交流する。 2. 日本の子どもたちの人気の職業ランキングを知り、めあてを確認する。 世界の小学生の生活と将来の夢を知り、自分たちの夢を考えよう。 3. アメリカ、イギリス、韓国、ブラジルの子どもの生活の様子を知り、どのような特徴があるか考え交流する。 【資料 1】 4. アフリカの国々のイメージを考え、発表する。 5. マラウイの子どもたちはどのような夢を持っているのか予想し、学習のふり返りをする。 6. 『希望の木』に自分の夢を貼り、マラウイの子どもにも同じように貼ってもらうことを知る。 【資料 2】	・ 学習プリント 【資料 1】 ・ 希望の木 【資料 2】
《第一時板書》			

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
2	【テーマ】 知らない国を知ろう ～マラウイ～ 【ねらい】 遠くの国の文化や生活の様子について知り、日本との違いに気づかせる。 また、物がなくても幸せに生きているマラウイの人々の生活から、豊かさの本質とは何か考えさせる。	1. 古今東西ゲームを行い、自分たちがどれくらい世界の国のことを知っているのか確認する。 【資料3】 2. マラウイという国がどこにあるのかを知り、生活や文化についての予想を交流する。 3. めあてを確認する。 マラウイの子どもたちの生活や文化について知り、自分たちの生活についてふり返ろう。 4. フォトランゲージの活動を行い、マラウイの生活や文化について気づいたことを交流する。 【資料4】 5. マラウイの子どもたちの動画を観て、生活や文化について詳しく知る。 6. マラウイの子どもたちの夢を知り、生活背景との関連を交流して考える。 7. 学習のふり返りをして、次時の見通しをたてる。	・学習プリント  【資料3】 ・フォトランゲージ  【資料4】
	 《授業終了後、マラウイの場所を再確認する様子》	 《フォトランゲージの様子》	

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
3 本時	【テーマ】 青年海外協力隊 【ねらい】 色々な国で働いている日本の若者がいることを知り、どのような思いで働いているのか考えるとともに、国際支援について考える。また、発展途上国という言葉と状況を知り、国際支援について考えさせる。	- スリーワードクイズを行い、数字や言葉から発展途上国の状況を知る。 【資料5】 - 前時のスライドをふり返り、めあてをたてる。 青年海外協力隊の人たちの活動やその夢を知り、自分たちにもできることを考えよう。 - 青年海外協力隊についてのCMや動画を観て、どのような思いで活動を行っているのか交流し考える。 - 自分たちにできることを交流し考える。	・学習プリント  【資料5】
4	【テーマ】 弥永の明日をつくるために世界の色々を知ろう 【ねらい】 識字率や富の集中・分配について知り、自分たちにできることを具体的に考え、行動スケジュールを立てさせる。今後の総合的な学習の時間の活動についての見通しをもたせる。	- 役割カードにしたがって挨拶を行い、どの言語をどれくらいの人と話しているのかを知る。【資料6】【資料7】 - めあてを確認する。 世界の中の日本を知り、自分たちにできることは何か、具体的な行動スケジュールをたてよう。 - 文字が読めないことで起こる社会的不都合について知る。 - 富の集中、分配についての活動を通して、日本の立ち位置を知る。 - 自分たちでできることは何か交流し、今後の具体的なスケジュールを考える。	・学習プリント  【資料6】 ・100人村ワークブック  【資料7】

【5】本時の展開

Ⅲ. 授業実践報告書

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
17	4. 青年海外協力隊の海外での活動動画を観て、活動内容を知る。 ・ 竈の作り方を教える。→ 村の物だけで竈を作るのはなぜか。 ・ 学校で栄養素について教える。→ どのような課題があるのか。 ・ 病院の看護師や理学療法士の仕事→ どのような苦労があるのか。	○ 動画だけでなく、マラウイで出会った隊員の写真を用意し、担任が実際に見聞きした情報も伝える。 ○ 家庭科の学習で学んだ5大栄養素の図を用意する。 ○ 国際支援活動を行っている小学校の情報を伝える。	・ 学校にいきたい 
まとめ 35 45	5. 自分たちにできることを交流し考える。 ・ ゴミを減らすことで、地球全体の環境を良くするのではないか。 ・ ペットボトルキャップを集めて、ワクチンを送る活動を行う。 ・ 年賀状の書き損じ葉書を集めて、地雷撤去に役立てる呼びかけを行う。	※ 今後の総合的な学習の時間に自分たちが行う活動の見通しを具体的に計画することができる。	・ 国際理解教育実践資料集 

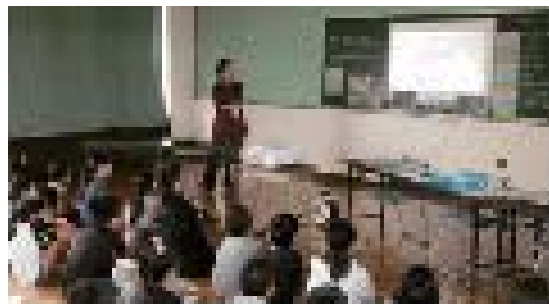
【授業実践の様子】



《第三時板書》



《授業風景》



《話を聞いている児童の様子》

【6】 本時のふり振り返り

前時「マラウイを知ろう」の学習中に提示したプレゼン資料の最後に、青年海外協力隊の隊員からのメッセージを紹介していたので、児童の中には「あ、あの時の人たち」という認識がある状態で授業を始めることができた。

スリーワードクイズは、資料を活用して具体的な数字を落とし込むことができたので、子どもたちにとってはより分かりやすく、また状況を想像しやすいものとなった。内容は総合的な学習の時間の学習につなげやすい「ゴミ問題」と「医療」に絞ったので、児童の見通しを持たせる手立てとなったと思われる。

テレビCMは最近放映されていることもあり、観たことがあるという反応が多かった。隊員インタビューの動画では、地域の抱える問題である「ゴミを捨てないこと」だけでなく、「物をリサイクルすること」に取り組む隊員の姿を観ることができて、自分たちの課題は世界にもつながっているという認識につなげられたと考えられる。

マラウイで出会った隊員の活動を紹介した際には、児童から「地産地消みたい」という声があがった。竈づくりでお世話になった佐藤隊員の『村の物を使ってつくる。村の人たちで作りつづけられるようにする。』という思いを、子どもたちなりに自分の言葉で表現することができており、これまでの学びを生かして考えることができていた。

しかし、青年海外協力隊の力は、世界だけでなく日本も元気にすることができることを伝えるための手立てを取っていなかったため、「他の国のため」の活動というところに知識がとどまったように思われる。資料を活用し、帰国後の隊員の様子にも言及しておくべきであったと思われる。

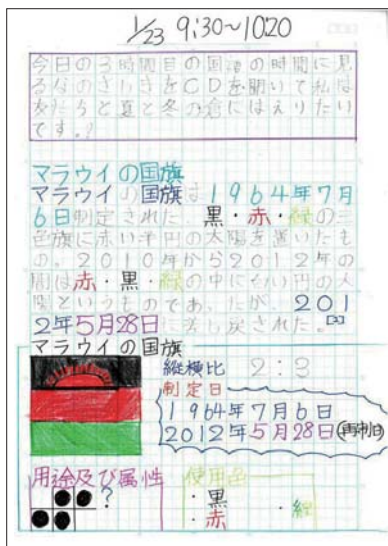
【7】 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

各学年の総合的な学習の時間の教育計画を確認しても、いずれかの国について深く学ぶという学習が組まれていない本校の児童にとって、この学習は、初めて1つの国にスポットを当てて深く学ぶ機会となった。

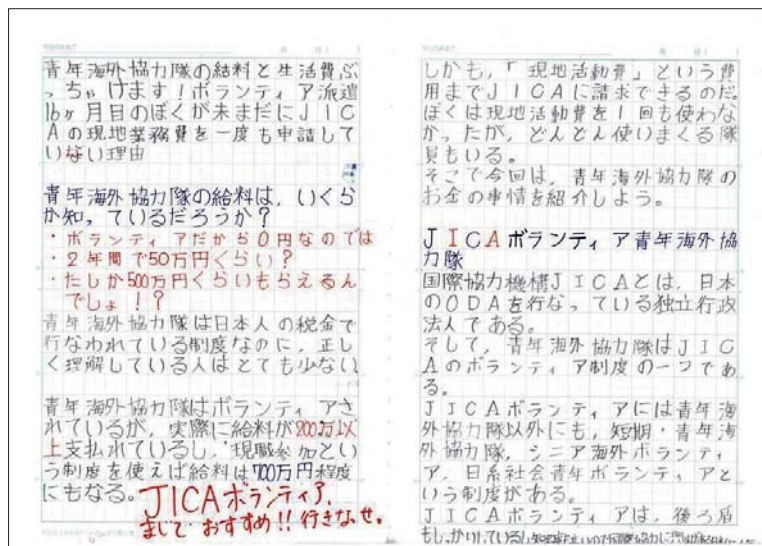
「一生小学生でいい。大人になんかなりたくない。今のままで十分。」と言っていた児童が当学年は複数いたが、色々な国の子どもたちの生活背景や文化を知り、その夢を知る中で、具体的に「看護師になりたい」や「ボランティアをする大人ってかっこいい」などと、自分の将来を考えることができるようになってきた。また、あまり知識のなかったマラウイという国について知ることによって、「物が無くても幸せに生きることができる」という意味を考え、自分たちの生活をふり返ることができていた。

この4時間の授業を終えて、この学びがこれからの総合的な学習の時間における課題発見につ

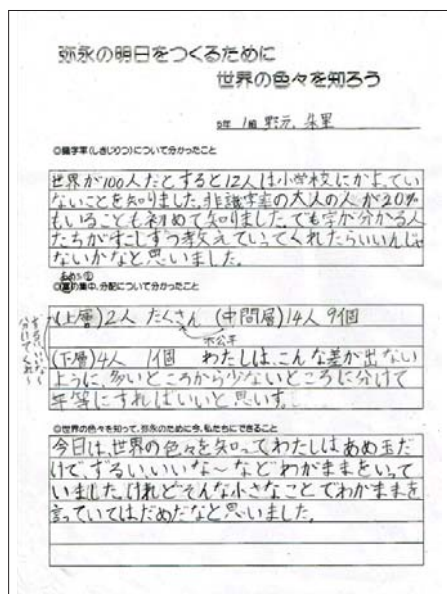
ながったと思われる。中には、「学校全体に書き損じ葉書の収集を呼び掛けて、カンボジアの地雷撤去の費用にあてます。」という提案をしたり、「親に、将来青年海外協力隊になって、発展途上でボランティアがしたいとお願いしました。」と将来の目標を決めたりした児童もいて、子どもたちの視野が、弥永という地域から広がったと感ずることができた。



《児童の自学ノート
マラウイについて》



《児童の自学ノート JICA 青年海外協力隊について》



《児童の学習プリント》

途上国・異文化への意識の変容について

■授業前

アメリカやイギリス、フランス、中国、韓国などの国についてのイメージは「大きい」「お金がある」「えらい」というイメージを持っている児童が多い。一方、アフリカ大陸の国やブラジル、フィリピンなどの国を挙げると「貧しい」「かわいそう」というマイナスイメージのみが先行しており、どのような生活を送っているか、どのような文化があるかといった知識は、メディアがある一面のみを切り取って伝えた情報からのみであった。

「支援」という言葉から想像できるものとしては、「24時間テレビの募金」のみであり、実際に体験したり、支援について自分のこととして考えたりした経験をもつ子どもはいなかった。

■授業後

異文化への意識として、多様な言語の挨拶に興味をもち、また外国語活動の学習への取り組みが積極的なものに変化した。外国を自分たちから遠いものと考えず、興味・関心をもつ対象へと変えることができていくように思われる。

途上国については、何かと自分たちの行動や考え方、また日本の状況なども踏まえてマラウイと比較し考える機会が増えてきた。小さなことではあるが、マラウイについて学ぶ授業の後、教室内での無記名の落し物が激減し、子どもたちなりに物を大切にしようとする気持ちが育ってきたように思われる。総合的な学習の時間においても、「自分たちにできる支援」についての調べ学習や呼びかけを続けており、それに関する書物の学校図書館の貸し出し冊数が増えている。

自己評価

■苦労した点

学年の児童を対象にした授業に関しては、外国文化についての知識がほとんど無い状態でのスタートだったため、児童の学ぶ意欲が高く、期待以上の反応が見られ、苦労は無かった。ただ、総合的な学習の時間の時数を考えると、「国際理解」という視点で単元を大きく取ることができればもっと多様なアプローチができたかと思うが、道徳にも総合的な学習の時間にも、また学校の状況からも制限があり、45分間の授業の中に入れた情報が多すぎて、視点がぶれたところは否めない。

■改善点

時数の確保が最も重要と思われる。支援への取り組みをもっと広げていくのであれば、総合的な学習の時間の中に大単元として位置づけ、学年全体で足並みをそろえて取り組むべきであり、またその価値が十分にある内容であると思われる。時数が確保できれば、実際にマラウイの生活の一部をやってみる体験学習や、青年海外協力隊の方を学校に呼んで、生の声を聞く講演なども組み、保護者への啓発にもつなげられたのではないかと思います。

■成果が出た点

児童の意識が変わったのはもちろん、教員の中の一人でもいいので、教師海外研修に参加し国際支援についての学習をすすめているという事実が、学校内の教員にも考えるきっかけを与えたと思われる。今回、2学期中の教師向けのマラウイ報告会及び外国語活動研究会内における報告会も予定されていたが、どちらも諸事情から今年度の実施は見送られている。来年度にむけて、改めて機会を設けてもらい、教員たちの意識を高める研修を行いたい。

■備 考

「モニ」「ジコモ」などのやりとりが、研修から半年経った今でも児童から聞こえてきたり、情報量が少ないマラウイについて自学で調べる児童の存在があったりと、多くの児童の中に確実に「マラウイ」が根付いたと感じられる。それは間違いなく今回の教師海外研修があったからこそであり、多くの児童の人生になんらかの夢と希望と人生の指針を与えたものと思われる。将来、今いる地域から出て、広い世界で生きていこうとするきっかけとなるのであれば、その意義はとてつもなく大きい。そんな彼らの意識の変容が、いつか世界を変える力になればと願いたい。



《廊下のマラウイ掲示物 他の学年の児童の目にも触れる場所》



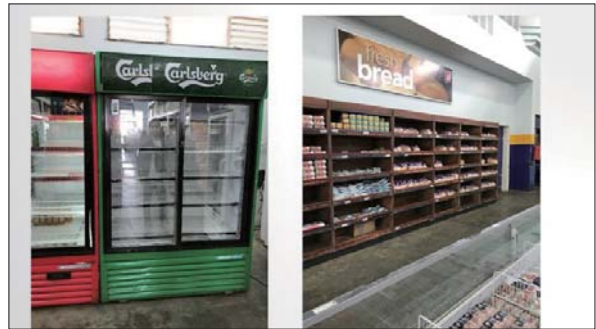
《希望の木 英語で書かれたマラウイの子どもたちのメッセージを見て、生活言語と公用語の違いに気づく児童も出てきた》

添付資料・参考資料

■ 添付資料：第二時プレゼンテーション資料



①表紙



②スーパーの中。日本との違いを探そう



③病院で会ったお母さんたち



④二種類のかまど。作りが違うのはどうしてだろう。



⑤かまどの材料は身近なところで調達



⑥かまどづくりを教えているのは日本人



⑦わらやヤギの糞を混ぜ込む



⑧みんなで協力してつくるかまど



⑨トイレはシンプルに穴



⑩友だちとの楽しいランチ



⑪家庭科の教科書で見た栄養素の図



⑫日本の書道は大人気



⑬マラウイ式大縄跳びは学習発表会で体験

マラウイの子どもたちの生活

- ・ 90%の家に電気がきていません。
- ・ 中等教育を受けられるのは30%です。
- ・ 1クラスに100人いることもあります。
- ・ 教育が受けられない→安定した職業につくことができない→収入が少ない→教育が受けられない

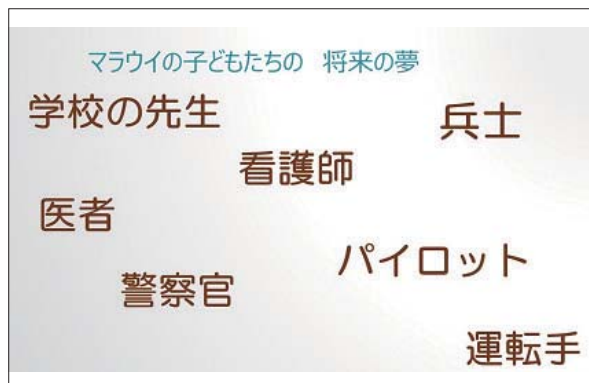
⑭日本と違うことも同じこともたくさん

それでも
ぼくたち わたしたちには
将来の夢がある

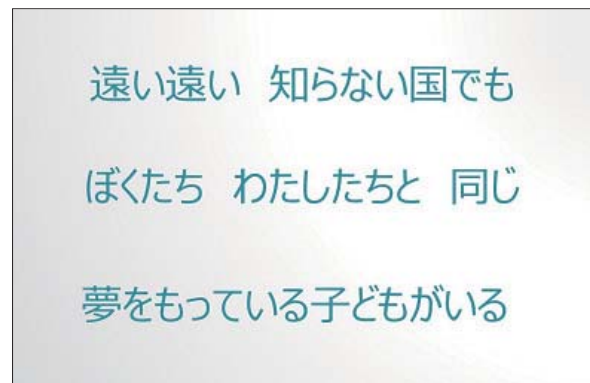
⑮夢があるのは万国共通



⑯希望の木を通じて日本とマラウイは近づいた



①⑦日本でも人気の職業もあるけど・・・



①⑧



①⑨大使からのメッセージ



②⑩青年海外協力隊ってどんな人たちだろう。

単元名「世界の中のわたしたち」

迎 香 純

MUKAE KASUMI

佐世保市立江上小学校（長崎県）

担当教科：全教科

●実践教科：総合的な学習の時間

●時間数：40時間

●対象学年：6年生

●対象人数：43名

実施概要

【1】単元のテーマ・目標

- 世界と日本の関わりについて知り、世界が抱える問題について調べることで、自分たちの生活を見直し、今の自分にできることを考える力を身につける。
- インターネットや本で調べたり、青年海外協力隊員の方の体験を聞いたりする学習を通して、学んだことをもとに資料を作り、発信する力を身につける。

【2】単元の評価規準例

（ア）課題発見力

自ら探究したい国や課題を見つけ、インターネット等で調べることができる。

（イ）思考判断力

アフリカの国や課題を調べる中で、新しい疑問や考えを持つことができる。

（ウ）表現力

調べた内容から必要なものを選択し、相手に分かりやすくまとめ、発信することができる。

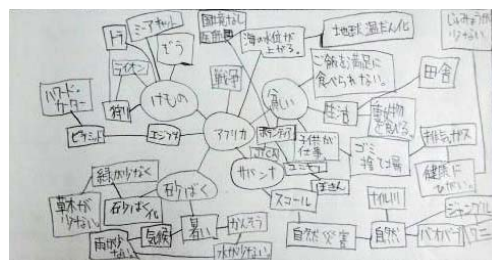
（エ）実践力

相手の考えや文化を受け入れることができる。世界のみんなが共生していく中で、自分の役割を考え、行動に移すことができる。

【3】単元設定の理由（児童観、教材観、指導観）

（1）児童観

7月後半にアフリカに対するイメージをマップ図に書かせた。野生動物や壮大な自然のイメージが強く、ほとんどの児童がそれらに関する単語を書き込んでいた。医療や食糧、インフラに関する事など、アフリカが抱える問題に目を向けた単語も出され、個人によっては関心の高さが見られた。



一方、洋服を着ておらず、狩りをして生活をしているといった、ステレオタイプの単語を書く児童や、アフリカとは全く関係のない単語を書く児童、またアフリカに対するイメージをほとんど

ど書けない児童もいた。アフリカに持つイメージはそれぞれであったが、どの児童もアフリカを「貧しい」国と形容したのは共通していた。

ステレオタイプを取り除くため、体験談や事実を伝える授業を仕組み、10月に国際理解教育に関するアンケートをとった。結果は以下の通りである。

Q1. 世界のことにについて知りたいと思うか。	とても知りたい 63%	やや知りたい 37%
Q2. 自分の考えや行動に変化があったか。	はい 77%	いいえ 23%
Q3. 対話ができているか。	はい 77%	いいえ 23%
Q4. 共有ができているか。	はい 40%	いいえ 60%

Q1では、今まで遠くに感じていたアフリカに対する、関心が高まっていることがわかる。Q2では「ニュースを見るようになった」児童が13人、「新聞を読むようになった」児童が4人、またアフリカを取り扱った番組を見るようになったり、自学でアフリカについて調べ学習したりする児童がいる。Q3では22名中17人が「はい」と答えた。一方Q4で「いいえ」と答えたのが13人であった。ペアや少人数で話をすることはできるが、全体の人に発信する力が欠けている。自分の考えに自信を持ち、自分の言葉で伝えることの大切さに気づき、発信する力を身につけるのが一番の課題である。

(2) 教材観

本単元は、アフリカに焦点を当てた開発途上国と、私たちが住む日本とのつながりを知り、先進国の役割や、世界がよりよくなるために自分たちにできることは何かを考える、国際理解教育である。本校では学校の三つのコンセプトに「国際理解教育」がある。3年生はダービースクールとの交流、4年生は長崎国際大学の留学生との交流、5年生はダービースクールと餅つき体験を行ってきた。6年生では交流の機会が多いアメリカや、近隣諸国のアジアではなく、身近に感じることの少なかったアフリカに目を向ける。世界が直面している様々な問題を知り、未来の世界をよりよくするためには、何が必要なのかを考え、実行できる国際人の育成を目標とした単元である。

(3) 指導観

学習指導要領における、国際理解の取り扱いについては以下の通りである。

(7) 国際理解に関する学習を行う際は、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること。

国際理解を指導するに当たって、「1. 知ること・気づくこと」「2. 考えること」「3. 行動すること」といった学習の流れで取り組んでいく。児童が自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断するなど、児童の主体性や興味・関心を十分に生かす授業展開が望まれる。そのため、ワークショップやグループ活動を取り入れた、体験的活動をそれぞれの授業に仕組んでいく。

それぞれの授業で、自分の思いを伝え、相手の考えを受け入れる「対話」の時間や、互いの意見を聞き合い、自分の考えを深める「共有」の時間を設け、コミュニケーション能力や表現する力を高めていく。

【4】展開計画（全 40 時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 (4時間)	＜オリエンテーション＞ ・世界にはまだ知らない国や知らない文化があること気付き、調べてみたいという意欲を持つ。	・アフリカに対するイメージを、マップ図に描かせる。② ・フォトランゲージで、写真からマラウイについて気づきを出し合う。②	現地で撮った写真
2 (5時間)	＜世界の現状を知る＞ ・教師の話や写真をもとに世界の現状を知り、学習計画を立てる。	・マラウイの写真を見て、感じたことを出し合う。② ・ワークショップ「100人の村」で、世界の現状を知る。②	添付資料④
3 (6時間)	＜アフリカについて調べる＞ ・開発途上国（アフリカ）の中から1カ国選び、インターネットや本などをもとに調べる。 	・ワークショップ「アフリカとのつながり」で、日本とのつながりや先進国・開発途上国があることを知る。① ・開発途上国（アフリカ）を調べる。⑥（インターナショナルデイに掲示）	添付資料①② 添付資料③
4 (6時間)	＜アフリカの課題を知る＞ ・青年海外協力隊の方や教師の話やワークから、世界全体の課題について知る。（持続可能な社会の実現に向けて） 	・JICA デスク長崎の推進員による、ワークショップ（SDGsについて）② ・ワークショップ「身の回りのSDGs」① ・ワークショップ「飢餓をゼロに」① ・ワークショップ「質の高い教育を」① 本時 ・ワークショップ「安全な水」①	添付資料⑦ 参考資料①② 添付資料①③ 添付資料⑥ 参考資料③④
5 (19時間)	＜課題を調べ、発信する＞ ・見つけた課題の中からテーマの一つを選び、途上国（アフリカ）との関わりに気をつけながら調べる。	・よりよい支援・援助とは何か考える。① ・アフリカが抱える課題を調べる。②	

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
	 ＜生活を振り返る＞ ・自分の生活を振り返り、今の自分にできることを考える。 ＜まとめ、発表する＞ ・伝えるための効果的な方法を選び、まとめ、調べたことを発表する。 ＜新たな課題をもつ＞ ・同じ地球人として、自分が取り組んでいきたい、新たな課題をもつ。	・開発途上国が抱える課題をどのように発信するか考える。③ ・発信の方法に合わせて、相手に伝わりやすく工夫してまとめる。⑨ ・授業参観で学習したことを発表する。② ・ふりかえりをする。②	添付資料⑧

【5】本時の展開

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
課題作り 5分	1 SDG s「目標4 質の高い教育」のオリエンテーションをする。 	・事前に配布したカードで、文字が読めない人の存在を気づかせ、識字率について知らせる。	添付資料①
／	2 めあてを確認する。 めあて：学校に行けないことで起こる問題について考えよう。		
見通す 10分	3 「文字が読めないということ」のロールプレイをする。 	・ネパール語で「水」「薬」「毒」と書かれたボトルを用意し、母親が薬を買いに行くというロールプレイをさせる。（父親、母親、子ども2人） ・どれを選ぶか、多数決で決める。 ・選んだとき、どんな気持ちだったか尋ねる。	

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
／ 自力解決・協働解決 20分 ／ 一斉検証 5分 ／ 振り返り 5分	4 「学校に行けない子どもたち」のワークショップをする。   5 本時の学習を振り返る。 	・文字が読めないとどんな不便さがあるか、考えさせる。 ・「学校に行けない」カードを起点とし、どのような問題が起きるか、原因→結果の順に8枚のカードを並べる。（正解の順番があるわけではない） ・自分の子どもはどうなるか問い、どうすれば、この状況から抜け出せるか話し合わせる。 ・わたしたちに何ができるか考えさせる。 ・世界の人が安心して生活できる社会をつくるために、日本が行っている活動や国際機関を紹介する。 ・本時の感想や気づきを交流させる。 ・富の分配を想起させ、自力では解決が困難な状況には、まわりの協力が必要なことを押さえ、次時につなげる。	添付資料③ 現地で撮った写真

【授業実践の様子】

第1次では、アフリカに対するイメージをマップ図に自由に書かせ、授業者の帰国後、マラウイ現地で撮影した写真を用いた「フォトランゲージ」を行った。教師から教えられる知識ではなく、児童自身が写真から情報を読み取ることにより、今まで知らなかった国や文化と主体的に出会うことができた。異文化理解の基本的な考えとして、自分たちの当たり前が、世界では当たり前ではないということを感じることができた。



マラウイへのパスポートとしてバオバブの実の付いたプレスレットをプレゼント。



フォトランゲージのあと、互いの写真を見合う



マラウイのスナックやクッキー、紅茶を味わう。

フォトランゲージの感想から

- ・写真が同じでも、考えていることが違った。知ることができてよかった。
- ・ほかの人と違う考えを持った。こういうことも大切なんだ。

第1次の児童の感想。

第2次では、児童の興味・関心の高かったマラウイの衣食住、学校の様子を写真や動画で紹介した。マラウイと日本の共通点や相違点に気づくことができた。学校に散乱されたゴミの写真や働く子どもたちの写真や、学校に行けずゴミ捨て場から材料を集め、風力発電をしたマラウイの少年を紹介した。「学校に行けない」子どもたちが世界にいることや、教育の必要性を感じることができた。



主食のシマを食べるマラウイの子どもたち。



学校の周辺にある、自然へ戻らないプラスチックのゴミ。

マラウイの学校の様子を見た感想

- ・1クラス100人 教科書4冊しかないのに勉強をがんばっていてすごい。(よさ)
- ・ノートもあまりないのに、どうやって勉強しているのだろう。(疑問)
- ・ノートを破ったりせず、物を大切にしようと思った。(自分の生活を振り返る)

第2次の児童の感想。

第3次では、ワークショップを通し、世界の8割が開発途上国ということを知り、自分たちのこれからや、先進国の役割を考えさせた。アフリカとのつながりをより知るために、アフリカの中から1か国を選び、調べ学習を行った。情報モラルについて取り扱い、情報源が信頼できるものであるか、一方的な見解や主張ではないか、情報収集の仕方を指導した。集めた情報を整理し、11月に行われる児童会行事「インターナショナルデイ」のブースに展示し、全校児童に発信する場を設けた。



ワークショップ「100人村」の様子



ワークショップ「アフリカとのつながり」の様子



地図や資料をもとに、ペアでアフリカの位置やデータを確認し合う。



インターナショナルデーでの子どもたちの発信。



マラウイ紹介コーナーの設置。



JICA デスク長崎によるブース出店。

第4次は、開発途上国の様々な課題に触れた。国連が掲げる「持続可能な開発のためのグローバル目標」(SDGs)について、JICA デスク長崎より講師を招聘し、ワークショップをしていた。さらに SDGs に関するワークショップを行い、世界が抱える問題に気づかせ、主体的に考えさせた。



SDGs ワークショップ① JICA デスク長崎の出前講座。アフリカと日本の SDGs の優先順位をそれぞれ考え、全体で発表する。



SDGs ワークショップ② 前時の振り返りをし、さらに理解を深めるため、身の回りの SDGs についてグループで考え、話し合うワークショップを行う。



ワークショップ①「SDGs 2 飢餓をゼロに」 富の分配で、世界の不平等を実感する。世界の現状であることに大変驚き、課題に迫ることができた。



ワークショップ②「SDGs 4 質の高い教育をみんなに」(本時) 校内研修として、全職員に対して授業を公開した。



ワークショップ③「SDGs 6 安全な水とトイレを世界中に」 ユニセフの動画は現地の様子を知る材料として、効果的であった。

第5次は、SDGsに関わる世界の問題や、自分にできることについて調べ学習を行った。世界の問題を知った子どもたちは、何か行動に移したいという思いを持ったが、思いやりだけでは成り立たないことを知らせるために、よりよい支援・援助とは何か考えさせた。2月の総合的な学習の時間で、保護者に向けて、今まで学習したこと、これからの自分について発信させた。また全学習をふり返り、国際人として、自分が取り組んでいきたい新たな課題を持たせた。



よりよい支援とは何か、話し合う様子。



自分が調べた国が抱える課題を書き出す。



グループでまとめたものを総合発表会で発表。



「文字が読めない」ワークショップを保護者が体験。



12のグループに分かれ、スライドや模造紙を使って、調べたことを発表した。

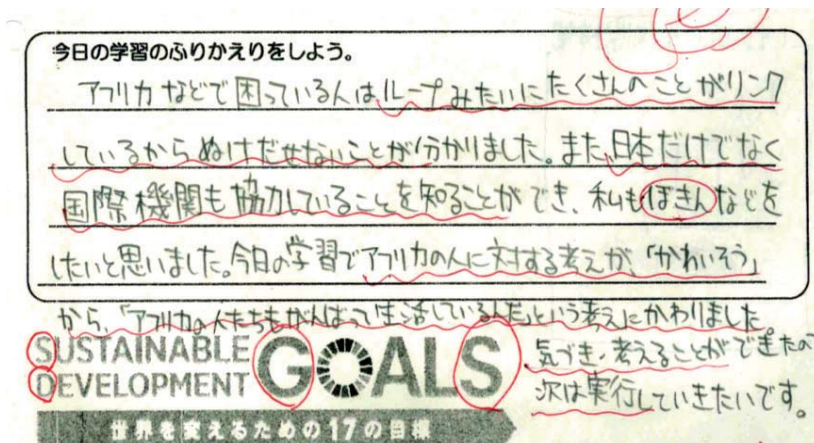


【6】本時の振り返り

本時では、ロールプレイとワークショップを行った。「文字が読めない」ことの不便さや、生きるために教育が必要であることを体感することができた。体験的な学習を取り入れることで、学習課題を自分のものとして捉えることができた。自力で解決することが困難な課題を抱えているアフリカの現状を知り、授業後の感想に「自分に何ができるのだろうか、もやもやとしている。」「無限に続く厳しい試練を、自力で乗り越えるのは難しそうなので、それを止めるためにはぼくたちの力が必要だ。」といったそれぞれの思いが書かれていた。また、多くの児童が、「小さいことでも、それで命が助かる人がいるなら、自分にできることを一生懸命がんばろうと思った。」「ボランティア活動や募金活動など世界のことをもっと知ろうと思った。」といった、国際理解教育の3つ目の目標「行動すること」に向けた意識が高まり、第5次へとつなげることができた。

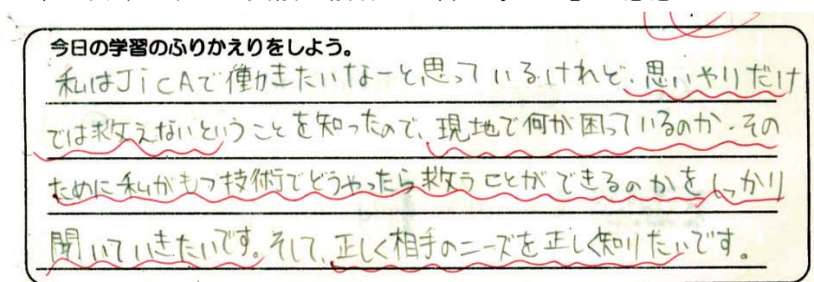
【7】単元を通した児童生徒の反応／変化

第4次・ワークショップ「質の高い教育を」の感想



授業を重ねるごとに、アフリカに対する関心が高まった。日本と比べるのではなく、アフリカに暮らす人の立場で考えが持てるようになった。

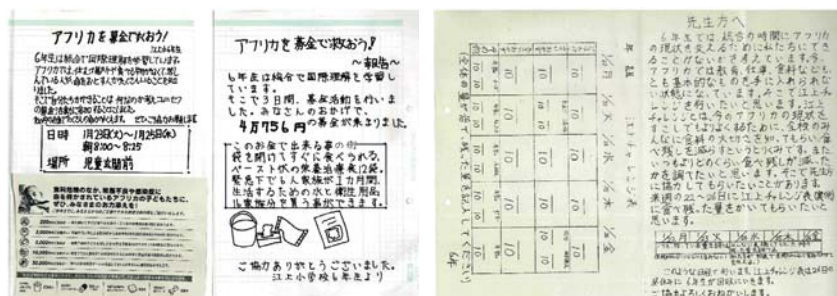
第5次「よりよい支援・援助とは何か考える」の感想



総合的な学習を通して、日本語教師になりたいという夢を持った。夢を実現するために何をすればよいか、自主学習で調べる姿も見られた。

単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲について

- ・ アフリカについて、ニュースやテレビ番組を見たり、新聞を読んだりする児童が増えた。
- ・ それらの情報を、友達や担任に伝え、教室の中にアフリカの話題が多くなった。
- ・ 開発途上国や、国際機関や JICA といった支援団体について、調べ学習をする児童が増えた。
- ・ 日本語教師としてボランティアに参加することや、世界で活躍する医者になりたいといった、明確な夢を持つ児童が数名いた。



第5次で子どもたちが実施した、ユニセフ募金活動と残飯ゼロを目指した江上チャレンジの呼びかけ。

途上国・異文化への意識の変容について

■授業前

- ・ どの児童もアフリカを「貧しい」国と表現した。
- ・ ほとんどの児童が野生動物や壮大な自然のイメージを強く持っていた。
- ・ アフリカに対するイメージをほとんど持っていない児童、洋服を着ておらず、狩りをして生活をしているといったステレオタイプを持つ児童、医療や食糧、インフラに関することなど、アフリカが抱える問題について話す児童など、知識や関心の差が見られた。

■授業後

- ・ アフリカが遠い国ではなく、日本とつながりのある国だと知り、関係の大切さに気づいた。
- ・ 「かわいそう」な「貧しい国」ではなく、苦しい状況の中でたくましく生きていることを知った。
- ・ 開発途上国の存在を知り、世界の現状に関心を持つようになった。
- ・ 開発途上国に「なにかしてあげる」ではなく、自分たちにできることはないか、自分の生活で見直すところはないか考えるようになった。

自己評価

■苦労した点

校内研修の教科横断的なカリキュラム開発とからめ、総合的な学習の時間の約 40 時間のカリキュラム作成を行った。教師海外研修で得た多くの情報から、何を子どもたちへ伝え、何を考えてほしいか、内容を厳選しつつ、子どもたちの反応や様子を見ながら、授業展開を組み直すこともあった。体験的な学習を大事にしたかったため、ワークショップを調べるためにネットで検索したり、

本を購入したりした。現地で得た知識や経験だけでなく、授業に効果的に生かすためのデータや資料を集め、パワーポイント作成など工夫が必要だった。ゼロから作る生きた教材だったため、常に教材研究を重ねた。

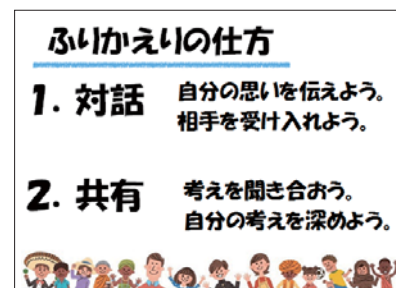
■改善点

今回はマラウイを訪問したので、アフリカに焦点を置いた開発途上国について、授業展開を行った。授業していく上で、日本が属するアジアに、多くの開発途上国があることを知った。SDGsの学習で伝えたように、先進国の役割をもう一度考え直すためにも、近隣国であるアジアに目を向けた授業も作っていくのも良いと感じた。今回のカリキュラムを土台に、地理的にも近いアジアに目を向けたカリキュラムも作っていきたい。

■成果が出た点

世界の課題や開発途上国をテーマにした授業は、自国だけでなく、他国に目を向ける大変よい機会であったと感じる。対象児童が6年生ということもあり、世界で活躍したいという夢をもつ児童が数名でてきたのは嬉しかった。

また、総合的な学習の時間では「対話」と「共有」の時間を設けるように仕組んだ。自分の意見に自信がもてなかった児童も、互いの意見を認め合う場づくりができたために、相手に伝える力をもつこともできるようになった。



■備考

今まで遠い存在だったアフリカを身近に感じることができる单元となった。開発途上国が抱える課題を知り、世界の現状を目の当たりにすることで、自分にできることはないかと、課題意識を持って取り組むことができたのは、なによりも成果である。保護者に伝えるという相手意識と目的意識を持ち、一人一人が工夫して発信することができた。発表を見た保護者から質問が出た際に、しっかりと答えられる姿から、ただの知識ではなく、自分自身の課題であり、世界が解決すべき課題として捉えられている様子が見えた。

担任がアフリカの地を訪れ、現場の話を聞くというのは、子どもにとって、刺激的な経験となった。世界への視野が広がり、海外でボランティアとして活躍したいと夢をもった児童が出たのも嬉しかった。子どもに夢や希望を与えられる授業ができたと感じている。世界に羽ばたく子どもの育成に、少しでも近づけたのではないかと感じることもできた。この機会を与えてもらったことに、大変感謝している。今回の実践を土台に、さらに国際理解教育に励んでいきたい。

添付資料・参考資料

■添付資料：

- ① 『ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら』 開発教育協会、2016 年
- ② 『どうなってるの？世界と日本』 国際協力機構

- ③ 『国際理解教育実践資料集』 国際協力機構、2014 年
- ④ 『風をつかまえた少年』 さ・え・ら書房、2012 年
- ⑤ 『学校に行きたい』 国際協力機構、2015 年
- ⑥ 『水から広がる学びアクティビティ 20』 開発教育会、2014 年
- ⑦ 『SDGs2030 年までのゴール』 日能研、2017 年
- ⑧ 『私たちが目指す世界』 国際協力機構、2015 年

■参考資料：

- ① Youtube 動画 『SDGs GOAL2 飢餓をゼロに』 jicahiroba
- ② Youtube 動画 『南スーダン：栄養不良に苦しむ子どもたち』 日本ユニセフ協会
- ③ Youtube 動画 『世界水週間：水を得るためにどれくらい歩けますか』 日本ユニセフ協会
- ④ Youtube 動画 『13 歳のアイシャの 1 日～水を得るために～』 日本ユニセフ協会

<授業で使ったスライド資料抜粋>

第 1 次「フォトランゲージで、写真からマラウイについて気づきを出し合う。」スライド抜粋

 Where Is Malawi?	ワークショップ① 「フォトランゲージ」をやってみよう！	フォトランゲージとは 写真を見て、気づいたこと、疑問に思ったことなど自由に書き出す。	フォトランゲージのルール 1. 質より量！ 2. 相手を否定しない。
		ふいかえりの仕方 1. 対話 自分の思いを伝えよう。相手の受け入れよう。 2. 共有 考えを聞き合おう。自分の考えを深めよう。	ふいかえりをしよう 1. グループで対話タイム 自分の思いを伝えよう。相手の受け入れよう。 2. 全体で共有タイム 考えを聞き合おう。自分の考えを深めよう。

第 2 次「マラウイの写真を見て、感じたことを出し合う。」スライド抜粋。

フォトランゲージの感想から 違いがあること ↓ 実はそれが当たり前 ↓ 対話を通して知り、受け入れる			
	マラウイの自然 Let's try ! ・バオバフオイル (保湿) ・バオバフパウダー (ビタミン)	ある村の様子 	

第3次「ワークショップ100人の村で世界の現状を知る。」スライド抜粋。

もし、世界が100人の村だったら

ワークショップとは？

頭だけでなく、体を動かしたり、体験したりしながら、自分の考えを深める。

色んな人と意見を交換することで、違いを楽しんだり、新たな考え方に気づく。

ワークショップのルール

- 自分の思いや考えを大切に！
- 相手の思いや考えを大切に！
- 全員が参加・発言しよう！
- バスOK！

この表からわかることは何だろう？

	子ども 0～14歳	大人 15歳～64歳	お年寄り 65歳以上
世界	28人	65人	7人
日本	13人	62人	25人
アフリカ	50人	47人	3人

もう一度考えよう！

アジアやアフリカで人口が増え続けるのはなぜだろう？

キーワードは

開発途上国

開発途上国の分布

開発途上国を知ろう

アフリカに目を向けて調べてみよう

第3次「アフリカとのつながり」スライド抜粋。

6年総合「世界の中のわたしたち」

アフリカとのつながりを考えよう

第4次「ワークショップ身の回りのSDGs」スライド抜粋。

持続可能な社会を築くための17の切り口

2017-SDG Index and Dashboard Report-regions

身の回りのこととSDGsについて考えてみよう！

A. お腹が減っているのに、今日も明日も食べるものがありません。

B. 国民の意見を無視した政治が行われている。

G. 仕事、育児、勉強で悩んでいるけれども、相談できる人がいません。

I. わたしは女性なので、政治について意見が言えません。

第4次「ワークショップ飢餓をゼロに」スライド抜粋。

江上小が選ぶ優先順位

第1位 安全な水とトイレを世界中に

第2位 飢餓をゼロに

第3位 質の高い教育をみんなに

貧困とは

教育、仕事、食料、保健医療、飲料水、住居、エネルギーなどもっとも基本的なものを手に入れない状態。自分の意見が言えない状況。

(国連開発計画UNDP)

ワークショップ

世界の富の分配について知ろう

①役割カードをもらおう。

②同じマークの人を見つけ、グループになる。

サハラ砂漠以南のアフリカ地域は非常に深刻な状態

5歳以下の子ども 毎年1000万人死亡

60%が栄養不足・飢餓

安全でない水が原因

5歳以下の子ども 毎年1000万人死亡

世界 1日に約2200人

日本 1日に約 8人

第4次「ワークショップ質の高い教育を」スライド抜粋。

カードに書いている下の言葉の指示に従ってください बसुहोस 「バスヌホス」は「座ってください」という意味です。  	識字とは 日常生活で用いられる簡単に短い文章を理解して読み書きできること  	識字率 先進国 100% 開発途上国 30%以下  	ワークショップ 「文字が読めないということ」 前に集まっている人たちは家族です。子どもの一人が病気になるました。親は薬を買いに行きます。水、薬、毒の中から、薬を選んでください。  
学校に行けないと どのような問題が 起きるだろうか？  	ワークショップ 「学校に行けない子どもたち」 「学校に行けない」カードを起点に8枚のカードを並び替える。この連鎖から抜け出す方法をグループで話し合う。  		

水はどこにある？  	地球全体の水 100% 淡水 2.5% 海水 97.5% 氷 1.75% 地下水・河川・湖 0.75% 人が利用可能な水 0.01% 人が利用不可能な水 0.74%  	タムリさんの一日 エチオピアに住む13歳の女の子 (グループで話し合うこと) ・タムリさんは何をしているか。 ・水に関してどのような問題を抱えているか。  	 ③ 朝7時半
安全な水へのアクセス 先進国 100% 開発途上国 10% アフリカ地域 3億4500万人(44%) が利用不可  	汚染された水・不衛生な水 →コレラ・赤痢などの病気 5歳未満の子どもが毎日2000人 下痢で死亡  	女性や子どもへの影響 社会に進出ができない 学校へ通うことができない 日が暮れるのを待って用を足す  	1日1人あたり50L以下 →世界で62カ国 最低ライン20L以下 →世界で33カ国 うち23カ国がアフリカ  

第5次「よりよい支援・援助とは何か」スライド抜粋。

援助と支援のちがい 援助とは 困難な状況を物や金で助ける 支援とは 間接的・直接的な行動で助ける  	マラウイ カムズ中央病院  	マラウイ カムズ中央病院  	支援する際に 心がけるべきことは 何だろう  
--	--	---	---

第5次「アフリカが抱える課題を調べる」スライド抜粋。

グループ編成 SDGsのカテゴリーで分けたグループ (3~5人) 	発表スタイル グループによるポスターセッション 前半と後半に分かれ、2回発表をする。(7分以内) 	発表内容 ①SDGsを選んだ理由 ②アフリカの現状 ③支援団体の活動 ④自分にできること ⑤まとめ (間接的・直接的) 	自分にできること <間接的> ・ニーズに合った募金や寄付 <直接的> ・自分の生活の見直し ・世界が抱える課題を知り、伝えること。 
--	---	---	---

Grove English Communication II

Lesson 8 Paper Buildings

石川 透

ISHIKAWA TORU

県立宮崎南高等学校（宮崎県）

担当教科：英語科

●実践教科：コミュニケーション英語Ⅱ

●時間数：8時間

●対象学年：2学年

●対象人数：42名

実施概要

【1】単元のテーマ・目標

日本を代表する建築家である坂茂氏についての英文を通じて、現代の世界規模での課題を知り、その課題に対し、現代社会を生きる一人の人間として、何ができるのか課題解決の方策を協同的に考え、自らの考えを英語で発信していく力を養う

【2】単元の評価規準例

（ア）関心・意欲・態度

- ① 間違いを恐れず、積極的に言語活動を行おうとしている。
- ② さまざまな工夫をすることでコミュニケーションを続けようとしている。

（イ）思考・判断・表現

- ① 情報や考えなどを正確に話したり書いたりすることができる。
- ② 言語材料を使って、文章を書くことができる。

（ウ）技 能

- ① 英文を読んで内容や場면을正確に読み取り、理解することができる。
- ② 英文を聞いて、内容を聞き取り、理解することができる。

（エ）知識・理解

- ① 言語に対する知識：言語材料を正しく理解し、運用することができる。
- ② 文化に対する知識：課で扱ったトピックや問題などについて理解することができる。

【3】単元設定の理由（児童／生徒観、教材観、指導観）

全日制普通科の2年生理系クラスであり、生徒間に学力差は存在するが、学習全般に対する意欲は高い。ほとんどの生徒が4年制国公立大学の進学を希望している。日頃から多くの教科で協働的な学習を行っており、グループ学習なども展開しやすい。ただ授業内容が受験に直結するかどうかを重要視する生徒もいるので、そういった生徒をうまく巻き込んでいく工夫が必要になる場面もある。そのためにもアクティブラーニングの技法を活用した授業計画を行いたい。

本課の題材はルワンダ難民キャンプや、阪神淡路大震災後の神戸で紙の管を使った建築物での様々な援助を行った建築家、坂茂氏の話である。このトピックを通じて援助のあり方や現代社会

が直面している課題に、我々一人一人がどのように取り組むべきなのか、国際社会の一員として何ができるのかを生徒自らが考えるきっかけとしたい。またその上で自分たちが2030年問題に取り組まなければならない当事者であるということについて、生徒たちに自覚を促したい。

【4】展開計画（全8時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	導入 Lesson 8 Part 1	Oral Introduction 新出語確認 本文音読 内要理解（Q&A、Summary） 文法事項確認	教科書 授業プリント スライド
2	Lesson 8 Part 2	Oral Introduction 新出語確認 本文音読 内要理解（Q&A、Summary） 文法事項確認	教科書 授業プリント スライド
3	Lesson 8 Part 3	Oral Introduction 新出語確認 本文音読 内要理解（Q&A、Summary） 文法事項確認	教科書 授業プリント スライド
4	Lesson 8 Part 4	Oral Introduction 新出語確認 本文音読 内要理解（Q&A、Summary） 文法事項確認	教科書 授業プリント スライド
5 本時	SDGs（1）	未来年表 SDGsとは	スライド 授業プリント
6 本時	SDGs（2）	世界での取り組みを知る シナリオプランニング 解決策を考える	スライド 授業プリント A3用紙 付箋紙
7	SDGs（3）	グループ協議 発表準備	模造紙 ペン 授業プリント
8	SDGs（4） まとめ	発表準備 発表 まとめ 課末問題	教科書 模造紙 ペン 授業プリント

【5】 本時の展開

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (10分)	挨拶・出席確認 将来われわれが直面する諸問題について知る ・ 未来年表のプリントを見てこれから、起こると予測される出来事について、英語でやりとりをする	身なりを整え、姿勢を正して挨拶させる 生徒の健康状態を確認する 生徒が自由に発言しやすい、雰囲気作りをする 英語でやりとりするよう指示する、また英語でのやりとりをスライドで示しておく 生徒たちが30歳である2030年に意識を向けさせる	スライド プリント（未来年表） 【資料1】
展開 (70分)	SDGsについて知る① ・ SDGsのロゴ（英語版）を見て、ロゴ全体が何を目的としたものか、また17の各アイコンが何を示すのか、考える ・ ペアで意見をシェアし発表する ・ 日本語版のロゴを見て確認する ・ ピコ太郎の動画を見る SDGsについて知る② ・ グループに分かれ、世界の若者たちのSDGs達成に向けた取り組みについての英文を読む。 ・ 各グループを2班に分け、片方は他グループへ英文の内容を説明し、もう片方は他グループのところへ行き、そのグループが読んだ英文の内容を聞く ・ 各班で、持ち帰った情報をシェアする。 ・ 動画を見て、各英文の内容を確認する。 予測される未来について考える ・ 読んだ英文に基づき、今後どのような未来が待ち受けているのか、グループで協	生徒が自由に発言しやすい、雰囲気作りをする 英語でやりとりするよう指示する、また英語でのやりとりをスライドで示しておく テキストを読む際、時間を設定し、限られた時間で必要な情報を読み取る点を意識させる どのような情報を読み取り、何を説明し、あるいは質問すべきなのかをスライドで示す 英語でやりとりするよう指示する シナリオプランニングをするにあたって説明を具体的に行う グループでの協議が滞らないよう、机間巡視を行い、適宜支援する	スライド プリント（SDGsロゴ（英／日））【資料2】 スライド プリント（英文6種） 【資料3】 A3用紙 付箋紙

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
まとめ (20分)	議する。 ・グループ協議の結果を発表する	他グループの発表を聞く態度について注意喚起する	スライド プリント（作文） 【資料4】
	解決策を考える ・イノベーションについて知る ・マラウイにおいての事例を紹介する	作文が次の時間のグループ協議に必要なことを知らせる 滞る生徒がいれば適宜指導する	
	・各グループで協議した未来の課題について、各自で考え、英作文する		
	本時の振り返り 次時の連絡・挨拶	自由に意見を記述させる 次時の大まかな学習の流れを伝え、宿題や次回への意欲につなげる	プリント（振り返り用紙）【資料5】

【授業実践の様子】



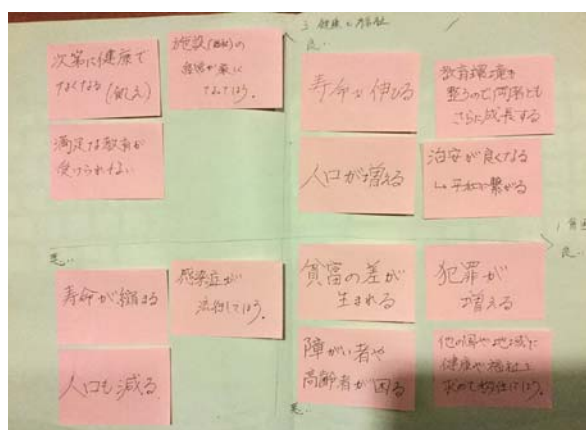
グループ別に【資料3】の資料を読む



他のグループの【資料3】の内容を聞きに行く、または伝達する



シナリオプランニング時に各グループで話し合った内容をクラス内で共有する



生徒たちのシナリオプランニングの例

【6】 本時の振り返り

生徒たちは「未来年表」の活動では漠然と将来に希望を見出したり、あるいは不安を覚えたりする感想が多かった。未来年表で見た各種指標に基づく未来の予想が、SDGsを扱う授業中盤以降では彼らの中で結びついていった。SDGsに関しては知らなかったという生徒がほとんどであったが、強い興味関心を抱いた生徒がほとんどであった。英文を使ったジグソー法のパートでは内容を把握し、相手にうまく伝えなければならないが、そこが互いにうまくできていなく、モヤモヤが残り、かえってそれが知りたいという気持ちや、グループで一緒に考えたいという気持ちにつながっている感想となってアンケートに現れたのではないかと考える。また英文の内容もSDGsの各種課題に取り組む若者たちの英文であり、刺激を受けている感想が多かった。シナリオプランニングの活動ではともに意見を出し合い、考えるプロセスそのものを、また、自分とは違う意見を聞くことでさらに自分の思考が深まるプロセスを、一部では難しさを感じながらも楽しんでいる感想が多かった。私が授業計画した時点で考えていた以上に生徒たちは今日的課題を考えてくれた。

【7】 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

単元前半の教科書本文では坂茂さんが、紙の管を材料としてルワンダ内戦での難民のシェルターや阪神淡路大震災での紙の教会を造り、現状に即した援助・支援の在り方について学び、単元後半のSDGsの部分では世界が直面する課題に自分たちが当事者としてどのように関わっていくかを考えた。教科書で同じ日本人の先輩として坂さんが日本のみならず、世界で困っている人の課題を解決している姿を知ったことで、生徒たちもより真剣に、現在のそして未来につながる諸問題について真剣に考えることができたのだと考える。

単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

目に見えた大きな変容はないかもしれない。ただ、今回の授業を通じて、自ら未来を切り開いていく力を少しだけでもつけることができたと思う。そういった力は本来子供たち一人一人が生まれ持ったものではあると思うが、普段の授業ではなかなかそういった部分まで踏み込めないこともある。生徒たちが自らの、そして世界の未来を考えるきっかけになっていくことを願う。

また協働的な学習、4技能を総合的に使っていく授業形態であったため、生徒たちもいつも以上に意欲的に取り組んでいた。注意深く授業をデザインしながら、このような形態で授業を行う機会を増やしていきたい。

途上国・異文化への意識の変容について

■授業前

授業前に事前のアンケートを取っていなかったのですがどの程度の意識、理解であったかはわからない部分もあるが、今までの学習の中で環境問題、ジェンダーの問題、貧困、さまざまなトピックを取り扱ってきた。知識としては持ち合わせていてもSDGsについて知らなかった生徒がほとんどであったことからわかるように、諸問題が彼らの中で連関しておらず、自らが当事者である

意識は希薄であったと考えられる。

■授 業 後

SDGs について知らない生徒がほとんどであった中で、授業後のアンケートで多くの生徒から SDGs についてもっと知りたいという言葉が多く出た。また同世代の若者たちの取り組みについて英文を読む中で、一人一人の具体的な行動が世の中を動かしていることを知り、当事者としてこれらの目標に取り組んでいかなければならないという意識を持つに至った生徒も多くいた。

自己評価

■苦勞した点

ジグソー法、シナリオプランニング、ポスターセッションといった、いわゆるアクティブラーニングの技法を授業に取り入れ、またそれを教科書の単元に合わせていくことが慣れないことなので難しかった。SDGs についての生徒のレベルに合った教材を見つけることにも少し時間がかかった。何より普段授業でパワーポイントのスライドショーを使うことがないので、その準備が一番骨が折れた。

■改 善 点

グループ活動になった際、どうしても目の行き届かない部分があり、英語ではなく日本語のやり取りになってしまったところがある。英語を聞き、話し、書き、読む、4 技能総合型の授業を目指したが、もう少し注意を払った授業デザインでグループ内での発表、スピーチと言った場面だけでなく、グループ内協議でも英語使用場面を増やす必要がある。

また、クラスの席順にグループを分けたが、どうしても話し合いがうまくいかないグループも出てきた。話し合う場の設定の仕方にも工夫が必要だと思った。

■成果が出た点

そもそも、SDGs について知らない生徒がほとんどであり、授業を通じて知識、理解を深め、2030 年の達成目標について、生徒自らが国際社会の一員として当事者意識を持つことができた。

また、問題解決にあたって、「invent」「innovate」「campaign」の 3 つの具体的な行動を考えることで、答えのない課題に自ら考え解決策を考える力、そして英語を用いて自分の言葉で自らの考えを伝える力をつけることができた。

■備 考

昨年から現任校に赴任して、生徒ともに、自らが当事者として周りの人と協力して、答えのない課題に挑戦してく力、幸せに生き抜いていく力をつけていく授業はどのような形があるのか、考えながら、なかなか思うような形にできないまま 2 年が過ぎようとしている。まだまだブラッシュアップしていかなければならない点は多く残っているが、道筋は見えてきたように思える。

マラウイでの視察で得た知見を、上手に授業へ落とし込むことはまだできていないが、今回の授業実践の根底には彼の地で出会った人々、生活、風土があることは間違いない。

これからも、将来にわたって目の前の生徒一人一人が幸せに生き抜いていく力とはなんなのか常に考えながら日々の教育活動に当たっていきたい。

添付資料・参考資料

■ 添付資料

【資料 1】 未来年表プリント

2018/1/25
未来年表：現在17歳のあなたの未来年表 | 生活経済

未来年表

FUTURE TIMELINE

TOTAL FUTURE : 20966

TIME : 2018.01.25 17:23:50 > 2118

未来年表 TOP	フューワード動画	西暦検索	分野検索	索引検索	あなたの未来年表
----------	----------	------	------	------	-----------------

あなたの未来年表

年齢: 17歳

▼ 時

あなたの未来を見る

現在17歳のあなたの未来年表

🔍 違う年代を見る

西暦	年表	分野	絞り込み: 分野	限定なし	+
18歳	2018	交通	長崎県の在世年報が、大型クルマ規制を年間110~120台減らす		
19歳	2019	社会	戦争の記憶を伝える国庫博物館（JCOM）の料金が広島市で間接される（9月）		
20歳	2020	経済	インドの女性専用列車が、両側に770店舗以上を展開する（海外支店も検討。女性の消費増進、起業支援目的）		
21歳	2021	経済	神戸三宮駅の接続地に高さ120メートルの複合ビルがオープンする		
22歳	2022	社会	大阪市が北、中央、西区の3高校を統合し、2校の跡地を教育不安の小中学校に定める		
23歳	2023	社会	中国の習近平・李克強体制が、この年で終り（2021年）		
24歳	2024	資源	英国中部のセラフィールドで、この年から原発3基（中圧炉「AP1000」）が順次稼働する		
25歳	2025	医療	サルコペニアのメカニズム解明によりロコモティブ・シンドROMEの予防法が実用化する（2022~25年）		
26歳	2026	社会	財政再建に取り組むイタリア政府が、この年まで年金支給開始年齢を67歳に引き上げる		
27歳	2027	交通	リニア中央新幹線の名古屋〜大垣間で、国費で開業する		
28歳	2028	資源	福井県敦賀市の新型快融炉原型「おひけ」の解体で、この年までに原子炉外側建屋の解体撤去が完了する		
29歳	2029	環境	海面から海底までの水素、塩分、酸素などを30分に1回程度で自動計測する技術が実用化する（2025~29年）		
30歳	2030	人口	総合計画「長期ビジョン」に取り組み調整後、成人の過半数以上の運動参加率は65%を高める（2014年は約47.5%）		
31歳	2031	人口	人口100万人を超える都市が、この年まで毎月1都市のペースで増える（今後20年間）		
32歳	2032	交通	格安航空会社（LCC）が多く使用する990×230人乗りの車、小型機が民間旅客機全体の71%を占める（20年で2万4670機が製造される）		
33歳	2033	旅行	伊勢神宮が式年遷宮の年を迎える（三度目）		
34歳	2034	環境	オーストラリア北東部のサンゴ礁地帯、グレート・バリアー・リーフが消失する（極端な海水面上昇）		

<https://seikatsusoken.jp/futuretimeline/jyoushp.php?page=17>

2018/1/25

未来年表・現在17歳のあなた達の未来年表 | 生活総研

未来年表の生活総研

未来年表の生活総研

との比較。改定モンテシオール調査書)

37歳

2037

資源

中国で**風力発電**の発電設備容量が原子力発電よりも大きくなる

38歳

2038

経済

ミャンマーの**所得水準**がタイ並みになる (25年後)

39歳

2039

交通

自動車が一般で**自動走行**ができるようになる

40歳

2040

人口

福井県の**15-64歳人口** (生産年齢人口) が32万7000人に減少する (2015年が15万5000人)

41歳

2041

医療

個人の**記憶をコンピュータ**に移して医療、経理する技術が実用化する

42歳

2042

経済

世界の**経済規模**が倍増する

43歳

2043

社会

山形県の**金銀価格**が完了する (総事業費約140億円)

44歳

2044

社会

首都圏下地域の**産業集中**の可能性が高い**南海トラフ**沿いで、この年までに70%の確率で**748 (7-7.3)** の地震が発生する

45歳

2045

社会

核実験で100万人以上に被害を被る**ウカザフスタン**と日本の呼びかけで、国連総会100年のこの年までに**核兵器廃絶**が実現する

46歳

2046

社会

この年までに**水道料金**が全国平均で63.4%高くなる (2014-46年度。需要の増減、老朽化などがある)

47歳

2047

人口

世界の高齢者 (60歳以上) 人口が、この年までに15歳以下人口を上まわる

48歳

2048

経済

この年、魚が絶滅する (汚染と乱獲が原因)

49歳

2049

環境

中国産地帯のオンボロ船が70年代の水害に回収する

50歳

2050

経済

東南アジア諸国連合 (ASEAN) と日本、中国、韓国による新たな**経済共同体**が実現する

51歳

2051

人口

中国の**高齢者** (60歳以上) の数がピークを迎え、およそ8億3700万人に達する

52歳

2052

社会

ロウクラフの「**成長の限界**」が求めた「世界の発展」が失敗し、**海抜1m未満**の国をのいて暮らす時代になる

53歳

2053

社会

このころまでに80%程度の確率で、**南海トラフ**でマグニチュード8-9の地震が発生する (40年以内)

54歳

2054

経済

北沢1号の海水浴 (水深4メートル) に**最高級のシャンパン・ニュー**を貯蔵する実験 (2014-54年) の試験がでる

55歳

2055

社会

厚生年金の積立金が枯渇する (国民年金は2060年に枯渇)

56歳

2056

社会

日本で**弁護士**の数が12万37500人に達し、**裁判官**に肩をならべる (2006年が5800人)

57歳

2057

人口

日本の**出生数**が50万人を割り込み (2016年に98万1000人から100万人割れ)

58歳

2058

医療

ニュージーランドから**喫煙者**がいなくなる

59歳

2059

社会

北海道上市川町管内町にある36人の楽道「**毎月聖**」の開拓80周年 (2009年) を記念したタイムカプセルが開封される (50年後)

60歳

2060

人口

地方創生に取り組む**外国の人口**が、96万人の規模を維持する (2010年比で19%減。国の推計は76万人で36%減)

61歳

2061

社会

米国の次世代式人工衛星**軌道機群-35**の開発・運用にかかる総費用が、この年までに50兆円に達し1兆3850億ドルに達する

https://seikaitsucken.jp/futuretimeline/jours.php?age=17

2/5

2018/1/25		未来年表：現在17歳のあなたの未来年表 生活総研	
資料集・あなたの生活総研		未来年表 生活総研	
64歳	2064	交通	自動車の小型化が進み、弱者を支援する役割が増す（1人1台）
65歳	2065	人口	韓国の生産年齢人口を100とした場合の高齢者人口割合（ 老年総人口指数 ）が、75.5人でピークに達する（合計特殊出生率が2045年に2.1まで回復した場合）
66歳	2066	交通	こまめな橋の補修や増強で、北海道が橋の架け替え費用を3500億円から1500億円に削減する
67歳	2067	交通	経費再建に取り組む 京都市の地下鉄 が、最大4759億円の累積欠損を解消する
68歳	2068	医療	東京都世田谷区の 国府台 （財務省公務員寮会館跡地）が、この年まで介護施設に貸与される
69歳	2069	交通	福岡市地下鉄 七隈線 （天神南～橋本）が累積赤字を解消する（当初計画は2026年度）
70歳	2070	環境	地球の気温上昇が1.9度にとどまり、 大谷の収量 がブラジルで最大各50%減少する
71歳	2071	政治	トルコが マラズギルトの戦い から1000年を迎える（東ローマ帝国を打ち負かした戦い）
72歳	2072	人口	生産年齢人口に対する高齢人口の比率が85.7%に達し、 現役1.17人で高齢者1人 分を負担する時代になる
73歳	2073	環境	この年以降、最大風速66.9メートル以上の スーパー台風 が4倍発生する（2073-83年）
74歳	2074	政治	長崎県で 日食 が観測される
75歳	2075	環境	この年以降、 台風の数 が約23%減少する（2075-2104年）
76歳	2076	環境	沖縄県の真夏日 が年間150日（約4割）を占める（2076-95年）
77歳	2077	社会	日本の生産年齢人口に対する65歳以上人口の割合（ 従属人口比率 ）がこの年まで上昇を続け、最高53%の消費税率が必要になる
78歳	2078	環境	日本 近海の水温 が1-4度上昇する
79歳	2079	資源	英国の パークレー原発 （旧田カス炉）が廃炉を完了する（費用は1020億円）
80歳	2080	環境	米国ニューヨーク市のマンハッタンで、 熱中症 の死に者が90%増加する
81歳	2081	環境	和歌山の桜 （ソメイヨシノ）が開花しなくなる（100年後の平均気温が4-7度上昇するペースで地球温暖化が進む場合）
82歳	2082	環境	地球温暖化の影響により、早ければこのころ、東北地方の内陸部と山岳にて 桜 （ソメイヨシノ）の開花日が20-24日早まる（2082-2100年）
83歳	2083	資源	英国ウェールズの トラフスフィニス原発 （1965年から26年間運転）が廃炉を完了する（閉鎖期、総費用約98億ポンド＝約1340億円）
84歳	2084	経済	このころ日本の公的債務が国内総生産（GDP）比60%の 健全な水準 を回復する（主要国、地域のなかで最長期間が必要）
85歳	2085	社会	米国で メディケア （高齢者医療保険）制度の総支出額が、国内総生産（GDP）の6.2%に達する（現状は3.6%）
87歳	2087	環境	部峠の桜 （ソメイヨシノ）が開花しなくなる（100年後の平均気温が4-7度上昇するペースで地球温暖化が進む場合）
88歳	2088	環境	風速70メートル級の スーパー台風 が、この年までの4年間で12回発生する（現状の4倍）

<https://seikatsukan.jp/futuretimeline/yours.php?age=17>

3/5

2018/1/25		未来年表：現在17歳のあなたの未来年表 生活総研	
資料集・あなたの生活総研		未来年表 生活総研	
92歳	2092	政治	この年の春の日の日が3月19日になる
94歳	2094	政治	しし産産群 の大出現が観測される
95歳	2095	社会	男女の経済格差 が、世界中で解消される（81年後）
98歳	2098	宇宙	大きさ約50メートルの小惑星「 2010T3 」が地球に衝突する（地上の被害は数百キロ四方）
99歳	2099	環境	1級河川で 洪水 が起こる確率が1.8-4.4倍になる（1979-2003年と2075-99年の各平均を比較）
100歳	2100	環境	地球温暖化の影響により、デング熱を媒介する ヒトシジミカ の生息地域が北海道の札幌近郊まで北上する
101歳	2101	社会	欧州連合（EU）の 難民 （16万人）受け入れが、この年までかかる（目標は2016-17年）
105歳	2105	人口	約1億2500万人で減少に転じた（2011年） 日本の人口 が、この年約4500万人になる
107歳	2107	環境	愛媛の桜 （ソメイヨシノ）が開花しなくなる（100年後の平均気温が4-7度上昇するペースで地球温暖化が進む場合）
108歳	2108	社会	沖縄産の黒木（くるち）で製作した琉球の伝統楽器「 三線 」が復活する（黒木＝リュウキウコクタン）
109歳	2109	政治	うる月がもたらす3度目の名月「 ミラクルムーン 」が訪れる（前回は2014年）
110歳	2110	人口	「人口ビジョン」に取り組む 長崎県の人口 が、81万-94万人の水準を維持する（2014年は139万人。ピークは1960年の176万人）
111歳	2111	資源	チエルノブイリ 原発の解体が、このころ終わる（原発事故は旧ソ連時代の1986年。管理当時は2011年に「100年かかる」と予測）
112歳	2112	政治	人気マンガのネコ型ロボット「 ドラスもん 」が生まれる（9月3日）
114歳	2114	環境	このころ 干花粉症 がなくなる（100年後）
115歳	2115	政治	サウジアラビアが 女性参政権 獲得100年を迎える
116歳	2116	社会	スリランカの主要都市 コロンボの悲劇 の6割と周辺土地6000ヘクタールが、このころまで中国に買収される（租借期間は99年間）
117歳	2117	政治	国内で 会聖の太陽宮道通 が観測される（12月11日）
118歳	2118	医療	フランスから 現像者 がいなくなる

未来年表は、「FUTURE LAB 未来人」により、編集・制作されています。転載、および、二次利用に際しては、別途、当該制作による許諾が必要となります。詳しくは、こちらより、お問い合わせください。

powered by FUTURE LAB 未来人

博報堂生活総合研究所

<https://seikatsukan.jp/futuretimeline/yours.php?age=17>

4/5

【資料2】SDGs ロゴプリント（英語）



【資料2】SDGs ロゴプリント（日本語）



【資料3】英文プリント（6種）

THE GLOBAL GOALS
For Sustainable Development

Melati and Isabel Wijsen
Bali

WORLD'S LARGEST LESSON

Melati and Isabel Wijsen are on a mission to stop plastic bags from suffocating their beautiful island home of Bali. Plastic bags are essentially indestructible, yet they're used and thrown away with reckless abandon. Most end up in the ocean, where they pollute the water and harm marine life; the rest are burned in garbage piles, where they release harmful dioxins into the atmosphere. "Don't ever let anyone tell you that you're too young or you won't understand," Isabel says to other aspiring activists. "We're not telling you it's going to be easy. We're telling you it's going to be worth it."

What global issue were they concerned about?

Last year a study of 192 countries led by the University of Georgia found Indonesia was the second largest source of plastic rubbish in the ocean after China. Indonesians living within 50 kilometres of the coast generated 3.22 million tonnes of mismanaged plastic waste in 2010 - 10 per cent of the world total.

Why did it matter to them?

Much of the rubbish in Bali is not collected. Some plastic is burnt, acrid fumes choking sweaty afternoons. Some is simply dumped in rivers. "In Bali we generate 680 cubic metres of plastic a day. That's about a 14-storey building," Isabel says in her TED talk. "And when it comes to plastic bags, less than five percent get recycled."

What did they do about it?

Beginning when they were just 10 and 12, Melati and Isabel galvanized support from their classmates, and their efforts — including petitions, beach cleanups, even a hunger strike — paid off when they convinced their governor to commit to a plastic bag-free Bali by 2018. They developed a sticker that local shops can use to declare that they're plastic bag free.

What's next for Melati and Isabel?

The sisters are working on an educational booklet, aimed at elementary school students, packed with information on how to make your own bags, waste management and pollution. "Change doesn't happen if no one is educated," Melati says.

<https://www.facebook.com/byebyeplasticbags/>
https://www.ted.com/talks/melati_and_isabel_wijsen_our_campaign_to_ban_plastic_bags_in_bali?language=en

Follow them online

Now it's your turn!
What will you do to make a difference for the Global Goals?

THE GLOBAL GOALS
For Sustainable Development

Elif Bilgin
Turkey

WORLD'S LARGEST LESSON

Elif Bilgin is a young scientist and has been curious since she was first up on her feet. She has come up with interesting inventions and discoveries since then. Her curiosity for environmental issues, especially petroleum based plastic, caused her to think about an alternative. She spent 2 years researching and testing and just like Thomas Edison "she found twelve different ways to fail". Eventually though she made her first sample of "bio-plastic from banana peels" when she was just sixteen years old.

What global issue was Elif concerned about?

The environmental problems associated with living in a big city made Elif want to do something to help combat climate change.

Why did it matter to her?

She found out that petroleum-based plastics were causing a huge amount of pollution and that bioplastics were a great low-cost alternative.

What did she do about it?

After much research, Elif developed a process for making bioplastic from banana peel which is so simple you could even do it at home.

"My aim was to develop a method for using banana peels in the production of bio-plastic as a replacement for the traditional petroleum based plastic. I was able to design a method and produce non-decaying plastic using banana peels. The method I designed is so simple, it is possible to say that one could actually do it at home. This way, anyone could use this plastic. Our beautiful planet will be spared from the consequences of the production of plastics with petroleum derivatives in them such as pollution of the air, land and water."

What's next for Elif?

"I want to get my degree in Biomedical Engineering and computer Science and move on to working with technology that benefits humankind" Elif Bilgin August 2016

Elif in action
<https://www.youtube.com/watch?v=BMR-oMpCbjQ>

Now it's your turn!
What will you do to make a difference for the Global Goals?



Urban Creators

Philadelphia, Pennsylvania



The Urban Creators is a grass-roots organization that inspires inner-city neighborhoods to transform neglected landscapes into dynamic safe-spaces that foster connectivity, self-sufficiency, and innovation. They are change makers; story-tellers, urban farmers, dot connectors, movement builders, and innovators, cultivating knowledge, skills, and local resources to take the health of our communities into our own hands. They engage diverse networks in neighborhood revitalization efforts that build self-sufficiency and pioneer grass-roots economic development, while igniting a unified generation of passionate change agents, social entrepreneurs, and urban creators.

What global issue were they concerned about?

The Urban Creators were unified by a vision to organize across socially-constructed barriers in order to harvest people-power, economic resilience, and food justice in our neglected communities.

Why did it matter to them?

Urban Creators began with the mission of pooling together a diverse network of change agents to address issues of blight, cyclical poverty, food insecurity, and inequality from the ground up.

What did they do about it?

They spent the first year organizing door to door in our neighborhood to gauge the interest and ideas shared by community members and stakeholders, and designing our theory of change. They spent the second year clearing away debris from a 2 acre plot of vacant land on the corner of 11th & Dakota street, and planting the first seeds of our movement to remediate the polluted soils of injustice in North Philly. The third year saw the transformation of this land into LIFE DO GROW; their urban farm, Community Resource and Innovation center, and their home.

What's next for Urban Creators?

Today, they provide organic produce to dozens of local families, sell to restaurants to sustain and scale our operation, and provide over 1,000 students and 50 ex-offenders each year with hands-on training in community organizing, sustainable design, agriculture, and entrepreneurship.



Follow them online

<https://www.facebook.com/phillyurbancrators/>



Now it's your turn!

What will you do to make a difference for the Global Goals?



Rohit Fenn

Bangalore, India



Fresh water availability is already a major environmental problem in several areas of the world and will become a global problem soon. That is why it is foolish to continue to flush billions of liters of treated fresh water down our toilets everyday. Since 40% of the 6 billion people on earth use toilets, it is a lot of water. Rohit embarked on a project to redesign the water closet / flush to reduce the consumption of water. He made this possible with a simple mechanism added to the conventional closet that creates a partial vacuum when the user pushes down the flush lever. He called it the Vacu-Flush.

What global issue was Rohit concerned about?

In parts of India the sanitation system is under a lot of pressure to keep up with rapidly growing population. In other parts of India there is little sanitation at all.

Why did it matter to him?

The lack of water, due to droughts, to keep the system working properly becomes a real problem and people fall ill through coming into contact with open sewage.

What did he do about it?

When Rohit was 16 he became aware of the problems India was facing in regard to the lack of clean water. He says, "This sparked in me the desire to come up with a hygienic, reliable, cheap and water efficient solution to the problem."

Rohit designed and tested a toilet that used a pedal mechanism to save 50% of the water conventional toilets use, reducing the amount of water used from 6 litres per flush to around 3 litres, and called it the Vacu-flush - winning the Google science prize in 2011.

What's next for Rohit?

"In the future, I would like to do more projects concerning the environment. For example, my biggest dream is to build a greenhouse made of waste materials."



Rohit in action

<https://www.youtube.com/watch?v=GIMPLl8n4Kc>



Now it's your turn!

What will you do to make a difference for the Global Goals?



Discardious

Nigeria



Discardious is an android mobile app developed by Team Charis for the 2015 Technovation Challenge. They are a formidable team of young minds who are passionately committed to making a difference in their communities. They first met in high school as classmates and met again at the ikapture Afterschool Academy where they decided to take up the challenge of programming for the first time. Despite diverse backgrounds, they have dedicated themselves to doing this project because of their collective interest in creating positive change.

"Young girls, everyone has the potential of attaining great heights. It depends on your mindset and how you see yourself. Instead of using the Internet negatively, use it to search for life changing opportunities." - Grace Akpoiro, Team Leader

What global issue were they concerned about?

Discardious aimed to tackle the health issues many Nigerians face as a result of improper waste disposal.

Why did it matter to them?

Where they live, the public services did not effectively deal with waste management, especially on the streets.

What did they do about it?

Praise David-Oku, Sonam Kumar, Nmesoma Ogonbna, and Grace Akpoiro as they developed a mobile app to tackle waste disposal challenge in Nigeria.

Discardious was developed using the MIT App Inventor 2 and an android phone for testing the app. They pitched their app, which enables individuals and businesses to call in hazards and request for them to be removed quickly and cleanly by eco friendly tricycle carts for a small fee. It has created employment opportunities as well as a better and more sustainable city by reducing the impact of waste.

What's next for Discardious?

The girls hope to start up the business and organize training sessions for young people who will in turn help the business to grow smoothly and help their goals to be achieved in a shorter time. They also want to encourage young girls to participate in the next Technovation Challenge.



Follow them online

https://twitter.com/TeamCharis?ref_src=twsrc%5Etfw



Now it's your turn!

What will you do to make a difference for the Global Goals?



Muzoon Almellehan

Syria



Meet Muzoon Almellehan, a 16-year old Syrian girl who worked for years in Jordanian refugee camps to ensure that the girls of the camps were getting the education they deserve. She and her family fled their home country of Syria in 2013 as a result of Syria's ongoing civil war. Life in the camps was understandably difficult, and as a result, many young Syrian women marry before they turn 18 as a means of ensuring security. Nearly a third of Syrian girls in the Jordanian refugee camps become brides before they turn 18. Muzoon is passionate about getting these girls to stay in school and to see education as an alternative to early marriage.

What global issue was Muzoon concerned about?

Early marriage has soared amongst Syrian refugees in Jordan in the past three years - in 2014 25% of their marriages involved children ages 15-17, according to UNICEF. As Syria's long, brutal civil war grinds on with no end in sight, desperate displaced Syrians are increasingly seeing early marriage as a way to secure the social and financial future of their daughters.

Why did it matter to her?

"Many families think that if they get their daughters married at an early age, they'll be protected. They don't know that something might go wrong...and if the marriage fails, the daughter will be vulnerable."

"Education is very important because it's the shield we can use to protect ourselves in life. It's our method to solve our problems," she says. "If we don't have education, we can't defend ourselves."

What did she do about it?

For two years, Muzoon went door-to-door in Azraq camps where she lived, waging a one-girl campaign to convince parents to keep their daughters in school instead of pressuring them into wedlock.

Muzoon has been called the "Malala of Syria" for her crusade to keep girls in school, a reference to the teenage Pakistani education activist who survived a Taliban attack on her school bus in 2012.

What's next for Muzoon?

"I want to be a journalist," says Muzoon. "It's a very beautiful job, in my opinion."



Muzoon Speaks about Education

<https://www.youtube.com/watch?v=zBxY3Jr80k>



Now it's your turn!

What will you do to make a difference for the Global Goals?



【資料 4】 作文プリント

【資料 5】 振り返り用紙

Try to find a solution.

HR() No() Name()

Reflection Sheet HR () () 番 氏名 ()

1. Future Timeline (未来年表を見る活動)
2. What is SDGs? (SDGsについて知る活動)
3. Change Makers (世界の6人の文獻を読む活動)
4. Scenario planning (課題を2軸に設定し考える活動)
5. Make an Innovation (課題を解決する発明を考える活動)

■ 参考資料

<文 献>

- ① インタラクティブ・ティーチング—アクティブ・ラーニングを促す授業づくり
栗田 佳代子(著)、日本教育研究イノベーションセンター(著) 河合出版
- ② SDGs 国連 世界の未来を変えるための 17 の目標 2030 年までのゴール
日能研教務部(編集) みくに出版

＜ホームページ＞

- ① 未来年表 | 生活総研
<https://seikatsusoken.jp/futuretimeline/>
- ② SDGs のロゴ | 国連広報センター
http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/sdgs_logo/
- ③ 学校のための持続可能な開発目標（SDGs）ガイド | 子どもと先生の広場 | 日本ユニセフ協会
<https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/>
- ④ The Worlds Largest Lesson
<http://worldslargestlesson.globalgoals.org/>
- ⑤ ピコ太郎 × 外務省（SDGs）～ PPAP ～ - YouTube
<https://www.youtube.com/watch?v=H5l9RHeATl0>
- ⑥ The World's Largest Lesson 2016 - English with subtitles on Vimeo
<https://vimeo.com> > World's Largest Lesson > Videos

単元名 あなたのめざす明治維新は？

橋 口 勝 嗣

HASHIGUCHI KATSUSHI

県立出水高等学校（鹿児島県）

担当教科：日本史

●実践教科：日本史A

●時 間 数：6時間

●対象学年：2学年

●対象人数：16名

実施概要

【1】単元のテーマ・目標

「あなたのめざす明治維新は？」

世界でも最貧国といわれるマラウイについて知ることで、西洋化の推進で近代化を成し遂げた日本には、他の選択肢はなかったのかを考察させる。さらに、国際理解を深めることを通して、「自分にできること」について提案する。

【2】単元の評価規準例

（ア）関心・意欲・態度

日本と遠く離れたマラウイの現状を知ることで、アフリカの歴史や地理についての興味・関心を高める。

（イ）思考・判断・表現

マラウイの植民地支配されてきた過程を学ぶことで、経済発展が思うように進んでいない背景について考察する。

（ウ）技 能

資料・データを収集し、マラウイの産業構造について読み取ることができる。

（エ）知識・理解

マラウイと日本の環境や歴史的背景の違いがどのように経済発展に影響を与えたかを理解する。

【3】単元設定の理由

明治維新 150 周年を迎え、大河ドラマ「西郷どん」の放送も始まった。鹿児島でも明治維新関連のイベントや講演会も多くなり、生徒の明治維新に対する興味関心が高まってきている。

明治時代初期、日本は欧米列強からの植民地支配を受けないようにするため、「富国強兵」「殖産興業」「文明開化」などのスローガンを掲げ、欧米列強に対峙すべく近代化に邁進してきた。この政府主導による西洋化が、近代化の前提として急務とされ、西洋の文明が日本急激に入ってきた。そして、様々な制度や習慣が大きく変化し、「西洋のものなら何でもよい」という風潮まで生じてきた。この単元では、文明開化の過程や、日露戦争後の条約改正に伴い欧米列強と対等な外交関

系の構築がなされるまでを、歴史的必然ではなく日本が選択してきたことを生徒に理解させたい。イギリスの植民地支配を受けた後に独立したマラウイの現状と日本を比較し、その歴史的背景の違いを認識させることで、なぜ日本が近代化を成し遂げることができたかについて考察させる。

また、マラウイの経済発展が進まない現状を踏まえ、「真の豊かさ」とは何かということに考えさせたい。そして、日本も歴史において違う道を歩んだ可能性もあったことについても生徒に示唆したい。

近年、生徒の主体的な学びを重視するアクティブラーニングの導入が盛んとなっている。2学年の生徒は、大学入試の新テスト導入の過渡期にあり、能動的な学びの場面を少なからず経験してきている。グループワークや話し合い学習を取り入れることで、生徒同士による活発な意見交換を促したい。

【4】展開計画（全6時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	「異文化理解」 「地域比較」 「国際理解」の前提として、「異文化理解」の重要性を認識することが大切である。京都修学旅行の事前学習として室町時代からの伝統文化が京都には数多く継承されてきたことを学ぶと同時に、外国（アメリカ）の文化や歴史との違いについて理解させる。 外国の文化を理解するだけではなく、その対比において日本が世界の他人の目から見るとどういう特徴を持った国なのかを理解する必要がある。自国を理解することが異文化理解の前提となることに気付かせる。	室町時代が発祥の伝統文化にはどのようなものがあるかのクイズに答える。 アメリカ出身のALTに授業に参加してもらい、生徒と一緒にクイズに参加してもらおう。 グループごとに話し合いで答えをまとめる。 身近にある文化やものの歴史が室町時代まで遡ることを理解する。 茶道・華道・水墨画・和室建築等、いくつかの例を挙げながら、各グループにパソコンを使用してもらい、その発祥について調べる。 各グループで話し合った内容を発表する。 ALTにアメリカの歴史や文化について話をしてもらうことで、日本の歴史との関連性や背景の違いについて認識する。また、文化の違いでとまどった点についても説明する。	パワーポイント パソコン室利用 巾広用紙・マジックペン
2	「マラウイについて知ろう」 マラウイの場所やアフリカについての興味関心を高めさせる。	マラウイの地理・歴史・資源等についてインターネット等で調べる。 ・アフリカに対して抱くイメージ ・日本からマラウイに行くまでの経路 ・マラウイの歴史 ・マラウイや周辺のアフリカ諸国の資源	パソコン室利用 ワークシート

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
		・ マラウイの主要産業 マラウイのことについて各自で調べたことを、グループで話し合い、発表をする。	巾広用紙・マジックペン
3 本時	「あなたの考える幸福とは何か？」	アメリカ出身の ALT に来てもらい、グループの話し合いにも参加してもらい。 マラウイで撮影した写真からマラウイの人々の生活の様子を紹介する。 生徒が調べ学習でまとめた内容を発表してもらい、教師が補足・追加説明を行う。 ALT にアメリカ人の幸福に対する考え方について説明してもらい。 グループごとに話し合い学習を行い、まとめたことを発表する。	パワーポイント ワークシート 広巾用紙・マジックペン
4 本時	「あなたのめざす明治維新は？」	日本が明治維新によって急激な近代化をすすめてきたが、他に選択肢がなかったのかを、発展途上のマラウイの問題点について理解することから考察する。	
5	「あなたのできることは？」	発展途上国に対して日本はどのような支援をすべきかについて、グループで話し合い、まとめる。	
6	地理との合同授業	マラウイの産業の現状 マラウイ産と日本産の石炭を比較 植民地支配を受けてきた歴史 アフリカの農業（地理教師担当） アフリカの資源（地理教師担当） 周辺諸国との比較（地理教師担当） ウィリアム＝カムクワンバの話 電気も水道もない場所での生活 風車がある実家に行くまでの舗装されていない道路 家族のために風車発電を開発 交流授業でのマラウイの中学生 家族と接する時間が長い 家のことを手伝うのは当たり前	マラウイで製造された石けん と日本製の石炭 アフリカ掛地図 パワーポイント

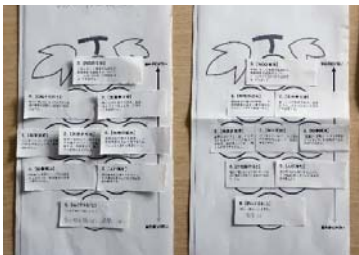
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
		包丁を使うことや調理も手慣れたもので「生きる力」を言うまでもなく持っている。 歌やダンスが好きで上手である。 青年海外協力隊員の活動の様子 スタディトリップや職業ワークショップを実施している。 将来の夢をインタビューすると、身近な職業が挙げられた。 産業が未発達のため、農業以外の職業が身近に存在しない。さらに、貧困であるがゆえに子どもたちが経験することのできる範囲が限られており、将来の夢やなりたい職業が自分の知っている経験の中からしか選べない。 「高校生のときに海外協力隊を知っていたら、進路選択も違っていただかも」という青年海外協力隊の隊員の言葉を紹介。 話し合い学習 グループワーク 「幸福とは何か」について考える 日本の幸せ・マラウイの幸せのかたちが違うことに気付かせる。	

【5】 本時の展開

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (3分)	前時の振り返り 調べ学習での成果を発表する。 マラウイ概要紹介 現地で撮影した写真をもとにマラウイのどのような点が問題となるのか考える。(フォトリランゲージの手法)	他者の発表に対して傾聴する姿勢の育成を図るようにする。 教師海外研修で撮影した写真を提示し、マラウイの現状について生徒に理解させる。【知識・理解】マラウイの抱える課題について考察させる。【思考・判断・表現】前時の調べ学習での成果と教員の説明とが連動するように留意する。	パワーポイント 写真・図版 ワークシート

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
展開 (42分)	「マラウイでのものづくり」の問題点について考える。  マラウイのスーパーで販売されていたコカ・コーラ（分量に個体差がある）	写真を見せて生徒に「どのような感想をもったか?」「この写真から読み取れるマラウイのものづくりの問題点」を答えさせる。【思考・判断・表現】	
	「マラウイの人たちの笑顔」・「道端でまったりとしている人」の写真から「幸福とは何か」について考える。  交流授業での生徒の笑顔	「現地の学校での生徒の写真」や「病院で撮影した入院患者の家族の笑顔」「日中に道端で寝そべっているマラウイ人」の写真を見せてマラウイ人の考える幸福とは何かについて考察させる。【思考・判断・表現】	
	 道端でゆったりと過ごすマラウイの人々	農業が基本のマラウイでは、日本と異なり時間に対する価値観が違いうことに気付かせる。【知識・理解】 アメリカ出身の ALT に来てもらい、グループの話し合いにも参加してもらう。	
	 電気も普及していないマラウイの農村部	教師からの補足説明で、現地の JICA 事務所や青年海外協力隊の方々から聞いた現地の状況や、実際に訪問した場所でのマラウイの人々との対話経験などを紹介する。 マラウイでは時間や約束に対して、日本と大きく異なる価値観を持っている人が多いことを理解する。【知識・理解】	

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
まとめ (5分)		ALT がアメリカ人の幸福に対する考え方について説明する。 マラウイ人の多くが考える幸福とは何か。日本人やアメリカ人の多くが考える幸福について比較することで、価値観の多様性について理解する。【知識・理解】 グループごとに話し合い学習を行う。まとめたことを発表する。【思考・判断・表現】	広巾用紙

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (3分)	前時の振り返り 数名に前回の授業で感じたことを発表する。	日本やマラウイの幸福に対する価値観の多様性について認識する。【知識・理解】	
展開 (42分)	ワークショップ 「文字が読めないということ」 「マラウイが経済発展するにはどのような方策があるか」 ワークショップ 「自分たちにできること」  マラウイの経済発展について具体的に話し合いをする前に、一般的な発展途上国にお	文字が読めないとどんな不便さがあるのかを2人1組で考えて発表する。【思考・判断・表現】 明治維新において、政府は日本を強国にするために、西洋を見倣い一般国民にまで広く学校教育の門戸を開いたことが日本の近代化に与えた影響について考える。【思考・判断・表現】 前時での学習内容を踏まえて、「マラウイがどうすれば経済発展ができるのか」について話し合い、まとめる。【思考・判断・表現】 それぞれが自分の答えを見つけ、他者の意見を聞き、討論をすることで、多様な考え方を導き出す。【思考・判断・表現】 マラウイの経済発展のための方策について、グループで話し合い、意見をまとめる。【思考・判断・表現】 日本においては驚くべき早さで近代化がすすんだが、マラウイでは経済発展が思うようにすすまない	ペットボトル3本 ネパール語で「水」「薬」「毒」と書いてある。 それぞれに、水・砂糖水・塩水が入っている。 ワークシートのり

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
まとめ (5分)	ける問題解決の方策について学ぶ。 明治維新において急激な西洋化をすすめた日本と経済発展が進まないマラウイとの対比をする。 「明治維新の日本は政府主導の文明開化により西洋化を押し進めるが、他に選択肢はなかったのだろうか。」 歴史における選択肢は多数存在するのであり、文化の多様性を理解することが歴史的思考力を養うことにつながることに気付く。	理由についてグループで話し合い、考えさせる。【思考・判断・表現】 調べ学習での成果を踏まえて、グループで話し合いを行い、意見をまとめ、発表させる。【思考・判断・表現】 グループごとに様々な意見があるように、地理や気候などの風土の違いから国の発展の歴史も異なることを理解させる。【知識・理解】	

【授業実践の様子】



「異文化理解」「地域比較」の授業風景



パソコン室での調べ学習の様子



マラウイで購入してきた物品の展示



A L T が参加した授業の様子



調べ学習について発表している様子



「あなたがめざす明治維新は？」授業風景

【6】本時の振り返り

グローバル化がすすむ現代社会において、世界的規模で活躍する人材の育成が目指されている。そのためには「国際理解」や「異文化理解」が重要となる。従来の教師が一方的に実施する授業では理解が深まらなかったり、受動的な学びに過ぎなかったりしていた。グループによる話し合いや討論を積極的に導入することで、「深い学び」を行い、「能動的に学ぶ」人材の育成を図りたい。そして、「私たちにできること」まで考え、さらには自ら行動を起こすことに繋がられるようにしたい。

【7】単元を通した生徒の反応や変化

授業を実施したのが2年生であったが、教科指導とともに進路指導も重視している。産業や経済活動が未成熟なマラウイでは、進路の選択肢が極めて少なかった。家計のことや就職先がほとんどない中で家の農業を継ぐことが当たり前になっていた。本校の生徒には、将来の進路のことについて、もっと見識を深めて、自分の適性にあったキャリアプランを立ててもらいたいと思っている。日本だけでなく海外にも視野を広げてみるのが大切ではないかと感じた。授業後の生徒の感想の中に、「マラウイは選択できる職業は少ないが、日本はそうではないので、たくさん調べて最適な職業に就けるように頑張ろうと思いました。」「進路のことについて海外も視野にいれて考えるようになった」や「自分も青年海外協力隊に参加してみたいと考えた」などの記述もあった。このように、生徒が海外のことについて知ること、将来の進路の選択肢も広がったのではないかなと思う。

途上国・異文化への意識の変容

■授業前

「アメリカやヨーロッパの先進国に行ってみたい」と思っている生徒は多いが、アフリカについて情報がほとんど入ってこない。そのためかアフリカに対して持っているイメージに偏りがあった。生徒にアフリカで思いつくことや知っていることを聞くと、「貧しい」「発展途上国である」「衛生面がよくない」という答えがほとんどであった。日本と比べれば発展途上であり、電気・ガス・水道などのライフラインも充実していない。また、物資も少なく、生活が大変であるというイメージを持っている生徒がほとんどであった。

■授業後

マラウイでの交流授業で子どもたちがずっと笑顔で接してくれたことや、現地の青年海外協力隊員の活動の様子などを授業で説明した。日本では当たり前だと思っていた価値観が違っていたり、ライフラインや物資に乏しいことも大変ではないことが、自分自身にとっても驚きであった。どれくらい生徒に、日本とは異なる生活があるのかを伝えられるか心配であったが、意外と生徒はその違いを実感してくれたようである。「世界にはいろんな国、いろんな人がいることを改めて見直し、自分にできることがあることも知れた。選択肢がさらに広がった。」「留学とかでヨーロッパに行ってみたいと思っていたけど、マラウイのような発展途上国にも行ってみたいと思った。」など異文化理解という点においては一定の成果があったのではないだろうか。

自己評価

■苦勞した点

最終的には、「自ら行動を起こす」人材の育成を図りたい。そのために、グループワーク等のアクティブラーニングの手法を取り入れたが、課題設定や発問の方法についてはまだまだ検討の余地がある。グループ学習に慣れていなかったり、話し合いが苦手な生徒もいた。そのようなグループでは議論が円滑にいかない場合もあった。また、話し合いでまとめたことを発表させるが、感想的な意見にとどまったり、稚拙な表現が多々見られた。今までの、知識をインプットするような学習であり、アウトプットする機会が少なかったのであろう。今後、学問的な深みまで発表のレベルを上げていけるように指導したい。未だに試行錯誤の繰り返しであり、授業の進捗が遅れがちとなるのが今後の課題であろう。

■改善点

生徒が「能動的に学ぶ」ようになるためには、考えることや話し合いをすることが楽しいと思い、学ぶ喜びを実感することが大切である。そのためには、生徒の興味関心を高めるような課題設定やワークシートの作成が不可欠である。改めて、幅広い教材研究や指導方法の模索の必要性を実感した。今回の課題設定は抽象的なものであったために、生徒のまとめ発表も感想文のようなレベルのものになってしまった。より具体的な学びが深められるようワークシート作成や課題設定についてブラッシュアップしていきたい。

■成果が出た点

日本に入ってくるアフリカの情報は極めて少ない。マラウイのことについて自分も含め、周囲の人々も知らないことが多かった。授業の最初の段階で、生徒に「アフリカに抱くイメージ」を答えさせた。「貧しい」「暑い」「衛生面がよくない」「陽気なアフリカの人」「野生動物」など発展途上国の印象が強いようであった。授業でマラウイのことを取り扱った後の感想等で、「アフリカにも行ってみたいと思った」とか「マラウイは、日本と比べ物資は乏しいが、お互いが助け合って生きていることが分かった。」などの変容が見られた。アフリカに対して、貧しいゆえに不便であるというステレオタイプの思考が少なくとも無くなったように思える。今回の授業実践において、授業の手法としてグループによる話し合いを積極的に導入したが、以前と比べて生徒が話し

合いや発表することに慣れてきたように感じる。

そして、日本とは価値観や経済状況が大きく異なる場所もあるのだということを多少なりとも理解できるようになったようである。

■備考

今後、グループワークなどのアクティブラーニングの手法を積極的に取り入れて、生徒が能動的に今後の国際支援をどのようにすべきか考えさせることが肝要ではないかと考える。マラウイに行かせてもらったので、この経験を他者にも伝えていきたい。事前研修や事後研修では、グループワーク等による開発教育について学んだ。そして、他の参加者との情報交換を行えた。貴重な経験の場を与えていただいた。今後は、この人のつながりや情報交換を授業に活かしていきたい。また授業づくりに関しては、情報の共有を行う必要性を感じた。何らかの形で、他の教員とのネットワークを広げていきたい。

添付資料・参考資料

■添付資料

ワークシート

■参考資料

「ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら 第 5 版」開発教育協会

マラウイについて知ろう	
問 1 アフリカといえばどのようなイメージを持っているか。	
問 2 日本からマラウイに行く方法について調べなさい。	
問 3 マラウイの歴史を簡略にまとめなさい。(どの国の植民地支配を受けてきたか)	
問 4 マラウイや周辺諸国にはどのような資源が存在するか調べなさい。	
問 5 マラウイの主要産業についてまとめなさい。	
問 6 マラウイが経済発展をするにはどうすればよいか。	

マラウイについて知ろう

問1 アフリカといえばどのようなイメージを持っているか。

問2 日本からマラウイに行く方法について調べなさい。

問3 マラウイの歴史を簡略にまとめなさい。(どの国の植民地支配を受けてきたか)

問4 マラウイや周辺諸国にはどのような資源が存在するか調べなさい。

問5 マラウイの主要産業についてまとめなさい。

問6 日本人の考える「幸福」とは何か。

問7 マラウイ人の考える「幸福」とは何か。

問8 マラウイが経済発展をするにはどうすればよいのか。

ONE WORLD English Course 1 Lesson 3

「メイの好きなもの」

(一般動詞、Do を用いた肯定文、疑問文、否定文及び What を用いた疑問文)

祝 迫 創

IWAIZAKO SO

志學館中・高等部（鹿児島県）

担当教科：外国語（英語）

●実践教科：英 語

●時 間 数：5 時間

●対象学年：中等部 1－3 学年

●対象人数：26 名

実施概要

【1】単元のテーマ・目標

好きなものについての情報をやりとりしたり、相手のことについて尋ねたりすることができる。
一般動詞、Do を用いた肯定文、否定文、疑問文及び What を用いた疑問文を理解し表現できる。

【2】単元の評価規準例

(ア) 関心・意欲・態度

Activity や Task、教師の話す英語やマラウイに関するプレゼンを聞いて内容を理解しようとしている。

知っている語句や表現を用いて、多くの文を書いている。

(イ) 思考・判断・表現

意味内容にふさわしく音読することができる。

マラウイの学生に質問する文を、文法に従って正しく書くことができる。

(ウ) 技 能

英語の 4 技能を用いて表現活動ができていく。

(エ) 知識・理解

質問文を聞いて、正しく応答する知識を身につけている。

肯定文、疑問文、否定文それぞれ構造の違いについての知識を身につけている。

【3】単元設定の理由（児童 / 生徒観、教材観、指導観）

(1) 生徒観

男子 14 名、女子 12 名計 26 名のクラスは英語に関して興味は比較的高く、真面目に取り組む生徒が多くみられる。リーダーシップを取ろうとする生徒はまだ少ないが、授業中にやるべき活動を明確に示すと役目を果たしてくれる。

(2) 教材観 教科書

本題材はメイがクラスで書いた自己紹介カードの内容から始まる。一般動詞を用いて自己紹介をするため、本文は生徒の自己紹介をする際の例文となりうる。また比較的自然な友人との対話の例文が示されているので生徒が登場人物を自分の立場に置き換えて考え、理解しやすい題材だ

と言える。

(3) 教材観 文法

Lesson1 で be 動詞 を学び、Lesson2 で代名詞 this、that 及び疑問詞 What を学習した。Lesson3 で一般動詞及び Do を学ぶため相手にたずねる表現の幅が増える。また What + 名詞の疑問文に対する応答では具体的な情報を含んだ主語 + 動詞 + 目的語表現が使えるようになる。

(4) 教材観 海外学生（マラウイ共和国・ゾンバ）の映像・画像・手紙

単元の目標として相手のことについて尋ねるという Activity がある。今回マラウイ共和国・ゾンバの Secondary School と現地教員を経由して交流できる機会があり、この Activity を現地の学生に対して行うことにした。日本と異なる文化圏に住み、明瞭で簡潔な英語を用いる現地学生とコミュニケーションを取ることは生徒の英語学習への動機付けになり、また国際理解教育にもつながるものとする。

(5) 指導観

授業の中では生徒の興味・関心の高さを活かし、6 人程度のグループによる活動を積極的に取り入れて、生徒が自らの頭で推測し考える活動を増やしていく。またグループ活動を通じて、生徒自身が集団の中でリーダーシップを発揮する場面を作っていく。

また、授業実践内容は多角的に広報する。国際理解の授業を実践し報告会で終わらせるだけでなく、世代に即した実践内容の発信を行う。

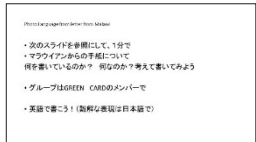
【4】展開計画（全 5 時間）

時	▲テーマ・△ねらい	●活動・○内容	使用教材
1	▲ アヤのクラスで、みんなが英語で自己紹介カードを書く。メイが書いたカードの内容。 △ 自分がすることとしないこと、持っているものと持っていないものなどについて言うことができる。	● 自分がすることやしたことを紹介する ● マラウイの生徒に対して、自分のこと及び日本について紹介する^{*1} ○ 主語 + 動詞（一般動詞、現在形） + 目的語（名詞） ○ do を含む否定の平叙文	・教科書 ・プレゼンテーションソフト【資料 1】
2	▲ 休み時間にメイとケンタが、自分の好きなことについて話す。 △ 相手の好きなことをたずねることができる。	● 相手の好きなことや、ものを所有しているかどうかについてたずねる ● 単語テスト ○ Do you like~? とその応答 ○ 文尾を上げて発音する例（Do で始まる疑問文）	・教科書 ・新ユメタン 0
3	▲ メイとケンタが、自分の好きな事についてたずねる。 △ 数えられるものなどについて述べることができる	● 人やモノの数についての情報を交換する ○ 数量を表す some と any/ 名詞の複数形 ○ 慣用表現 Me, too. / How about you?	・教科書

時	▲テーマ・△ねらい	●活動・○内容	使用教材
4	▲ メイとボブが、週末の過ごし方について話す。 △ 相手が何をするか、何が好きかたずねることができる。	● 相手の行動や好みについてたずねる ○ What do you ～? とその応答 ○ What + 名詞 do you ～? とその応答	・教科書
5 本時	△ Lesson で学んだことを活かし、海外の学生に対してたずねることができる。	● 受け取った手紙に描かれてたイラストや文字に対して英語の質問を作る。 ● 1時間目及び本時プレゼン・グループ活動を通して、国際開発について考える	・教科書 ・プレゼンテーションソフト ・フォトランゲージ 【資料2】

※1 あくまで1時間目の内容であり、本時の内容ではない。しかし本時の活動を行うにあたり、1時間目で作成したマラウイへの手紙は生徒の変遷を紹介する上で非常に重要な資料であることから下記「本時の活動」で紹介することにした。

【5】本時の展開

過程・時間	○学習活動	△指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	○ あいさつ ○ 本時のゴールの確認前時の復習をする ○ What do you ～? とその応答 ○ What + 名詞 do you ～? とその応答 Q&A をペアで行う	△ 関心が「努力を要する」状況の生徒への支援 活動に参加できない生徒は、教師がペアに加わりヒントを示す	教科書
Today's Goal 相手に質問する英文を作る。			
展開 (40分)	展開1 1. プレゼンテーションを見て、質問に対して考える Q 手紙の中に描かれている動物や植物は何 展開2 2. 写真外枠部分の余白に、既習の肯定文・疑問文を用いて英文を書きこむ。 3. 書き込んだ英文を発表する	○ プレゼンテーションを表示する。 ○ 生徒はグループを作り、話し合う。 △ 生徒からの発言を促す。 △ 関心が「努力を要する」状況の生徒への支援 活動に参加できない生徒は、全体ではなくまずグループ内で意見を出すよう促す △ 知識・理解が「努力を要する」状況の生徒への支援 机間巡視の際、板書などを確認させヒントを与える	プレゼンテーションソフト 【資料1】 

過程・時間	○学習活動	△指導上の留意点（支援）	資料（教材）
まとめ (5分)	マラウイへの手紙書き（英作文）【資料3】を行う クラスメイトの英作文を知る 本時の振り返りを行う	○ 生徒の英作文を紹介する ○ 振り返りを口頭で行う	

【授業実践の様子】

1 時間目の様子



① マラウイの学生に日本を紹介する手紙作成



② 教科書を用いてポートフォリオを完成させる



③ 適宜イラスト等を交え、完成させる

本時の様子



① マラウイからの返信をグループで読み、何が書いてあるか推測させる



② 既習分野の英単語・表現を用いて英文を紙に書き込む



③ 英作文を共有する（発表）

【6】 本時の振り返り

1 時間目（7 月の事前授業）で生徒 76 名がマラウイへ手紙を書いたのに対し、本時の前にマラウイから 6 枚の手紙が返信された。当初マラウイからの手紙へ返信をする個人の Writing 活動を計画していたが、返信の量が少なかったため計画変更を行った。比較的理解しやすいと思われる手紙 2 通を事前に教員が選び、グループで一通の手紙の中に記された内容を推測しあう活動に変更したところ、生徒同士での意見交換が生まれ英作文活動がスムーズに進んだ。本時の目標である疑問詞 What だけでなく、生徒は Is this ～？のようなモノや情報があっても名称がわからないものを尋ねる表現も多く用いていた。グループ活動に多くの時間を割いたため、個人の Speaking 活動と Writing 活動が十分に取れなかった。

【7】単元を通した児童生徒の反応／変化

以下は生徒による実践授業前・後の感想用紙の一部である。

実践授業前の反応

Q1	アフリカに対して、どんなことを知っていましたか？
	サバンナがある。アパルトヘイト(?) ライオン がある
	紛争がある

Q1	アフリカに対して、どんなことを知っていましたか？
	・サバンナ 野生動物 人類のふりこ
	・暑い

Q1	アフリカに対して、どんなことを知っていましたか？
	動物がたくさんいる
	難民が たくさんいる

Q1	アフリカに対して、どんなことを知っていましたか？
	いめゆる バネと いめゆるような 運動神経のよい人たちが 多い。
	ツァンバワール、ネーデル、サハラ、ツァンバワール、エジプト、カメルーン、セネガル、マリ、ケネルン

実践授業後の反応

Q2	学生から返信がきました。マラウイはどのような国だと思いますか？
	とても 温かく、いろいろな人が住んでいる国
	だと思う。あまり日本のことを知らない国

Q2	学生から返信がきました。マラウイはどのような国だと思いますか？
	マラウイは全然場所はちがうけれど、少し似ているかなー
	と思いました。

Q2	学生から返信がきました。マラウイはどのような国だと思いますか？
	日本と同じように、学校に行く人もいるし、行けない人も
	いるけど、それでもみんな、にこにこ笑っていて、
	とても素敵な国だと思いました。

Q2	学生から返信がきました。マラウイはどのような国だと思いますか？
	マラウイの独特な言葉もあるので、読めなかったけど、文化
	を大切に行っているのでもういいと思う。

Q2	学生から返信がきました。マラウイはどのような国だと思いますか？
	また教育(学校など)が重要な国

Q2 学生から返信がきました。マラウイはどのような国だと思いますか？

ほとんどの人が農業で成り立っている。

Q2 学生から返信がきました。マラウイはどのような国だと思いますか？

- ・日本にはあまりいない動物がいる。
- ・学校に行ける人が少ない
- ・頭にたらいを乗っている
- ・チンギを着ている。

Q2 学生から返信がきました。マラウイはどのような国だと思いますか？

- 字をかける人が少ない国
- 服装が明るい色をしている

単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲

教科内での国際開発教育という限られたものであったが、生徒はマラウイに対して興味を持ち積極的に活動に取り組んでくれた。二学期の国際交流振り返りでは、ビデオチャットでマラウイの生徒と話してみたいという要望が多く記されていた。教科書の内容をそのまま利用する以上に、生徒の英語に対する興味関心は大きくなった。

途上国・異文化への意識の変容について

先述した感想を分析すると途上国に対する認識は、生徒の発達水準に応じ変化している。また鹿児島県という地理特性が「日本（鹿児島）とあまりマラウイは変わらない」という記述が1割程度あった。

自己評価

■苦勞した点

知識… 本時授業だけでなく授業内でのマラウイ紹介は限界がある。事前授業やHPを利用し知識理解の補助を行った。

理解… 実践授業内で実際にマラウイの生徒が書いた手紙を理解するには英語力に加え、非言語まで交えた情報から判断する必要がある。生徒によって手紙の内容理解度はばらつきがあり苦勞したが、理科の知識（生物分野）を活用し「葉脈の構造から推測するに、トウモロコシの一種ではないか」とマラウイの学生が描いたイラストを分析した生徒がいたのが興味深かった。

表現… 手紙で海外と交流する活動はWritingの力を大きく伸ばすものであるが、Eメールやビデオチャットでのやり取りはできなかった。本時以降はマラウイにこだわらず、ウェブ環境

の整った他国の学生とビデオチャットを用いて英会話を行ない、言語活動の量的補完を行った。【資料4】

■改善点

- ・ 知識分野の補完 マラウイに対しての事前知識を効率よく伝えるのが難しい。
- ・ 本時の活動にある国際理解まではたどり着けなかった。
- ・ マラウイからの手紙は学習の動機づけとしては優秀な素材であったが、英作文や音声活動の演習量を増やせるものではない。4技能のバランスを改善した活動を増やしていきたい。

■成果が出た点

学力推移… 私立中高一貫対象の学力推移調査^{※1}では全国平均を割るという結果に終わった。ただし「英語が嫌い」「勉強の仕方がわからない」という生徒の割合は、例年よりも10%^{※2}改善されていた。国際開発教育を英語に取り込むのは、短期的に見た場合授業数の圧迫につながる。が将来への投資となる活動である。6年間という長期スパンを有効に活かし、国際理解教育が将来医歯薬入試レベルの英語力をつけようとする生徒のモチベーションにつながるよう実践授業を行っていく。

※1 株式会社ベネッセコーポレーションが提供する中高一貫校向けの模試。

※2 アンケート結果は先述の株式会社ベネッセコーポレーションに著作権があるので原本は掲載せず。

■備考

- 1 授業実践内容を①学園通信 ②英語通信 ③学校掲示板 ④学校ホームページと多角的に発信した。【資料5】
- 2 実践授業の指導案は一単元の授業だが、他授業内でのアクティビティに於いてマラウイに関するゲームを行なった。また生徒への年賀状でマラウイを紹介した。

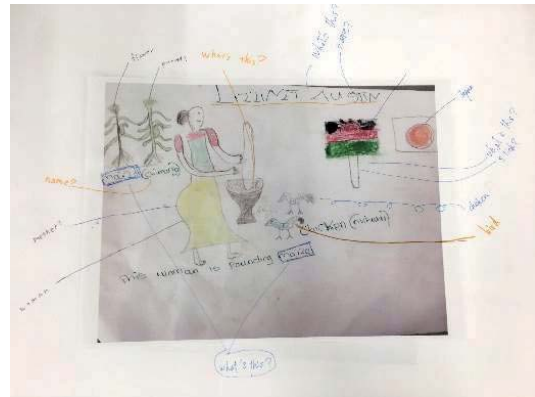
添付資料・参考資料

【資料1】プレゼンテーションソフト

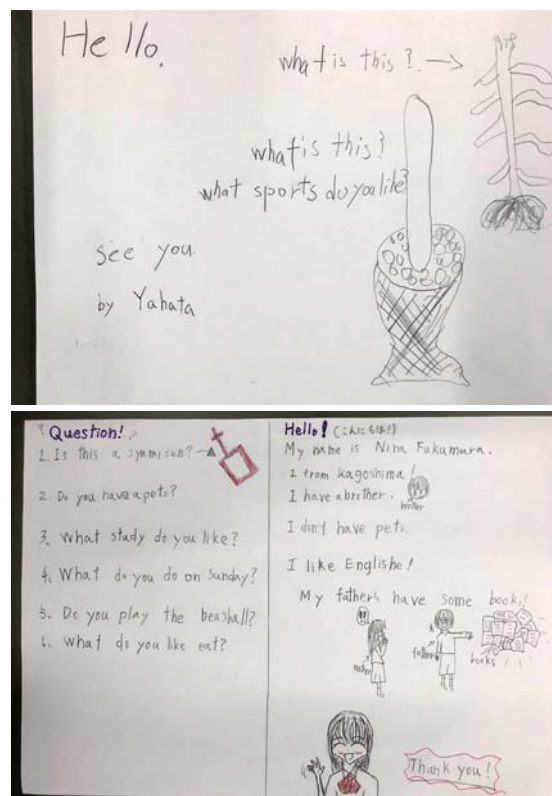
Extra Lesson A letter to Malawi 目標①世界の国を知る(アフリカ) 目標②知らない国の人と英語で意思を伝えあうことについて考える	Qどんなメッセージがよい？ ・ 英語を読めない可能性。ならば何を伝える？ ・ ネットもTVもないが、マラウイ人に何を伝えたいと思う？ ・ 日本人として伝えられることは？	Q アフリカと聞いて連想するのは？ 
Extra Lesson A letter to Malawi 2 目標①世界の国を知る(マラウイ) 目標②知らない国の人と英語で意思を伝えあう	1-3の手紙がマラウイの生徒に渡って返事がきました！ 	Photo(Landscape from letter from Malawi) ・ 次のスライドを参照にして、1分でマラウイからの手紙について何を言っているのか？ 何なのか？考えて書いてみよう ・ グループはGREEN CARDのメンバーで ・ 英語で書こう！(難解な表現は日本語で)

Ⅲ. 授業実践報告書

② 書き込み後



事前授業における英語の手紙②③



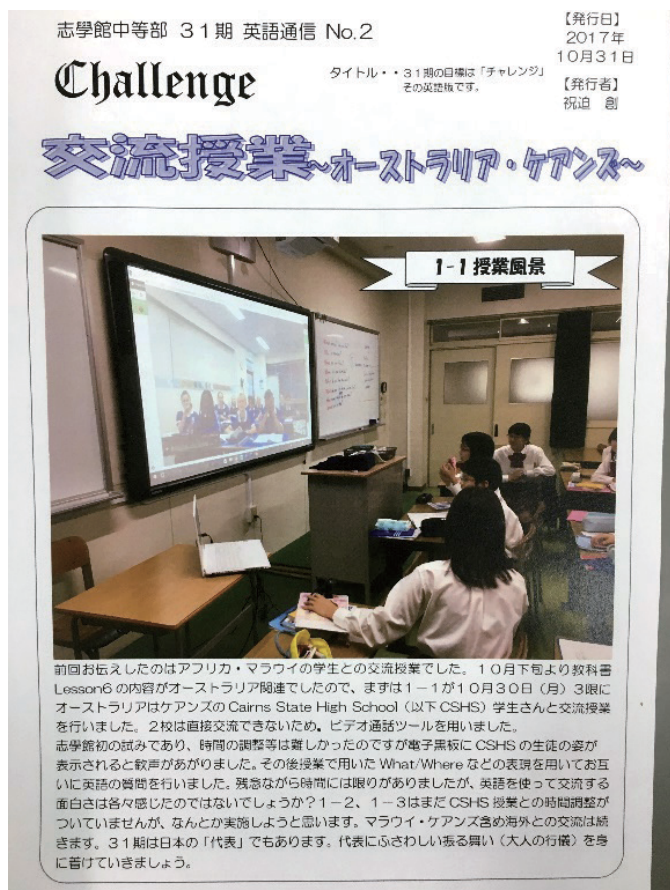
【資料 4】

ビデオチャット（時差の関係でマラウイではなくオーストラリアの現地校と行った）

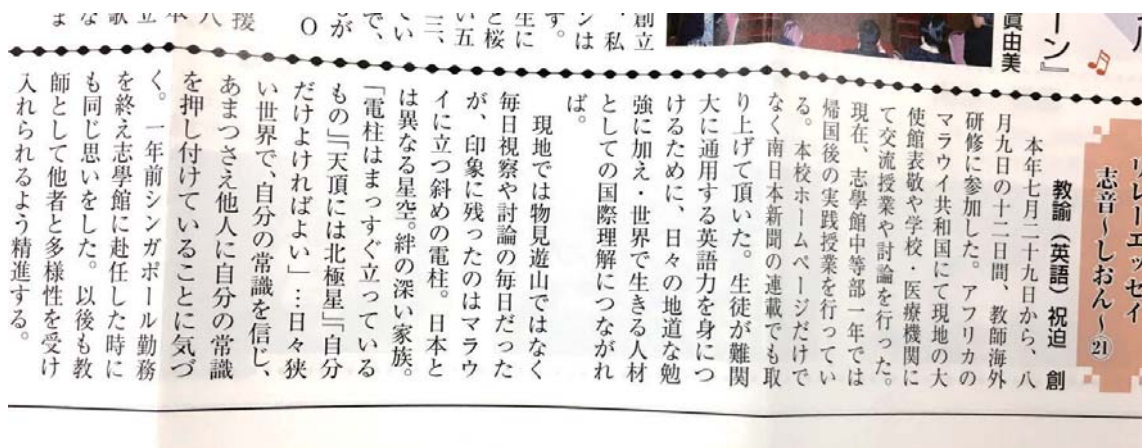
写真左 英語通信

写真右上 本時で行った疑問詞の学習を活かし英語で質問①

写真右下 本時で行った疑問詞の学習を活かし英語で質問②



【資料 5】学園通信



【資料5】英語通信

● 授業が新聞に掲載されました ●

一か月以上前ですが、9月17日(日)の南日本新聞22面(社会面)に、31期の写真・インタビューが載りました。7月から実施しているアフリカ・マラウイの生徒達との交流授業の様子が描かれていました。が！残念ながら紙面には制約がありインタビューされた大杉君と東さんのコメントが載らず・・せっかくなので通信の中で、2人に再度インタビュー。

Q アフリカでしたいことは？

ソワワでみたいです

Q 英語ができたらしめたこと？

様々な国に行きたい
(特にオーストラリア)

Q マラウイの生徒が書いてくれた返信(絵)を見ての感想

マラウイについて詳しく書いてくれたのでわかりやすかった

Q 英語ができたらしめたこと？

海外に遊びに行きたい
(特にアメリカ各都市)

★10/25～ 英語 ToDoやることリスト★

- ★実力査定 10月30日(月) 全員参加必須
- ★コミュニケーション 10月27日(金) 15点以下全員
- ★学力査定 10月28日(土) 1～3限
- ★10月27日(金) E3は学力査定調査の過渡期となる予定です。
- ★通自学習プリントは学力査定調査対策の問題になります。
- ★E1 ノート作り Lesson6 Part1～4 今週より Lesson6 に入ります

イラスト-書き手

近年、著作権や肖像権の問題で通信へのイラスト-写真掲載が難しくなっています。そこで皆さんから通信用イラスト-を募集します。ジャンルは動物や植物、風景線など、思い思いのイラスト-でください。サイズやジャンルは問いません。採用された生徒には謝金かお礼です。

保護者各位

平素より本校の取組に協力頂きありがとうございます。お子様の英語の取組や進路についてご心配な部分もあればと思います。英語通信がその心配を軽減し、ご家庭でも英語についてお話しする機会になれば幸いです。何かありましたら気軽にお問い合わせください。以後ともよろしく御願い申し上げます。 文責：渡辺 剛

えいごびと～第1回・中村武広先生

「えいごびと」の連載開始です。大人にインタビューをして、「英語」と人生にどのように関わってきたのか31期にその軌跡を伝えて頂く連載です。第1回は数学担当・また志望校の卒業生でもある中村先生です。

Q 中学生の時、どんな勉強をしていましたか

A 今年の中学部1年生と同じで、教科書の内容で基礎から学習していました。中1・中2の時の担当が池田先生だったので、みなさんと同じです。当時はまだリスニングが少なかったため、耳を慣らすにはNHKラジオの「基礎英語1」を聴きこんでいました。

中3になると担当の先生が変わったので、文章を読みながら新しい単語の意味を推測する授業へと変わり、その練習を繰り返しました。大学受験では知っている単語だけ出題されることがないからです。単語の覚え方も伝授していただけるユニークな先生でした。

例：語彙から覚える inspire, expire, conspire, aspire, respire
 「spire」は「尖」を表します。
 「in」(体の中へ) + 「spire」 息を取り込む ⇒ 鼓舞する
 「ex」(体の外へ) + 「spire」 「息を吐く」と ⇒ 「吐く」 ⇒ 「離れる」 ⇒ 「離れる」
 「con」(共に) + 「spire」 一緒にココロを息を ⇒ 「共にする」
 「ad」(ある向き) + 「spire」 ある方向に息を吐く ⇒ 「慣れる」
 「re」(繰り返す) + 「spire」 繰り返して息を吐く ⇒ 「呼吸する」

担当の先生が変わっても、変わらなかったことは、未知の単語があれは事前に調べておく、ということ。単語がわからないと、授業で何を聞いているのか、わからないです。何事も事前準備です。

Q 仕事でどんな風に英語を使いましたか

マラウイの民族衣装・チンガンを着ました！

A 海外でも製品を売る会社に勤めていたので、アメリカやドイツ、UAE やブラジルなどの現地スタッフとビデオチャットで話し合いをすることが多かった。また、会社に採用してもらう時や昇進して給料を多くもらう時などに、TOEIC(国際コミュニケーション英語能力テスト)で高得点をとらなければならぬ場面がたくさんありました。簡単に言ってしまうと、英語ができなければ高得点を取ることができないとを覚悟した会社員時代でした。また、仕事ではありませんが、大学生のときは「授業は英語、質問も英語」の留学の経験があり、習得したのを感じています(先生がシニアだった)。幸いにも留学だったの、就労先を見ればわかるのですが、あれが今の分野だったらと想像できます。今でもソコとします。(笑)

第二外国語を習得するのは当たり前の時代なので、国連の国語標準語のひとつでも習得できれば良いのかもかもしれません。

中村先生、ご多忙の中取材にご協力頂きありがとうございます！

イラスト-書き手

皆さんから通信用イラスト-を引き続き募集します。早速「えいごびと」イラスト-を今頃から練習しましょう。思い思いのイラスト-でください。サイズやジャンルは問いません。採用された生徒には謝金かお礼です。

★11/1～ 英語 ToDoやることリスト★

- ★実力査定 未定出席者確認
- ★コミュニケーション 11月6or7日 15点以下全員
- ★学力査定 11月6or7日 15点以下全員
- ★通自学習プリント 11月6or7日 15点以下全員
- ★英語からの愛情 サクセスコーチP11 3まで

保護者各位

平素より本校の取組に協力頂きありがとうございます。中村先生のお話は、グローバルな時代を生きていく私たちの参考になればと思い掲載させて頂きました。ご家庭でも英語について取り上げて頂ければ幸いです。何かありましたら学校までお問い合わせください。以後ともよろしく御願い申し上げます。 文責：渡辺 剛

【資料5】学校掲示板

先生たちが見たマラウイ

交流授業

あふれる笑顔夢を語る

平成29年9月13日 南日本新聞

先生たちが見たマラウイ

授業実践

多面的な国際感覚を育む

平成29年9月17日 南日本新聞

10代「今解散？」

北朝鮮 緊迫下なのに

平成29年9月27日 南日本新聞

【資料 5】学校ホームページ

紙面の都合上、改行あり。原文は以下のウェブサイトより

志學館中・高等部ホームページ

http://www.jh.shigakukan.ac.jp/information/topics/post_391.html#001751

海外学校との交流授業

2017年08月31日

お知らせ

中等部

高等部

7月、中等部1年生はマラウイ共和国（以下現地）の学生さんに向けて手紙を書こう！とチャレンジしました。勿論、英語での手紙です。



そして、本校英語科教員が本年度7、8月にあった教師海外研修に参加し、現地の学生さんに手紙を渡しました。

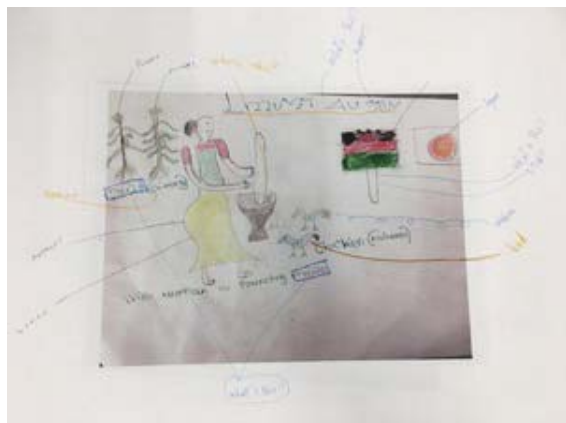


素敵な笑顔にこちらまで嬉しくなります♪

更に嬉しいことに、現地の学生さんが手紙の返事を書いてくれたので、英語科教員が大事に大事に持ち帰りました。



8月になり、新学期がスタートすると、中部部1年の生徒は手紙の返事を手し、再び授業にて英語での手紙に挑戦しました。



これからも海外の生徒と英語を使って交流を続けると、どんな発見があるでしょうか？楽しみです。

8月31日の授業の際には JICA デスク国際協力推進員 福永氏、南日本新聞記者 加藤氏が授業見学にきてくださいました。

お忙しい中ありがとうございました。

世界の中の日本 ～世界の未来と日本の役割～

松 山 真 子

MATSUYAMA MAKO

鹿児島市立武岡小学校・武岡台小学校(鹿児島県)

担当教科：社会科

●実践教科：小学校社会科

●時 間 数：9時間

●対象学年：小学校6年生

●対象人数：1クラス 29名 計 59名

実施概要

【1】小単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）

国際協力に関わる日本の人々の活動や世界の取組に関心をもち、自分にできることを考える。

【2】単元の評価規準例

（ア）関心・意欲・態度

人々の活動や世界の取組に関心をもち、国連機関や環境について意欲的に話を聞いたり、調べようとしていたりしている。

（イ）思考・判断・表現

調べたことを比較したり、関連付けたり総合したりして、我が国の世界において重要な役割を果たしていることを考え、意見文に表現している。

（ウ）技 能

調べたことをカードにまとめ、世界地図に整理している。

（エ）知識・理解

日本が世界の多くの国や地域、政治や経済の面だけではなく、文化やスポーツなどでも交流していることを理解し、世界において重要な役割を果たしていることがわかる。

【3】単元設定の理由（児童／生徒観・教材観・指導観）

（1）教材 観

本単元は、学習指導要領の第6学年の目標（2）「日常生活における政治のはたらきと、我が国の政治の考え方および、我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにする。」ことをねらいとしている。そこで、環境問題や貧困・難民など地球規模の問題についてインターネットや教科書などの資料を使いながら調べさせ、日本との関係に気付かせることを目的としている。

日本は、戦後の混乱と貧しさをアメリカの組織・NGOの「ララ物資」「ケア物資」といった支援で乗り越えてきた。国連児童基金（ユニセフ）からの資金や、世界銀行による貸付で、東海道新幹線や東名・名神高速道路などの建設が行われてきた。戦後の貧しさから立ち直れたのは、こ

ういった多くの援助があったことを知り、これからの日本は世界の国々のためにどんな援助を、どのようにしていくことが大切なのか考えさせたい。

また日本は、国連分担金は世界2位、政府開発援助拠出額は世界5位であり、世界の国々や国連の活動を支援している。この授業を通し、世界の中での日本の立場や日本の役割に気付かせ、今後私たちはどのように世界と向き合えばよいのか考えさせたい。

(2) 児童観

本校の児童は、社会科の学習に興味があり、意欲的に取り組む姿がみられる。特に歴史的分野には興味があり、どの時代の誰がどのようなことをしたのか詳しく話したり、発表したりする姿が見られる。しかし一方で地理的分野の関心が低く、世界や日本国内の地域に対してあまり興味関心をもっていない現状がある。そこで今回の学習を通し、世界の問題について自分のこととして捉えることができるよう、ICTを活用したり実体験を聞いたりしながら進めていきたい。

(3) 指導観

本単元では、おもに国連、国際紛争、環境問題、NGO、青年海外協力隊、文化やスポーツについて調べたり、青年海外協力隊など国際ボランティアの体験談を聞いたりすることになる。

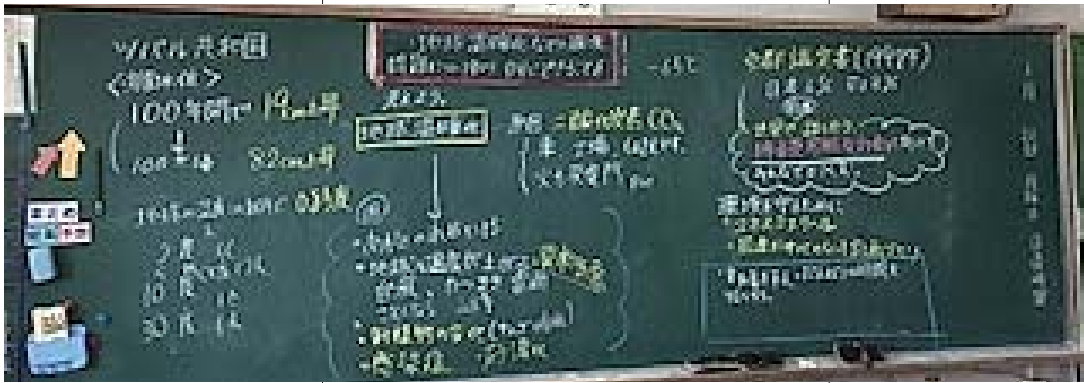
まず、小単元の学習計画を立て学習活動の見通しをもつことにより、終末の意見文を書く活動につなげていきたい。調べたことをカードに書き、世界地図にまとめることで内容を整理することで、意見文に書く材料を集めたい。

また、難しい文章を読むことを苦手と感じている児童も多いので、体験活動や実際に話を聞く活動を取り入れ、世界の問題が私たちの身近に感じられるようにしたい。

【4】展開計画（全9時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	「世界を知ろう～こんなところに日本人？ マラウイ編」 〈ねらい〉 世界で活躍する日本人や世界の人口、言語の分布、貧富の差について知り、学習問題を立てる。	・世界の人口・言語・文化など多様性や格差について「世界がもし100人の村だったら」を使いながら、参加型体験学習を取り入れることにより、世界の現状を具体的に理解させる。	・世界地図 ・「世界がもし100人の村だったら（開発教育協会）」役割カード
学習問題 世界の問題について調べ、これからの日本や私たちにできることはなんだろうか？			
	【評】世界の国の人口・言語・文化について理解する。（知識・理解）		
2	「国際連合ってなんだろう」 〈ねらい〉 国際連合とその様々な機関について理解する。	・資料をもとに国際連合の様々な機関とその活動が世界平和と安全を守っていることを読み取ることができるようにする。	・HP 国連子どもキッズ ・HP ユニセフキッズ ・HP 日本ユネスコ協会

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
	【評】 国際連合とさまざまな国連機関について理解する。(知識・理解)	・ 国連キッズの HP を使い、国連の場所や仕事内容について調べ学習を行うことで、国連について理解させる。 ・ 国連には、10 以上の機関があることを知り、その中からユニセフやユネスコなど児童にとって身近な内容を選び各自で調べさせる。 ・ タブレットのアプリ、ロイロノートを使い、調べたことをまとめ、蓄積し、学び合いに活用させる。	・ HP JICA 地球ひろば ・ HP UNHCR 連盟
3	「世界の平和と安全」 〈ねらい〉 世界平和の大切さや世界において重要な役割を果たしていることを理解する。 【評】 調べた内容を交流し、世界平和の大切さと我が国が果たしている役割を理解している。(知識・理解) 〈板書〉	・ 前時に調べたことを、ロイロノートを使いながら友達同士確認し合う。ユニセフ・ユネスコ・国連難民高等弁務官事務所の目的と活動を調べ、世界の平和や安全のために重要なはたらきをしていることに気付かせる。 ・ 調べた情報を元に、ワークシートにまとめさせる。 ・ 世界の平和と安全のために国連に関する機関が様々な役割を果たしていることを理解し、日本はどのような役割を果たすべきか考えさせる。	・ HP 国連子どもキッズ ・ HP ユニセフキッズ ・ HP 日本ユネスコ協会 ・ HP JICA 地球ひろば ・ HP UNHCR 連盟 ・ HP 外務省キッズ
4	「地球環境を守る取り組み」 〈ねらい〉 持続可能な社会になるために取り組んでいることを知り、環境のために自分たちにできることを考える。	・ ツバル共和国の現状を知り、海面上昇の理由を考えさせる。 ・ 気温の変化や海面水位の上昇について調べる。 ・ 地球温暖化がもたらす様々な問題について知る。 ・ 動画を使い、温暖化の影響とその後の取り組みについて確認させる。	・ JICA 地球ひろば ・ HP 全国地球温暖化防止活動推進センター ・ HP 国連広報センター

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
	【評】地球環境の悪化を防ぎ、持続可能な社会を実現するために、様々な努力をしていることを理解している。(知識・理解) 〈板書〉	・ 環境問題の原因と解決のため、1992年に開催された地球サミットでの気候変動枠組条約について知る。 ・ 環境のために自分にもできることは何か考えさせる。	・ NHK for school 中3社会動画『持続可能な社会』の一部
			
5 6 本時	「こんなところに日本人? ~ NGO と ODA など国際協力編」 〈ねらい〉 NGO と ODA や青年海外協力隊の活動について学び、国際協力に関わる人々の思いや願いについて理解する。 【評】NGO や青年海外協力隊の活動の様子や願いや苦勞を理解しようとしている。(知識・理解)	・ NGO や ODA など様々な国際協力について知る。 ・ 青年海外協力隊経験者にゲストティーチャーとして体験談を語ってもらう。 ・ 自分の住む国の様子や文化の違いなどに気付かせる。 ・ 国際協力を学ぶ中で自分にできることを考えさせる。	・ HP JICA ボランティア事業
7	「世界の問題」 〈ねらい〉 調べてきたことをふりかえり、カードにまとめる。 【評】調べたことを世界地図に整理しながらまとめることができる。(観察・資料活用)	・ これまで調べてきた世界の問題について、ワークシートに整理する。 ・ 国連機関や今まで学習した場所を地図帳でおさえる。 ・ 調べたことを比較したり、関連づけてり総合したりして、日本が世界において重要な役割を果たしていることを知り、世界平和と発展のためにこれからの自分ができることを考えさせる。	・ 地図帳

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
	まとめ 世界には様々な問題があるが、解決に向けて、世界の人と協力しながら平和と発展のために自分にできることを考えて行動する。		
8	「意見文を書こう」 〈ねらい〉 調べてきたことを整理し、意見文を書く。 【評】 調べたことを比較したり、関連づけたり、総合したりして我が国が世界にとって重要な役割を果たしていることに気づき、今の自分になにができるのか文章にまとめることができる。(思考・判断・表現)	・ 前時に考えたことを整理し、テーマを選んで意見文を書く。 ・ 内容を確認し、発表会の練習をする。 ・ 意見文がかけない児童に、例文を示したり、学習してわかった事実と自分の考えの変化を比較したりする。	
9	「世界発見！発表会」 〈ねらい〉 書いた意見文を発表し、意見を交換し合う。 【評】 友達の意見を聞きながら、自分の考えと比較したり、関連づけたり、総合したりしている。(思考・判断・表現)	・ 書いた意見文を友達同士読み合う。 ・ 感想を交流し合う。	

【5】 本時の展開 (5.6 / 9)

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (8分)	1 マラウイで出会った日本人を紹介する。 ・ 栄養士として6大栄養素を教える木原さん ・ 青少年活動に取り組む櫻井さん ・ 薬剤師として薬の整理整頓をする砂田さん 2 めあてをたてる。 日本は、どのような国際協力をしているのだろうか。	・ マラウイ国で出会った日本人はどんな活動をしているのか、クイズを出し、国際協力について考える。 ・ 学習計画表で学習内容を確認める。	・ プロジェクター 青年海外協力隊の方々の紹介写真

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
展開 (10分)	3 NGO と ODA について知る。 ・ NGO（非政府組織） ・ ODA（政府開発援助）	・ 国際協力とは、十分な社会環境が整備されていない国に対し、産業や生活のための援助を日本などの先進国が行っていることや、NGO や ODA の違いについて説明する。 ・ 日本も戦後は様々な支援に頼っていたことを紹介する。 ・ 写真やグラフなど見やすい資料を掲示することで、興味関心を高める。	・ HP JICA の活動実績や活動内容
(60分)	4 GT に青年海外協力隊の体験談を聞く。 ・ ブラジルでの生活 ・ ブラジルでの活動の様子 ・ 日本語教師としての活動の様子 ・ 文化の違いや考え方の違いなど 5 現場で働く日本人の思いや願いを知る。	・ ODA の活動の一つである、青年海外協力隊について JICA 国際協力推進員の福永さんに、ブラジルでの活動の様子や感じたことを、プロジェクターを使って説明してもらう。	
まとめ (12分)	6 まとめる。 支援に必要な人々のために、教育・保健などの分野で国際協力をしている。 7 感想を交流する。	・ 国際協力とは難しいことではなく自分にとって得意なことで協力できることに気付かせることができるようにする。 【評】 NGO や青年海外協力隊の活動の様子や願いや苦勞を理解しようとしている。（知識・理解） ・ 友達同士感想を交流し、お互いの考えを確かめさせる。	

【授業実践の様子】



〈〇×クイズの様子〉



〈ポルトガル語で挨拶している様子〉

ゲストティーチャー JICA デスク鹿児島 福永みゆきさん講話

【6】本時の振り返り

マラウイで出会った日本人の紹介を通し、日本人が海外でどのような活動をしているのか知ることができた。NGO や ODA という言葉を全く知らない児童が多かったが、政府や民間の団体が世界のために支援していることはニューステレビ番組などでなんとなく知っている児童がいたので、今回 JICA 国際協力推進員の福永さんにブラジルで経験したことや、青年海外協力隊の活動などを話してもらうことで、国際協力についての理解が高まったようだった。

【7】単元を通した児童生徒の反応 / 変化

児童の感想カードより

- ・ これからは他国について興味を持ち、いろいろと調べてみたいと思いました。
- ・ 日本が豊かで恵まれている国だということがよくわかりました。
- ・ 世界は不公平だということや、日本は平和で安心して暮らせるということがよくわかりました。読み書きができないと、将来大変だということがわかりました。（1時の言語や文字のアクティビティ後の感想カード）
- ・ （ブラジルの貧富の差が伝わる街の写真を見て）数歩先で世界の貧困が一瞬で変わるの、すごく驚きです。数歩先に困っている人がいるのに、そのままなのは悲しい現実だと思いました。この日本に住む私たちが少しでも手をさしのべることが必要だと気付きました。（福永さんの授業実践後のカード）
- ・ 世界は広い。いろいろな国の言葉があるんだと思いました。



〈7時のワークシート。これまで学習したことも含め、調べてわかったことや、教科書の中に出てくる国の場所や問題などを自分なりにまとめている。〉

単元を通し変容した児童の態度や学習意欲について

- ・ 世界の問題や世界の国について学習したことで世界に興味を持ち、アフリカの国々や文化について詳しく調べ、宅習ノートにまとめる児童の姿が見られた。
- ・ 「青年海外協力隊についてもっと詳しく知りたい。」「将来、青年海外協力隊になりたい。」という児童が増えた。青年海外協力隊は、自分の得意なことでボランティアができると知り、自分も挑戦したいという気持ちが出てきたようだった。
- ・ ユニセフの活動について調べたことで、今まで以上に募金に協力したいという考えをもつ児童が増えた。

途上国・異文化への意識の変容について

■授業前

- ・ アフリカは、動物がいっぱいいるところというイメージしている児童がほとんどだった。
- ・ アフリカの中の国については、エジプトやガーナは出てくるが、他の国名はわからないようだった。
- ・ テレビ番組の影響で、世界のおもしろい祭りや風習に興味がある児童もいた。
- ・ マラウイの生活や衣食住についてプロジェクターを使って紹介したときに、「まずしくて、かわいそう」という意見が数名から見られた。

■授業後

- ・ アフリカやブラジルなどの国の文化や宗教、貧富の差や考え方など日本との違いに気付き、より一層興味を持つようになった。
- ・ 国際協力について自分なりにできることを真剣に考えることができた。ユニセフや赤い羽根募金に協力したい、相手の文化を知って差別をせずに仲良くしたいなどの意見が出てきた。
- ・ 「貧しい＝かわいそう」ではなく、置かれた環境でよりよく生活していくために技術や読み書きを学ぶことやの大切さや、そのために国際協力があるということに気付くことができた。

自己評価

■苦労した点

- ・ 国際協力や国際問題についてわかりやすい資料を提示することが難しかった。
六年生の最後の小单元なので、読解力や理解力がついてきている児童でも、国連の機関を調べる過程では内容が難しく、補足説明が必要だった。
また、情報活用能力に差があり、どんどん調べることができる児童と、最初のページからなかなか進めない児童がいて、担任一人では十分にサポートすることができなかった。しかし、学び合う時間で、同じキーワードを調べた人が集まり、話し合う時間を設定したので、調べて分かった内容をみんなで共有することができた。

- ・ 小中連携加配という立場で2校の小学校で授業実践をしており、2校とも同じ学習指導内容で授業を行った。しかし各学校の各クラスの実態に合わせた資料の準備や内容の精選が不十分だった。
- ・ たくさんある情報の中から、六年生が理解できる情報を選ぶことや、限られた時間の中でたくさんの情報を見つけ出し、大事なキーワードを見つけてまとめることの難しさを改めて感じた。

■改善点

- ・ 本時である5・6時を2時間まとめて行ったが、時間配分がうまくいかなかったので、1時間にして、国際協力について自分の考えを話し合う時間を設定するとより考えが深まったのではないかな。

■成果が出た点

- ・ 児童が毎時間興味関心を持って楽しく授業ができるよう、クイズやゲームなどを取り入れた。普段の授業以上に興味関心を持って取り組んでいた。意見を活発に交流することができた。
- ・ 地理が苦手な児童も、地図帳で国を探したり、自分なりに調べたことをカードにまとめたりするなど、意欲的に活動する姿が見られた。

■備考

【その他の取組】

- ・ 小学校4年生の総合的な学習の時間に「もしも世界が100人の村だったら」を使い、学校で勉強することを考える授業。
- ・ 小学校3年生の総合的な学習の時間「もしも世界が100人の村だったら」を使った世界について調べる学習の導入部分。
- ・ 武岡小、武岡台小、武岡台中にマラウイの文化や世界の国の紹介する掲示物を図書室前に掲示。
- ・ 世界の国の挨拶やお金などの違いがわかる掲示資料を社会室前に掲示。
- ・ あいご会での保護者や地域の方の方向けの勉強会。
- ・ 鹿児島地区小学校社会科研究会での実践発表「小中連携加配による国際理解教育の実践発表」



図書室前掲示



あいご子供会発表の様子

添付資料・参考資料

■参考資料

第1時

総務省統計局 <http://www.stat.go.jp/data/sekai/0116.htm>

世界の人口 <http://www.arkot.com/jinkou/>

第2時～3時

国連キッズ <http://www.unicef.or.jp/kids/>

ユニセフ 子供と先生の広場 <https://www.unicef.or.jp/kodomo/>

日本ユネスコ協会連盟 <http://www.unesco.or.jp/>

国連 UNHCR 協会 <https://www.japanforunhcr.org/>

キッズ外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/>

JICA 地球ひろば <https://www.jica.go.jp/hiroba/>

第4時

全国地球温暖化防止活動推進センター <http://www.jccca.org/>

国連広報センター <http://www.unicef.or.jp/>

第5～6時

JICA ボランティア事業 <https://www.jica.go.jp/volunteer/>

■動画資料

NHK for school 中3教材『持続可能な社会』

■文献資料

教科書 『新編 新しい社会下』 東京書籍

資料集 『作業でつかむ！比較で発見！社会科資料集6年』 正進社

地図帳 『新しく学ぶ小学生の地図帳』 帝国書院

『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』 開発教育協会

7時のワークシート

世界の未来と日本の役割 年 組 名前 ()

◎ 調べたことをまとめよう。



〈 国際協力 〉

〈 持続可能な社会 〉

〈 国旗と国歌 〉

学習してわかったこと

アフリカ州 ～特定の生産品にかたよる生活からの変化～

松 山 真 子

MATSUYAMA MAKO

鹿児島市立武岡中学校（鹿児島県）

担当教科：社会科

●実践教科：社会 中学社会（地理・歴史）

●時 間 数：4時間

●対象学年：中学1年生

●対象人数：1クラス37名（全109名）

実施概要

【1】単元のテーマ・目標

アフリカ州の自然・歴史と文化、産業の特色について雨温図、分布図、写真などの資料を使って、基礎的・基本的な知識を身に付け、アフリカ州の問題と日本のつながりや、本当の意味での『豊かさ』について考える。

【2】単元の評価規準例

（ア）関心・意欲・態度

アフリカ州に興味関心をもち、意欲的に取り組んだり、文章にまとめたりすることができる。

（イ）思考・判断・表現

アフリカの発展や課題について多角的に思考し、文章にまとめたり、説明したりすることができる。

（ウ）技 能

アフリカ州の特色について雨温図や分布図、写真などの資料を読み取ることができる。

（エ）知識・理解

アフリカ州の自然、環境や文化、産業の特色について基礎的・基本的な知識を身に付ける。

【3】単元設定の理由（児童／生徒観・教材観・指導観）

（1）教材 観

本単元は、学習指導要領の中学1年の地理的分野の目標の（2）と（3）の一部を達成することをねらいとして設定した。生徒にとってあまり身近ではないアフリカ州の自然、歴史や文化、産業の特色について調べ、なぜアフリカの産業が特定の作物に偏っているのかを歴史的文化的な背景を踏まえて理解することをねらいとしている。また、アフリカの現状を知り、さまざまな問題を多面的多角的に考える姿勢を育てたい。

そこで、アフリカの代表的な地形を地図から読みとらせ、地形が気候や人口分布に影響を与えていることをおさえたい。またアフリカのほぼ全土がヨーロッパの7か国の植民地だった歴史や公用語、宗教との関連に気付かせ、現在も結びつきがあることや経済発展上の課題などを考えさせたい。

(2) 生徒観

本校の生徒は、興味のあることに対して、積極的に取り組む姿がみられる。特に歴史的分野は興味があり、どの時代の誰がどんなことをしたのか詳しく話したり、発表したりする姿が見られる。しかし一方で地理的分野の関心が低く、世界の国に対してあまり興味をもっていない現状がある。アフリカには「動物がいる」「貧しい」「砂漠がある」という漠然としたイメージしかなく、アフリカの国名を尋ねてもあまり出てこない。そこで、アフリカの地理や国名、自然環境や文化、産業など基礎的な部分を DVD などの視聴覚教材を使いながら学習することで、興味関心に結び付けたい。

また、根拠を示しながら自分の意見をまとめたり、友達の意見を自分の考えと照らし合わせながら聞いたりする時間が十分にとれていないので、1 学期に学習した基礎的な内容を踏まえながら、考え話し合う時間が必要だと考える。1 時間の授業の中に個人もしくはグループで考える時間を確保し、学習で得た知識を使いながら思考する時間を設定したい。

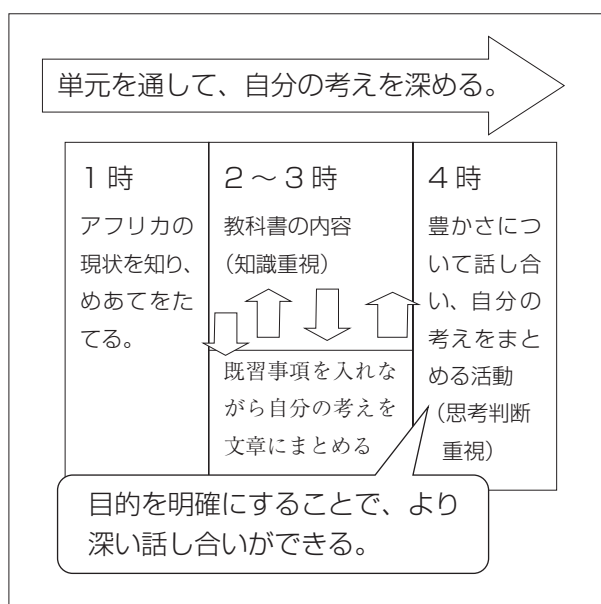
(3) 指導について

本題材ではアフリカ州の基礎的基本的な内容をおさえながら、アフリカ州の経済や環境などの問題を考えさせたい。導入では、児童の実態をもとに参加体験型の活動を取り入れることで、学習意欲を高めさせたい。

本時では、アフリカ州と日本とのつながりをクイズにし、アフリカと日本との経済面でのつながりに気付かせ、歴史的な背景を踏まえながら、現在の農業や鉱業などの産業や輸出の現状を知り、モノカルチャー経済のメリットやデメリットについて多面的多角的に考えさせるため、『入れ子構造』モデルを採用する。

(4) 入れ子構造モデルについて

展開では教科書で学ぶ内容を使いながら、毎時間終末に自分の考えを書かせ、最後の豊かさについての話し合いが、十分に深まるようにしていく。そのために 2 時と 3 時の学習時には最後に学んだキーワードを使ってまとめを考えさせ、4 時に話し合い活動を取り入れながら、自分の考えをまとめることで単元を通した学びにつながっていく。



【4】展開計画

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	「マラウイと日本とのつながりを考える」 〈ねらい〉 マラウイの国と日本の衣食住を比べながら紹介し、学習することの大切さを考える。	世界にたくさんある国の人口、言語の違いを、『世界がもし100人の村だったら』の中にあるカードを使いながら学び、マラウイの国と日本の国との衣食住の違いに気付かせる。 学校教育の違いを説明し、改めて学校で学習できること、教育を受けることの大切さに気付かせる。	・世界地図 ・『世界がもし100人の村だったら〈開発教育協会の役割カード〉』 ・パワーポイント
アフリカ州の自然環境や文化、産業などを学習し、アフリカの発展やほんとうの意味での豊かさについて考えよう。			
2	「アフリカ州をながめて」 〈ねらい〉 アフリカ州の自然環境、歴史、文化、産業にはどのような特色が見られるのかをおさえ、ノートにまとめる。	アフリカ州の地形や歴史、文化などの特色について、写真や動画を視聴しながら学習する。 植民地だった歴史に触れ、現在の国境や公用語、伝統文化について特徴をワークシートにまとめさせる。	・『新しい社会 地理』 ・『グラフィックワイド 地理（世界・日本）』 ・DVD『世界の諸地域4 アフリカ州』
3 本時	「アフリカの産業と新たな開発」 〈ねらい〉 アフリカの農業や鉱業などの産業にはどのような特色があるのか調べまとめる。	ゲーム機、チョコレート、コーヒーなど生徒になじみがあるものを中心にカードを用意し、アフリカと日本がどのようにつながっているのか考えさせる。 植民地の時代より続くプランテーション農業や鉱産資源の輸出から、モノカルチャー経済のメリットやデメリットを考えさせる。	・『新しい社会 地理』 ・『グラフィックワイド 地理（世界・日本）』 ・『授業に役立つ統計資料2017』
4	「アフリカの課題と展望」 〈ねらい〉 アフリカの発展に向けてどのような課題を抱えているのか話し合う。	ナイロビ市内の2つの写真やアフリカの各地域の写真から、アフリカの生活や平均寿命を比較し、共通点や相違点について話し合わせる。 アフリカの発展に向けて、日本の非政府組織の働きやアメリカ連合（AU）についておさえる。 学習したことを振り返り、「豊かさ」とは何か考えさせる。	・『新しい社会 地理』 ・『グラフィックワイド 地理（世界・日本）』 ・『国際理解教育実践資料集 ～世界を知ろう！ 考えよう～』 ・『豊かさと開発』

【5】 本時の展開 (3 / 4)

過程・時間	学習活動	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (8分)	1 「8枚のカードの中からアフリカとつながりがあるものはどれでしょう。」 〈生徒の反応〉 「チョコレート」「コーヒー」 「蚊取り線香は日本だと思う」 2 めあてを確認する。 アフリカの農業や鉱業などの産業には、どのような特色があるでしょう。	・ アフリカとつながりがあるものを話し合い、選ばせる。 ・ 選んだ理由を発表させることで、アフリカとのつながりに気付かせる。 ・ めあてを確認させる。	『国際理解教育実践資料集～世界を知ろう！ 考えよう～』
展開 (30分)	3 アフリカでは茶、コーヒーなどの商品作物の栽培がさかんであることを説明する。 4 アフリカで産出する鉱産資源の種類と分布についてワークシート（白地図）で確認する。 5 鉱産資源を凡例に従って原油・ダイヤモンド・銅にマークに色を塗る。 6 アフリカの資源と貿易相手国について説明する。 7 アフリカの産業の仕組みである、モノカルチャー経済のメリットとデメリットを考える。 〈メリット〉 ・ 植民地時代から続く取引先 ・ たくさんの量を一斉に作り、取引をすることができる。 〈デメリット〉 ・ 天気や景気で価格が大きく変動。 ・ 一部の人が豊かになる。	・ アフリカの歴史をDVDで確認しながら、なぜ特定の作物だけを栽培して輸出しているのかを考えさせる。 ・ 白地図と教科書を使いアフリカでとれる鉱産資源の内容と場所を確認させる。アフリカ北部が原油、南部はダイヤモンドが採れることを確認させる。 ・ 資料集を使いながら、貿易相手国と商品作物を確認させる。 ・ 一次産品（農産物・水産加工物・鉱産資源など）が多いことを確認させる。 ・ モノカルチャー経済のメリットとデメリットを話し合わせる。 ・ 鉱産資源の輸出国や貿易相手国の帯グラフを確認し理由を考えさせる。 ・ グループで意見を交流させる。	DVD 世界の諸地域 4「アフリカ州」 アフリカ州のあゆみ 『グラフィックワイド 白地図作業帳』 『グラフィックワイド地理資料集』 『授業に役立つ統計資料 2017』

過程・時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
まとめ (12分)	8 アフリカの農業や鉱業の特色についてまとめる。 アフリカは、ヨーロッパ人によって造られたプランテーションで特定の農作物を栽培したり、鉱産資源を産出したりして、欧米諸国や日本に輸出するモノカルチャー経済がさかんである。	・モノカルチャー経済についてキーワードを使いながらまとめさせることで、授業の中で出てきた内容を、復習させながら取り組ませる。	

【授業実践の様子】



アクティビティの様子（資料 1）



アフリカクイズ（資料 2）

【6】 本時の振り返り

アフリカ州について授業をする中で、アフリカについて興味をもたせるためにアフリカと日本とのつながりについてクイズを出し、産業や鉱産資源について興味をもってもらえるようにした。DVD やパワーポイントなど視覚教材を取り入れ、集中力が途切れないようにした。また、白地図に色を塗らせることで、どこの地域で何がよくとれているのかおさえることができた。最後のまとめ部分は、授業の中に出てくるキーワードを使い、各自が文章でまとめるようにすることで、自分なりに課題について考えながら意欲的に取り組むことができた。

【7】 単元を通した児童生徒の反応 / 変化

〈授業後の感想カードより〉

- ・ 日本とマラウイの風景が違うことや学校へ行けない人がいることに驚きました。
- ・ 日本人の隊員さんが子どもたちをたすけているのがすごいと思いました。英語をしっかりと勉強して世界の人と通じていきたいです。
- ・ 学校は何のためにあるのか、めんどくさいなどと思い、学校がずっといやでした。でもマラウイやアフリカの子どもたちの中には行きたくてもいけないと知って、わたしはすごく幸せなんだと思いました。

途上国・異文化への意識の変容について

■授業前

- ・ アフリカは遠いところ、怖いところというイメージだった。
- ・ 赤い羽根やユニセフなどの募金活動を行うが、募金がどこへいくのかわからない。アフリカは日本から遠く離れた知らない国といったイメージだった。

■授業後

- ・ 単元テストをしたところ、他の地域よりもよく理解し、問題を解くことができていた。(平均 77 点)
- ・ 授業中に発問や質問が多く、興味関心を持って取組む生徒が増えた。
- ・ 最後に考えを文章化することで、意欲的に調べたり、発問したりする姿が見られた。
- ・ アフリカに行ってみたい、青年海外協力隊になりたい、いろいろな国で働きたいという意見を聞くことができた。
- ・ 豊かさや貧富の差を考えたことがなかったのでとても新鮮だった。日本は、豊かな国だと思った。
- ・ 笑顔な人が増えて、楽しく生活できることが豊かさだと思った。といった意見も多くみられて、改めて日本のよさに気付くことができた。

自己評価

■苦労した点

開発教育を取り入れて授業をつくるために 2 時 3 時では知識重視の授業を行い、4 時の授業では、思考判断表現を重視する流れで授業を行った。50 分の授業の中で、考える時間の確保が難しかった。

■改善点

- ・ 限られた時間の中で学習するので、課題を明確にすること。
- ・ 様々な情報の取捨選択を行うこと。

■成果が出た点

単元後に行うテストの平均が 73 点で、知識理解の内容をほとんどの生徒が記入することができた。また、記述式の記事もキーワードを使いながら自分なりに考えを書く生徒の姿も見られた。アフリカについて興味関心が高まった。

■備考

- ・ 中学校の先生方も協力的で、この授業の後にいろいろな国の言語で「廊下は歩きましょう」とか「静かにしましょう」などの注意書き看板を作って掲示していた。

参考資料

- 『世界がもし 100 人の村だったら』 マガジンハウス編
- 『ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら第 5 版』 開発教育協会
- 『国際理解教育実践資料集 ～世界を知ろう！考えよう！～』 JICA 地球ひろば
- 『統計情報で見る世界と日本 授業に役立つ統計資料 2017』 日本文教出版
- 中学校資料集『グラフィックワイド地理 世界・日本』 東京法令出版 教育出版部
- 中学校教科書『新しい社会 地理』 東京書籍
- 『2016 年度版 開発教育白書 日本の国際協力』 外務省編
- 『豊かさの開発』 開発教育協会

IV. 参 考 資 料

農作物を頭に載せて運ぶ女性
30日、マラウイのリロングウェ



日本語と笑顔で出迎え

どこまでも続く水平

線、茶色に染まった大地。飛行機の窓から見える圧倒的なスケールに目を奪われた。香港、南アフリカのヨハ



ネスブルグを経由し、飛行機で約17時間。アフリカ南東部のマラウイに30日到着した。首都リロングウェの国際空港ターミナルは、鹿児島空港よりも小さい。管制システムなどは、日本の支援を受けながら整備が進

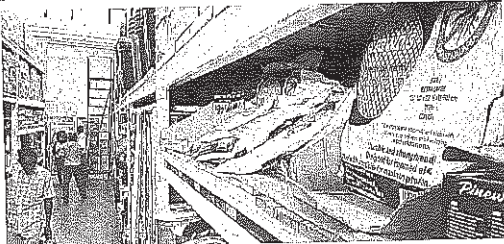
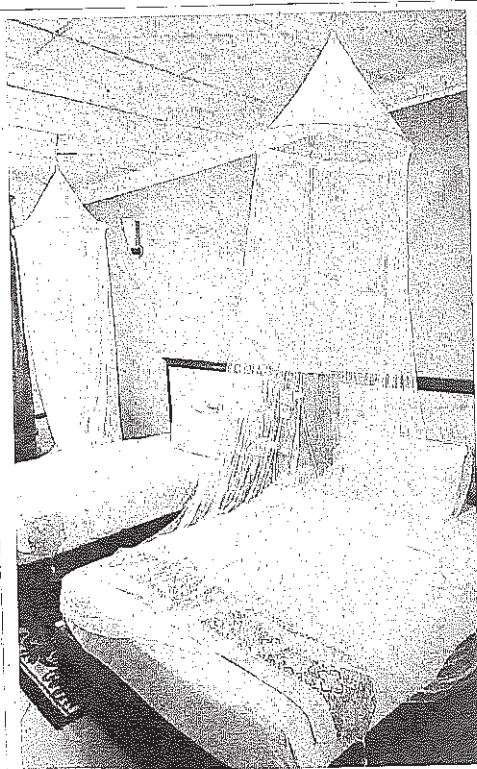


「ごちそうさま」。入国準備の前、空港関係者とみられる男性から日本語で声を掛けられた。間違っ覚えてしまったのだろう。もてなそうという気持ちがうれしかった。

空港の外は、思っていたよりも涼しい。30度には届いていないから、猛暑の日本よりは

るかに快適だ。もっとも、今の季節は日本の2〜3月にあたる。日中の日差しは強いが、夜は肌寒いという。空港から市街地のホテルまで、車で約30分。市街地に入るまで信号は一切なく、路上で物を売っている人の姿が目立つ。

鹿児島県をはじめ九州の教員が参加する国際協力機構（JICA）の海外研修プログラムに同行し、9日までの日程でアフリカのマラウイを訪れている。現地で見聞したことを随時報告する。
（報道部・加藤武司）



マラリア対策に蚊帳



フリカにいてることを実感させられた。天井からベッドを覆うように

滞在するホテルの部
屋に入ると、改めてア
帳」だった。日本では

ホテルの天井からつり下げられた蚊帳(マラ
リア対策をアビールしたパッケージで、スーパ
ーで売られている蚊帳

いずれも7月30日、マラウイ

めったにお目にかかれ
ない。
部屋には薄型の大画
面テレビがあり、イン
ターネットの通信環境
も整っている。現地で
はランクの高いホテル
だ。蚊帳は一見不釣り
合いだが、蚊が媒介す
る伝染病「マラリア」
予防には効果絶大。最
初の夜は圧迫感を覚
えたが、すぐに慣れ
た。

現地では、「モスキ
ートネット」と呼ばれ
ホテルからすぐ近くの
スーパーにも売ってい
た。店員に売れ行きを
尋ねると、「月に5個
ぐらいいと返ってきた。
簡単に買えるものでは
(報道部・加藤武司)

なさそうだ。

今もアフリカではマ
ラリアで命を落とす人
が大勢いる。世界各国
の支援団体が蚊帳を贈
る活動に取り組んでい
るが、普及が進まない
現状もあるようだ。配
られた蚊帳を転売した
り、魚を取る網にした
りするケースが後を絶
たないという。

マラウイで看護師と
して働く田中夢子さん
(30)は病院を訪れる妊
婦に蚊帳を渡してい
る。「日々食べていく
のに精いっぱいの人た
ちもいる。ただ配るだ
けでは使ってもらえな
い」と課題を指摘し、
「目的と使い方もきち
んと伝えることが大
事」と強調した。

2017年8月2日 南日本新聞

道路に連なる日本の中古車。車体の文字やマークに日本の名残をとどめる車も少なくない
＝1日、マラウイのリロングウェ



故障少ない日本車人気



マラウイの道路は日

本車だらけだ。車列を

眺めていると、日本の

中古車が10台以上連な

っている光景も珍しく

ない。車体に日本の会

社や老人ホームなどの

名称がそのまま残って

いる車もよく見かけ

る。遠く離れたアフリ

カでも、日本車の信頼

性は高いようだ。

舗装されていない悪

路が多いマラウイで

は、丈夫で故障しにく

いことが何よりも求め

られる。特に各地を結

ぶ交通手段として普及

している「ミニバス」

の大半は、日本のワン

ボックスカーだ。

マラウイの道路は日

本車だらけだ。車列を

眺めていると、日本の

中古車が10台以上連な

っている光景も珍しく

ない。車体に日本の会

社や老人ホームなどの

名称がそのまま残って

いる車もよく見かけ

る。遠く離れたアフリ

カでも、日本車の信頼

性は高いようだ。

舗装されていない悪

路が多いマラウイで

は、丈夫で故障しにく

いことが何よりも求め

られる。特に各地を結

ぶ交通手段として普及

している「ミニバス」

の大半は、日本のワン

ボックスカーだ。

マラウイの道路は日

本車だらけだ。車列を

眺めていると、日本の

中古車が10台以上連な

っている光景も珍しく

ない。車体に日本の会

社や老人ホームなどの

名称がそのまま残って

いる車もよく見かけ

る。遠く離れたアフリ

カでも、日本車の信頼

性は高いようだ。

舗装されていない悪

路が多いマラウイで

は、丈夫で故障しにく

いことが何よりも求め

られる。特に各地を結

ぶ交通手段として普及

している「ミニバス」

の大半は、日本のワン

ボックスカーだ。

マラウイの道路は日

本車だらけだ。車列を

眺めていると、日本の

中古車が10台以上連な

っている光景も珍しく

ない。車体に日本の会

社や老人ホームなどの

名称がそのまま残って

いる車もよく見かけ

（報道部・加藤武司）

2017年8月3日 南日本新聞

「シマ」を手でちぎって食べる子ども

11月2日、マラウイ南部のジンバ



ネスミの串刺しを手にする男性

11月4日、マラウイ南部



主食はトウモロコシ粉



て固めた「シマ」。

訪問した現地の学校

マラウイ人が家でほ

ぼ毎日食べているもの

がある。トウモロコシ

を粉にして、湯で混ぜ

で初めて食べることが

できた。見た目は餅の

よう。味はあまりしな

い。手でちぎり、炒め

た野菜などのおかずと

一緒に口に運ぶ。日本

人にとつての白米。何

口食べても飽きない

し、どのおかずとの相

性もいい。

ほかによく食べられ

ているのが、「ネスミ

の串刺し」。内臓を取

って塩漬にし乾燥さ

せたもの。市場など

よく売られている。こ

ちらは見えた目がグロテ

スク。頭や毛など形が

そのまま残っている。

目を背けたくなる人も

多いだろう。

勇気を振り絞って尻

尾の部分をかじってみ

た。歯応えがある。ペ

ーコンのような味だろ

うか。まずくはないが、

二口目は遠慮させてい

ただいた。

食生活で気になる部

分もあった。とにかく

マラウイとモザンビークの国境を示す石の標識 8月1日、マラウイ



緩やかで平和な国境

マラウイ中央部にあ
る首都リロングウェか
ら車で南部の街に出掛
けた。高速道路はない
が、街中以外はほとん
どの車が時速100キロ
ぐらいで走っている。
歩道や横断歩道はな
く、車のすぐ脇を歩く
人や横切ろうとする人
も多い。事故が起きな
いか、冷や冷やした。
途中、隣国モザンビ
ークとの国境沿いに入
った。両国を隔てる壁
や柵は見当たらない。
あるのは一定間隔で置
かれた石の標識のみ。
起点からの距離を表す
「マイルストーン」の
ようなものなのだろう
か。国境を示すものも
この石だけだった。



笑顔でおどけてみせる
子どもたち

8月1日、マラウイ



取り締まる兵士など
もない。誰でもいつ
でも行き来できる国
境。同行したJICA
(国際協力機構) 関係
者によると、モザンビ
ーク側の住民が、国境
を越えてマラウイの病
院に通うこともある。
まるで隣町にでも行く
かのような感覚だ。
道路沿いで遊ぶ子ど
もたちに車内からスマ
ートフォンのカメラを
向けると、はじけるよ
うな笑顔が返ってき
た。この緩やかで平和
的な国境がいつまでも
続いてほしいと思っ
た。

(報道部・加藤武司)

2017年8月7日 南日本新聞

スマホやタブレットを前に語り合う女性たち
＝7月30日、マラウイのリロングウェ



携帯電話急速に普及

首都リロングウェのショッピングセンターに足を運んだ。一角にあるカフェで若い女性たちがくつろいでいた。テーブルにはスマートフォンとタブレットが置かれている。

マラウイの若者たちはスマホで何をしているのだろうか。声を掛けてみると、一人の女性が「ブラックミュージックなどを聴くのが楽しい」と答えてくれた。



近年、携帯電話が急速に普及しつつあるという。ただ、スマホは日本円で1万円ほどするため、購入者は富裕層に限られるという。多

くの人はいわゆる「ガラケー」を選んでいる。日本のように携帯電話会社と契約するのでなく、あらかじめ料金を支払うプリペイドカード方式が一般的。

(報道部・加藤武司)

〓おわり〓

2017年8月8日 南日本新聞

ゆつたりと力強く

アフリカ
マラウイの暮らし



広大な大地

訪れた時は雨期から乾期に変わる前、主要穀物のトモロコシがほとんど刈り取られた大地では、牛が放牧されていた

マラウイ南部



長縄跳び人気

マラウイの学校でも長縄跳びは人気だ。日本のように跳んだ回数を決めるのではなく、かかんな髪から髪がはねて揺れ動くように楽しんでいる。並外れた跳躍力に驚かされた。マラウイ南部のゾンバ

鹿児島県など九州の教員が参加する国際協力機構「JICA」の海外研修プログラムに同行し、7月末から9日間、アフリカ南東部のマラウイを訪れた。福岡空港から直飛、南アフリカのヨハネスブルク経由で約4時間、明るく穏やかな国民性から「ウォーム・ハート・オブ・アフリカ」「アフリカの真の心」と称されるマラウイで、カメラ越しに見えぬ人々の暮らしの一部を紹介する。

(報道部・加藤武司)



巻き
スカート

「チンジン」と呼ばれる色彩豊かな布を巻きスカートにして、頭に物を載せて歩くのがマラウイ女性のスタイル。ウィッグ(かつら)を巻け、おしゃれを楽しむ女性も多い。南部のリロングウェ



カバが
すむ川

滞在したホテルに面した川で、朝日を浴びながら魚をする住民。ホテルは国立公園の近くにあり、川には野生のカバが生息している。前後に鳴き声が聞こえてきたが、姿を確認することはできなかった。南部のリウオンデ



シマ

「トモロコシの粉を固めて作る主食の「シマ」。子どもたちは熱い鍋を素手でつかみ、力強く粉を混ぜていく。幼いときから家事を手伝っており、生活力に付いている。南部のゾンバ

先生たちが見た マラウイ

JICA九州研修同行記

▶▶ 1

赤土の校庭に足を踏み入れた。宮崎南高校(宮入れると、子どもたちの(崎市)の石川透教諭(43)力強い歌声が響いていのは地元のひとつと踊りた。全身を揺らしながらを題材に選び、準備して歓迎の歌を歌っている。きたお面や法被を手渡しひたむきな姿に涙を流して感動する教員もいた。

マラウイの教育制度は、6歳で入学する初等学校が8年間、中等学校が4年間の「8・4制」を導入している。この日も少しずつ慣れていき、教員8人が訪れたのはマラウイ南部のゾンバにある初等学校。出迎えてくれたのは7年生の約30人だった。

書道にけん玉、折り紙。教員たちは、日本の文化をテーマに交流授業を感じた」と語った。

交流授業

教師たちが日本とマラウイの教育カリキュラムの違いを実感する場面もあった。志學館中・高等部(鹿児島市)の祝迫創教諭(35)は子どもたちにマラウイを紹介する絵を描くように呼び掛けた。ところが、子どもたちは戸惑った表情を見せ、なかなか手を動かそうとしなかった。

現地の教員が間に入り、子どもたちに声を掛けると、ようやく好きな食べ物などを描き始めた。現地の教員は「マラウイでは自分の国をイメージして絵を描くような習慣がない」と説明した。同校には農業などの科

あふれる笑顔 夢を語る



石川透教諭(右)からひょっこり踊りを習うマラウイの子どもたち
＝マラウイ南部のゾンバ

どもたちが多い。武岡小学校(鹿児島市)の松山真子教諭(34)は「日本では絵や色を見て、発達段階や性格などを把握する材料の一つにする。マラウイは生活に余裕がなく、学校は必要な知識を学ばせることを優先しているのだ」と推し量った。

交流授業の終盤には、ビデオカメラの前で、子どもたちに将来の夢を語ってもらった。教師、兵士、医師、ジャーナリスト。実際、職業の選択は日本のように多くはないが、夢を語る子どもたちの表情は実に生き生きとしていた。

7月末から8月上旬、鹿児島県を含む九州の教員8人が、国際協力機構(JICA)の海外研修プログラムでアフリカ南部部のマラウイを訪れた。教育や医療などの支援現場で見た開発途上国の今、日本の子どもに何を伝えるべきか。教員たちが悩み、考えた9日間に密着した。(加藤武司)

石川教諭は「自分の思いを自分の言葉できちんと伝えようとする姿に、本来の子どもらしさを感じた」と振り返る。

2017年9月13日 南日本新聞

先生たちが見た

マラウイ

JICA九州研修同行記

街をバスで移動中、車 教員養成や教材の配備が窓の風景を眺めていた教 追いつかない問題が生じ員から驚きの声が上がっている。

多くの電柱が傾いて 専門員らでつくるプロ立っていた。「垂直に立ジェクトチームは地区ごとという考え方が浸透とに教員を集めて教科知していないのだろう」と識や実験手法を教えるは推測する国際協力機構(JICA)職員は、理も携わる。授業は生徒が教科教育の遅れもその一活発に意見を出し合う因と分析した。

JICAは近年、日本 指している。

の中学3年生に当たる生徒が入学する中等学校を受ける学校の教員と意見交換する場が設けられ「中等理科教育強化プロジェクト」を進めた。武岡小学校(鹿児島市)の松山真子教諭(34)は、理数系以外の授業で進学者が増加。その結果、も生徒の質問が増えた

▶▶ 2

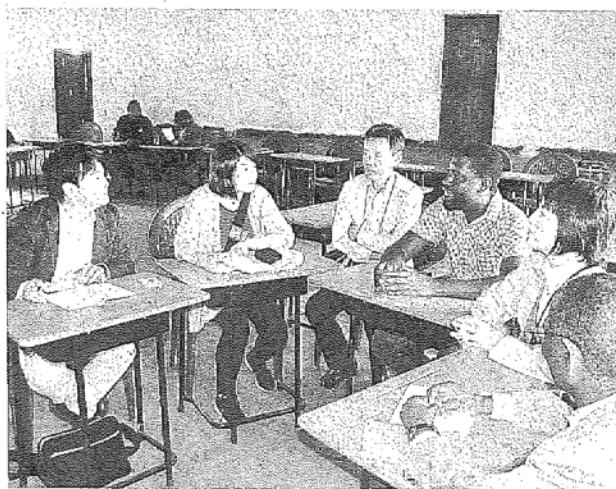
教員養成

理数科教育の遅れ支援

いう話に興味を持った。「授業の変化が生徒の積極的な姿勢を生んでいる」とプロジェクトの意義を感じた。

青年海外協力隊員が教員として支援に入る中等学校にも足を運んだ。教科書を持たない生徒にノートを取る大切さを説く男性隊員、賃金不払いに反発した教師のストライキに巻き込まれた女性隊員。慣れない異国で奮闘する姿に刺激を受けた教員も多かった。

マラウイ南部の中等学校で理科を教える小林勇貴隊員(26)は愛知県出身。IIは現地の生徒に幅広い



職業を知ってもらおうとしたことを紹介。日頃から、ダム見学などを企画からキャリア教育の重要性

を感じているという出水高校(出水市)の橋口勝嗣教諭(49)は「子どもの可能性を広げるいい試み」と共感の言葉を伝えた。

マラウイにとって望ましい教育とは何か。研修を終えた教員に尋ねてみた。橋口教諭は中等学校への進学者が3割にとどまる現状に触れ、「学びたい全ての子どもに機会を与えられる教育が必要」と答えた。

「高校や大学受験のため現地の教師たちと意見交換する日本側の教員」マラウイ

めに勉強している子どもが多い日本と、生きるために勉強しているマラウイとでは学ぶ意義が大きく違う」と感じたのは、江上小学校(長崎県佐世保市)の迎香純教諭(35)。

JICAが支援する学校で、食事前に、子どもたちから手洗いをしよう何度も促されたことが忘れられないという。衛生面が課題の国で、子どもたちに教育がしっかりと行き届いていると感じたと振り返る。「幼いころから栄養、避妊、マラリア対策など生活に必要な知識を学ばせることも求められているのではないか。国の実情に応じた教育の大切を改めて実感した。

2017年9月14日 南日本新聞

先生たちが見た マラウイ

JICA九州研修同行記

「服用できる期限が切られていたり、必要としていた薬が届かなかったり。使えずにそのままの薬もたくさんあるんです」

首都リロングウェに

あるカムス中央病院に薬剤師として勤務する青年海

英語の国に暮らすマラウイ人には読めない字で書

▶▶ 3

支援の薬

現場で見た、理想論だけでは語れない現実に対する感想が相次いだ。「ただ寄付するだけでは支援とはいえない」「国同士が関わっている問題なので、ミスマッチの解消も簡単ではない」



対話重ねる隊員の熱意

まことの普及に取り組む佐藤博亮隊員(26)は山形県出身。技術の定着に力を注いでいた。マラウイでは石で鍋を支えるだけのかまどが一般的。熱効率が悪いので、大量の薪を必要とし、森林資源の枯渇の要因とされている。実際にかまど作りを体験した教員たちは、村民が慣れた手つきでかまどの土台を整えていく様子に驚いた。

佐藤隊員はかまどの作

薬品を扱う病院の職員らに質問する日本の教員。マラウイのカムス中央病院

り方を教える際、村で調達できる材料を選ぶことにこだわった。村で手に入らない材料を少しでも使うと村民たちが受け身の姿勢に変わること学んだからだ。「相手に応じた方法を考えれば、その場限りの支援では終わらないはず」。佐藤さんは自分に言い聞かせるように語った。

「小さい時に日本から来た先生にお世話になった」。小倉南高校(北九州市)の田村栄子教諭(55)は市場で買い物中、現地の人に声を掛けられ、感謝の思いを何度も伝えられたという。隊員一人一人のひたむきな気持ちには、マラウイ人の心にしつかりと刻まれている。

2017年9月15日 南日本新聞

先生たちが見た……

マラウイ

JICA九州研修同行記

学費を払えなくなり、つていた。木で組んだ柱
中等学校を退学した14歳にアロペラを取り付ける
の少年。独学で廃品を利など手作りの跡が随所に
用いて風力発電機を造うかがえる。

り、自宅に明かりをとも 家では今もカムクワン
すことに成功する。マ 皆さんの妹ら家族が暮ら
ラウイを舞台にした実話 す。「お兄さんは何のた
「風をつかまえた少年」 めに風車を作ったんです
は世界中で読まれ、多く か」。教師らの質問に、
の人の感動を呼んだ。 妹は「私たち家族のため」
と答えた。

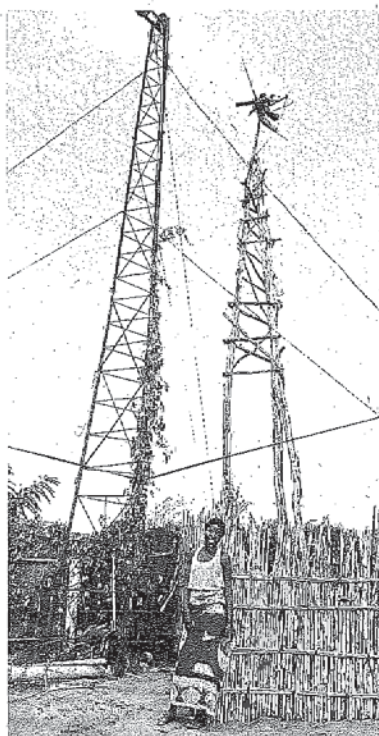
少年の名は、ウィリアム・カムクワンバさん 風車は、家族にさまさ
ム・カムクワンバさん まな恵みをもたらした。
(30)。研修終盤、教師ら 夜の勉強が可能になり、
はマラウイ中部のマシタ 妹の一人は大学に進んだ
ラ村にあるカムクワンバ という。出水高校の橋口
さんの生家を訪ねた。 勝嗣教諭(49)は「家族を
畑に囲まれたレンガ造 思う気持ちが原動力だっ
りの家に入ると、高さ10 たと知って新鮮だった」

以上ある風車2基が立

▶▶ 4

手作り風車

家族への思いが原動力



と振り返る。

海外の大学を卒業した
カムクワンバさんは現在

マラウイの首都リロング

ウェで暮らし、クリスマ
スなどに風車のある実家

に戻ってくるという。小

倉南高校(北九州市)の
田村栄子教諭(55)は祖国

に戻る道を選択したカム

クワンバさんの行動に心

を動かされた。

九州では地元を離れて
都会の大学に進み、その

に伝えたい」と考えるよ

うになった。

いたが、「地元貢献し

たり、大切な人のため

に生きたる幸せがある

ことを、日本の生徒たち

に伝える」と考えるよ

うになった。

風車の前に立つカムク
ワンバさんの妹

マラウイのマシタラ村

都リロングウェの病院。

大勢の家族や親戚が泊ま

り込み、1人の患者を看

病していた。「仕事より

も何よりも家族が大切な

んです」。同行する青年

海外協力隊員がマラウイ

人の思いを代弁した。

一方、汚職は多く、政

治に民意が反映されにく

いなどの現実もあるよう

だ。帰国後の8月下旬

西花畑小学校(福岡市)

の森久幸子教諭(41)ら3

人は、青年海外協力隊員

の夫と結婚し北九州市内

の夫と結婚し北九州市内

に住むマラウイ人女性の
自宅に招待された。

「選挙で政権を奪える
ことが出来るのは、すば
らしい。日本人はお金を
いっぱい持ってるし、物
もたくさんある」。来日
10年のドリカさん(37)は
日本の良い部分を挙げ
た。

「でも」とドリカさん
は続けた。「マラウイと
違い親戚や隣近所との交
流は少なく、1日中誰と
も話さない高齢者もい
る。人と人がつながる
幸せは、お金で買えない
ことも分かった」

支援を受ける側のマラ
ウイ人から見た先進国日
本の姿。教師らは経済発
展だけでは満たされない
幸せの形があることをし
っかりと心に留めた。

2017年9月16日 南日本新聞

先生たちが見た マラウイ

JICA九州研修同行記

マラウイでの研修を子
どもたちにも還元する
か。それぞれの学校に
戻った教員たちは早速、
授業で実践する取組みを
始めている。

マラウイの国旗、トウ
モロコシの粉をこねる女
性の姿。8月31日、鹿
児島市の志學館中等部1
年3組の英語の授業。祝
迫教諭(35)はマラウイ
の子どもたちが描いた数
枚の絵を生徒たちに見せ
た。

生徒たちは、マラウイ
の子ども宛てに日本を紹
介する手紙を書き、祝迫
教諭に託していた。絵は
勉強できる環境が決して

▶▶ 5

授業実践

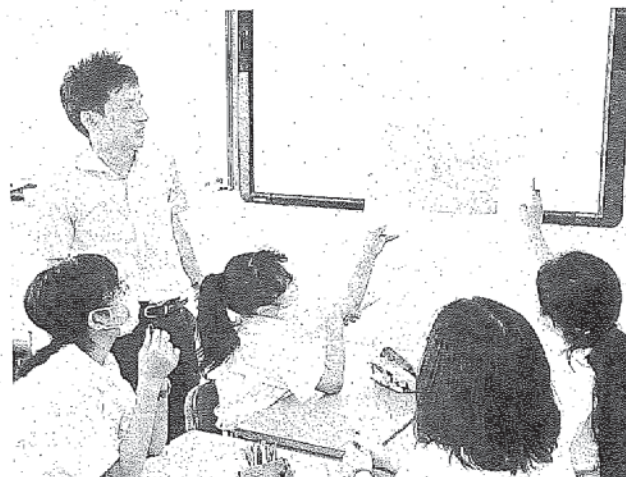
当たり前ではないことな
どを伝える。

武岡中学校(鹿児島市)
の1年生の授業では、ペ
ットボトル3本を準備し
た。3本にはそれぞれ生
徒が読めない外国語で水
や薬などの品目を記載。
その中から薬が入った1
本を生徒に選ばせた。

「勘」や「何となく」
という理由で薬を選ばう
とする生徒たち。先進国
と比べ識字率が低い開発
途上国の人々の苦勞を知
ってもらおうという狙い
だ。松山教諭はマラウイ
女性の進学率の低さなど
を説明し、「本当に苦し
んでいる家族がいるとき

多面的な国際感覚育む

に、何となく薬を選んで
いいのだろうか」と学ぶ
弥永小学校(福岡市)



の竹杉由紀子教諭(42)
は、マラウイで活動する
青年海外協力隊員に児童
向けのメッセージを寄せ
てもらった。「協力隊員
の仕事などさまざまな職
業があることを伝え、失
敗を恐れず飛び込めば必
ず何かが得られることを
教えたい」と意気込む。

米軍基地がある長崎県
佐世保市の江上小学校で
教える迎香純教諭(33)
は「世界の8割は途上
国。まずは『外国』アメ

マラウイの子どもたちが
描いた絵を見て話し合う
生徒(8月31日、鹿児島
市の志學館中等部)

リカ」というイメージを
変えたい」と力を込める。
日本でも着るようなカ
ラフルな新品のTシャツ
がハンガーに掛けて売ら
れている写真などを見
せ、メディアなどが取り
上げるイメージだけでは
語ることができない開発
途上国の今を伝えた。

迎教諭は「途上国を身
近に感じてもらい、最終
的には世界の中で、自分
たちがどんな行動を取れ
ばいいのかを考えさせたい」と書写真を描く。

研修に参加した8人が
目指すのは、足元から世
界を見つめる授業だ。固
定概念にとらわれない、
多面的な国際感覚を持つ
た子どもを九州から育て
たい。教員たちの試行
錯誤が続く。〓おわり〓

2017年9月17日 南日本新聞

おわりに

今年も「生き抜く力」をテーマとした JICA 教師海外研修に、九州の各地より 8 名の教員が参加され、充実した研修を終えることができました。

まずは、学校現場の多忙さや授業時間の制限等、物理的な制約を抱えながらも、それぞれに、素晴らしい実践に取り組まれてきた先生方の高い志とたゆまぬ努力に対して、心から敬意を表します。

さて、知識だけに偏ることなく、思考力や判断力、表現力といったスキルや、主体的に学習に取り組む態度をそれぞれに重視するという方向性については、学校教育法（第 30 条第 2 項）においても定められている通りです。これをもとに、2020 年から全面実施される次期学習指導要領においては、育成すべき資質・能力を以下の 3 点で整理しています。

- (1) 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）
- (2) 知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）
- (3) どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）

ここで、個別の知識・技能の習得は、それ自体がゴールではなく、それを「どう使い」、社会・世界に「どのように関わり」、最終的には「よりよい人生」へとつなげることを重視すると示していることに注目したいと思います。

とはいえ、言うは易し、行うは難し。子どもにそれを求める前に、問われるべきは、大人の態度だと、私は自戒を込めて思います。

このような視点に立った時、実は、JICA 教師海外研修が事前事後の研修を含めて、構造的に目指していることも、実はこのプロセスそのものだと言ってよいと感じます。まずは、大人が体験的に学ぶこと。その学びから得た実感は、何よりもの強みです。

毎年、JICA 教師海外研修に携わらせていただく度に、実体験を通した学びから発せられる言葉には、その人にしか表現できない熱量が伴い、その熱量が人を動かすのだと感じます。熱は伝播し、楽しさは伝染し、いつしか、子どもたちは見たこともないマラウイという国を近くに感じ、知らない世界を知る楽しさを知り、もっともっと学びたいと思う・・・そんなうれしき変化を先生方の報告書の随所に感じました。

私たちが会える先生方は、毎年わずか数名ですが、その先生方の向こうに、たくさんの子ども達がいることを想像すると、わくわくします。そして、交わされる言葉や

学習プロセスの中で、子どもたちの世界を眺めるレンズが、少しずつ広角になり、この世界は信じるに値することをほんのわずかでも感じてくれているとしたら、こんなにうれしいことはありません。

将来の予測が困難で複雑かつ変化の激しい社会ですが、その中にあっても変わらないものを見失わず、人類共通の課題に対して主体的に関わり続ける生き様を示せる一人の人間でありたいと願いながら、同じ志を持つ先生方と出会えた奇跡に感謝しつつ、今後ますますのご活躍を心よりお祈りしております。

2017 年度 教師海外研修 事前・事後研修ファシリテーター
エデュケーショナル・サポートセンター 松 本 亜 樹

